
ポケットモンスター ブレイカ

作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ブレイカ

【NZコード】

N6271Q

【作者名】

作者

【あらすじ】

【第一部】

イッショからやってきましたカントーに！
そもそも旅に行くことになつたぜ！
突然すぎるだつて？
お前ら俺を誰だと思つていやがる！
よつしや行くぜえ！

【第一部】

世間が私を否定した。

だから事私は否定した連中の象徴になる！

このホウエン地方の英雄に私はなる！

The fight is inevitable .

（別にあらすじの元ネタだけでは進みません他のもあります）

後キーワードが入りきらないものがあつたため

いろいろと略しています。3つ程度。

後、アニメの設定などが混ざっています。

主人公以外の恋愛もたらふくあります。

なんか趣向が偏っています。

エキサイト翻訳だから英文があつてているか不安

後、キャラ紹介で3サイズとか詳しく書いてたりするのってどうなんだろう。

この小説について

この小説についてですが一応は原作前の話となつております
ジムリーダーが別人出合つたりしたりします。

さらには原作キャラクターの家族構成が変更があつたりします。
オリジナルキャラの子供がいたりなどもします。

ポケモンバトルよりもストーリー重視です。

ポケモンバトルのシーンはかなり考えるのに時間がかかるので。

第一部・第一部・第三部……と何部かに分かれています
一部ごとに根本的なストーリー目的が違います。
最終的にはポケモンリーグ優勝という目標はあります。

キャラクター設定に書かれているキャラクターの声優の声優ネタを使つことが時折あります。

できれば確認して覚えておいてください。

と言つてキャラクターの名前は声優が演じたキャラから取つている
ものが多いです。

といつていない物もいくつかあります。

あと、読んだら感想をくれるとうれしいです。

ではよろしくお願ひします。

オリジナルキャラクターの名前の由来（前書き）

あくまで名前の由来であり、キャラクターの性格には全くないとは言えませんが、影響はあまりないとthoughtください。

オリジナルキャラクターの名前の由来

【第一部】

マサムネ なんとなくかっこいい感じの名前である。

ミズホ 他小説のキャラの名前の流用である。

シモン グレンラガンの主人公の名前

トガミ とある魔術の禁書目録の上条 当麻

カナデ なんとなく

カミカ 声優のかないみか

カナブ カナブン

カイのしん 昔な感じに

ガイト 舞人 + 凱 ÷ 2 したもの。（勇者シリーズの檜山さん声

の主人公）

ガオイン

ユウミ 上記の搭乗ロボットの名前を組み合わせたもの。

カミコ 勇者をもじったもの

シャドウ とある科学の超電磁砲の御坂 美琴

サユキ ソニックシリーズに登場するライバルキャラ

桜 + 雪

ウルサ 煩い

キイガ 黄色

トラスケ 昔ながらのカツコよや

ウリカ ポケモンのタマムシジムリーダーのエリカ

エリノ 同上

エカミ 同上

リュボ コンボイ + 龍神丸（玄田哲章さんが演じた主役ロボ）

アサノブ 平凡さを出したかつた

コウイチ 鉄のラインバレルの主人公

【第一部】

トウガ

超重神グラヴィオンのメインパイロットの名前

ナギサ

CLANNADの古河 渚

ヤヨイ

アイドルマスター XENOGLOSSIAの高槻や

よい

レジ

鉄のラインバレルの森次 玲二

レン

交響詩篇エウレカセブンのレントン・サーストン

クロウ

第2次スーパーロボット大戦Z 破界篇の主人公

ノマル

ノーマル

第一壱　え？旅に出かけた？引っ越し始めたばっかよ？（前書き）

結構ノリノリで書いてます。

第一壊 ん？旅に出ひつて？引っ越ししてきたばっかよ？

【ラックの中】

『ガダッガタガタッ』

「……………くらなんでもこにはないよなあ。旅費けちつやがつて……」

トラックの中に少年がぶつくせられている。

「これじゃ俺も引っ越しの荷物みたいじゃねえかよ…………」

少年は引っ越しの真っ最中。

親が旅費軽減のため荷物と一緒に乗せたのだ。

『ガタッガタガタッ』

「ああっ！ しかも乗り心地最悪じやねえかどけくじょう！」

少年は内心疲れ切っていた……

【マサラタウン】

「……がマサラタウンか……イッシュとは違つて田舎なところだな

少年はイッシュ地方からカント 地方に引っ越ししてきたのだ。

「うんうん 昔ながらって感じがしていいわねえ」

「そうね。お袋……親父が転勤でカントーに行くことになつてよかつたね……」

父親がカントーで仕事をすることになつて引っ越し越してきたのだ。

「ふむふむ。イッショで見たことないポケモンたちに出会つのも楽しみだせえ」

「そうね。この際だから旅にでも出る?」

「……旅ね。確かに10歳から旅をするって良くある」とだけ。いろいろあって俺は15歳。いまわりどうなんかな

「やあ、ヨコセア。引っ越しで。怪我で時期がずれただけなの

「しかし……」

少年は泣く。

「年下の子たちに交じつて旅と言つのをなあ~

「結構くだらないわよその理由」

「やあ、ヨコセア。引っ越しきたんじゃの?」

少年が泣々と悩んでこらへる。誰かがやつてきた。

「あら、オーキド博士。お久しぶりです」

「ひむ。おや、君はマサムネ君か。大きくなつたの?」

「え、あ、はい」

少年のことマサムネは大きくなつたと言われたがオーキド博士に会つた覚えはない。

「む？ その顔は覚えておらんとでも言つたそつな顔じゃな」

「いや、そんな。えと……」

「うーむ……わしは別にこいんじゃがな。ミズホのこと忘れちゃうと困るのじやが」

「え？ ミズホ？ あれ、なんか昔小ちこひに一緒に遊んでた記憶がある……」

「おお、覚えておつたかね。まあワシは最後に会つたのが3歳のころじやつたかのよ」

(ミズホって言えば確か俺の後をお兄ちゃん、お兄ちゃんと書いてつこてきた子かなついな)

小さこ頃マサムネと一緒によく遊んだ女の子である。結婚の約束などをしたことがあつたような気がするが……

(あれ、これはフラグなのではないか？)

マサムネは事故で入院してた時はポケモンのことについていろいろ学んでいたが
ついでにその手のゲームにも手を出していたのだった。

「オーキド博士。忘れるわけありませんよ」「む、そうかそうか。それはよかつたわい」

(計算すると今年齢は10歳のはず……そして今の話しからしてまだ旅に出てないのかもしれない。ふむふむ)

マサムネの脳内ではいろいろな妄想が膨らんでいく……

(10歳の女の子……10歳……10歳……)

「ま、マサムネ君？大丈夫かね？」

「じゅ……うえつへ！？ 大丈夫ですよ！？」

「な、ならいいんじゃが……」

マサムネは大変なことになつてゐる。

ちなみにマサムネはロリコンでもペドでもない。
年下の女の子が大好きなのである。
さすがに幼稚園児には興味はない。

「そ、それでミズホちゃんはまだこの街にいるんですか？」
「む？ 来週には旅に出る予定でな。今日に引っ越ししてくれてよ
かつたわい」

(チャンス！)

「あら？ ちょうどいいじゃない。いつしょに旅に出れば？」

(ナイス！ お袋ナイス！)

マサムネはちょうどいいタイミングで旅立つことを提案してきた母
親に感謝した。

「う～む……一人つてのは少し嫌だつたけど旅する仲間がいれば別
かな」

「おおっ！ そうかそうか、それはよかつたわい。ミズホも喜びそ
うじや」

(よし。後はミズホちゃんが可愛いことを願うだけだ)

その時のマサムネの顔はすこしかつた。

母親こと山口はその顔を見てやれやれと言ひ感じの表情になつた。

(まあ、旅にださせることきつかけになつたね。利用させてもらひつて)
「じめさんね!!ズホちゃん)

「あ、やつやつ。マサムネ、あなたのパートナーせりの山口

「えつ? もう決まつてるの?」

「お父さんがね。あなたのためにつてね

そう言いながら山口はマサムネにボールを渡す。

「俺の相棒か……よしつけてここー。」

マサムネがボールを投げる。

そして中から出てきたのは。

「モグ、リュー!」

「モグリューかあ。うしー よろしくなー!」

「モ、モグリュー!」

マサムネがモグリューに手を近づける。

それにモグリューは少し驚きながら自分の手もだした。

「さうだ。名前をつけてやるやつ。そうだな……よし、シモンにして

うー よろしくなシモンー!」

「モグリュー!」

そんなこんなで一人と一匹の旅はここから始まるのである。.

「さて、ミズホちゃんに会いに行いつかあ
「モ、モグリュウ……」

次回に続く

第一壊　え？旅に出でて？引っ越ししてきたばっかよ？（後書き）

今回のネタだけで突き進むと思つなよー。
と言つたかネタだけで突き進むと思つなよー。
面白くない話もあるかもしませんが……
挽回は確実にします！

技やポケモンの重さなどはアニメ基準で行きますので
4つ以上・重いからかかえたりするのは無理などは
問題はないということで行きます。

キャラクター紹介（第一部版 序盤）（前書き）

第一部（序盤時）でのキャラ紹介です
序盤時ですので中盤、後半からは対応しておりません。

女性キャラだけ身長とサイズを書いてあります。

キャラクター紹介（第一部版 序盤）

主人公

マサムネ（15） 妄想CV：緑川光（仮） 出身・イッシュ

年下好きの少年（もう青年と言つべきか？）

事故により10歳に旅に出られなかつたために今の今まで旅に出で
いなかつた

熱血タイプで考えると言つことはあまりしない。

が、ポケモンが関係することになると頭の回転が速くなる。
入院中の楽しみがギャルゲーであつたためにそういうことには敏感
である。

そういうことにも頭が回るよになつた。

見た目としてはマクロスFのアルトのような髪型つまりはボニー・テール

だが顔は男前であり女には見えない。

身長などは年相応である。

ちなみにボニー・テール好きでもある。

相棒

シモン（モグリュー） 妄想CV：柿原徹也

熱血的な性格だが少し臆病なところがある。
マサムネの事を兄貴分のように慕つている。
背中にサングラスのような模様がある。
文字が書けるのでそれにより人間と会話ができる。

サユキ（チューリネ） 妄想CV：丹下 桜

元気な性格だが何があると恐ろしく好戦的になる。
ボールから出るとマサムネのそばから離れようとしない。
始めてであったときはなぜか怪我をしていた。

シャドウ（コイキング） 妄想CV：遊佐浩二（友人の直感
で）

親父さんからもらった色違いポケモン。
普通のコイキングとは色違い以外にも違いがある。

ヒロイン

ミズホ（10） 妄想CV：桑島 法子 出身・カントー

身長144cm B85（H） W48 H80 化け物である。
3歳の頃にマサムネと出会い、マサムネが事故に会つ前までよく遊
んでいた。

10歳になったからマサムネは旅に出ただろうと会こにに行くこと
をやめた。

母親も忙しかったので事故の事をミズホには教えていなかった。
ちなみに遊びに行く時はオーキド博士の助手とともにに行っていた。
なお、かなりの一途でありマサムネ以外の男を男として見ていない
ところがある。

そしてかなりの妄想癖がある。

トガミ（ゼニガメ） 妄想CV：阿部 敦

不幸だつたり幸福だつたりするゼニガメ。
シモンの良き親友ポジションキャラである。
トガミもサングラスを所持している。

シモンの協力により文字を書き会話することが可能。

カミコ（ピカチュウ） 妄想CV：佐藤 利奈

カナブの勘違いにより弱つっていたところをミズホに捕まえられた可哀そうな子
勝気な性格であり、特にトガミに対してもすぐに手と言つより電気が出る。

電気が効かないシモンは普通に話すことができない。
後何やら普通ではないことがあるようだ。

ボーイッシュ少女

カナデ（10） 妄想CV：池澤春菜 出身・ホウエン

145cm B70（AA） W56 H76 他の女性キャラと
比べるのはかわいそうである
頭脳派タイプ。

スタイルッシュな男の子というような服装をしている。
かわいい系のものは一切持っていない。

マサムネたちに少し興味を持っている。

空気を読むということをよくするが、読めてないときが多い。

今現在家族はニビシティに住んでいる。

相棒

カミカ（クチート） 愚想CV：かないみか

愛想を良くふりまく元気な性格

だが、怒ると恐ろしいことになる。

歌うことが大好きである（別に相手を眠らせることはできない）

サムライ鎧のむじとりじょうねん

カナブ（10） 愚想CV：白石涼子 出身：カントー

モデルは初代アニメのサムライじょうねんであるが
外見はイケメンと言えるほどの中年。鎧以外は別物。
何やらサムライと言うよりは忍者と言つような行動をとる時もある。
虫好きなのは親からの遺伝のよつなもの。

相棒

カイのしん（カイロス） 愚想CV：難波圭一

カナブが親からもつたポケモン。

通常のカイロスからは考えられないほど俊敏。

似ている少年

ガイト（15） 妄想CV・檜山 修之 出身・シンオウ

熱血系男子。いろいろなところがマサムネと似ている。
ただし髪型はボーテールではなくロング好きである。
過去にマサムネと同じような事故を経験している。

相棒

ガオイン（リオル） 妄想CV・池澤春菜

勇敢な性格。回転を使った攻撃が得意。

ほんわか少女

ユウミ（10） 妄想CV・長谷川明子 出身・シンオウ

身長145cm B88(G) W53 H81 なにも言ひじり
はない

ガイトの従妹である。

ほんわかとしていてガイトの事は呼び捨てで
ガイトの事が大好きである。

第一壊 青春かあ……「ん！」 青春だああああああ！（前書き）

進めこの螺旋道を！

感想大募集！

お気に入り登録しても感想ないと感謝しないぞ！

凄くうれしいんですけど！

第一壊 青春かあ……「うん！」 青春だああああああああ！

【オーキド家・玄関前】

「「」あああああつこに//ズホナリやんがいるんすねつー！」

「わ、そりじやが……何やらおかしいノリになつてないかの……」

マサムネのスーパーハイテクションにオーキド博士は少しひいている。

「えええ～？ 別にそんなことないですよ～」

「モ、モグリゴ？」

「どうしたよシモン～なにそんな『ほ、本当に？』みたいな鳴き声はあ

「モ、モグリゴリゴ」

シモンの鳴き声はマサムネに通じてこるようだがマサムネは気がしていらない。

「あつて間もないポケモンと意思疎通してあるの」「ドキドキしないように見えるの……」

「なにを言つてるんです博士… 早くへつましょー！」

「う、うむ

そしてマサムネ達は家の中に入った。

【オーキド家・玄関】

「あら、お帰りなさいおじい様」

「つむ」

玄関に入るとお姉さんといった感じの人人が出てきた。

「博士。」Jの人は？

「む、ああ、ナナミじゅ。ミズホの母親の妹の娘になるかのあ」

「ああ、従姉妹なんですね」

（てか、ミズホちゃんの母親の妹の子供なんだよな……すると姉で
あるミズホちゃんの母親つて……）

「マサムネ君？ どうしたの？」

「えっ！？ あ、いや、別に……」

「マサムネはついに『ミズホちゃんの母親は行き遅れになりかけて
たんだな』

などと考えていて周りが見えていなかつたようだ。

「モ、モ、モグリュー！」

「あら、カントーでは珍しいポケモンね」

「え、まあ。モグリューのシモンです」

マサムネは頭にいるモグリューを胸に抱きナナミに差し出す。

「あらあら。かわいいわね」

「モモモモモモモモオオオオオオ！」

（ふつ、ナナミさんに抱えられて興奮しゃがつて……かわいいやつ
だ）

マサムネは年上に興味がない。

「おおうと、やつこべばかか//よ。//ズボなおみかの?」

「え？ ミズホですか？ セイを出かけたと思しますけど……」

「む？ 入れ違いかの。きっとマサムネ君の家に向かつてしまつ

(なん……だとい一まだ俺を焦らすとか!!ズホウヤアアアん
!?)

マサムネは無表情だが頭の中では大変なことになつてゐる。

「はつ！ ならうちに戻りましょう。」

そう言ってマサムネはナナミからシモンを受け取りマサムネは駆け足で家の方に向かつた。

「ふむ、青春と言つ物なのかのおこなは」「さあ。わかりません」

卷之三

青春は人それぞれである！

年齢的にいえばナナミもまだ青春中である！

「うおおおおおおおおお！ 青春まつただ中あああああー。」「モグリコアアアアアアアアアアアアアアアーーー！」

家に向かい駆け足のマサムネ。

振り落とされそうで必死に捕まるシモン。

「年下幼馴染恋人化フラグウウウウウウウウ！」

「モ、モ！？ モオオオオオオオオオオオオオオ！」

「え？ 前に人がいる？ つて止まれんわああああああ！」

『プッピガーン！』

「いててて。あ、大丈夫ですか」

「いたたたた。あ、大丈夫ですよ」

「あれ？」

「も、もしや、君はミズホちゃん？」

「も、もしや、貴方はマサムネさん？」

(想像を超えた口リ巨乳少女ですか！？)
(想像を超えた長身美形男子ですよ！？)

「久しぶりだね！」

「久しぶりです！」

「元気にしてた！」

「元気でしたよ！」

「モ、モグリュ？！」

完全に意気投合している一人を見てシモンはただ驚くだけしかでき

なかつた。

【マサムネ家・マサムネの部屋】

「いやあ。荷物の整理なんか手伝わせちゃつて」「めんねえ」「い、いえ！ お礼なんて結構です！」

「モグリュウ……」

「ゼニ、ガメガメ」

「モグモグウ！」

「ガメガ。ゼニゼニ」

「モグウ！」

「ガメガメ！」

イチャイチャな青春空間を展開している持ち主を横に
ポケモン同士でいろいろと慰めあつていた。

「あ、そうそう紹介します。私の相棒のゼニガメのトガミです」「あ、そうそう紹介するよ。俺の相棒のモグリューのシモンだ」

「ゼニゼニ」

「モグリュ」

「やうやう。旅に出るらしいね。俺も一緒に行つてもいいかな？」「えつ？マサムネさんはもう一歳なのでは？」

ミズホがそうこうとマサムネは少しだけひつむいた。

「いや、少し事故で怪我をね……」

「あつ……すいません」

「いやいや、いいんだよ」

少し静かになる……

「それでさ。一緒に旅に行つてもいいかな?」「はい! もちろんです!」

(うおっしゃ! 計画通り!)

(予想外、でも最高です!)

「ゼー」

「モグ」

そんなこんなで二人との旅は始まりを告げる……

『(;)飯できたわよお。ミズホちゃんも食べていきなさい』

「「はあー」「」

「モグ……」

「ゼー……」

次回に続く

第一壊 青春かあ……「うん！ 青春だあああああああ！」（後書き）

テンションについていけない＝近。
テンションが高すぎる持ち主一人。

これが螺旋青春道……

書いてものすごい恥ずかしい。

第三壇 親って何なんですか？ 精神道徳って何ー？（前書き）

バトルはまだ遠い……

第三壊 親つて何なんですか？ 精神道徳つて何ー？

【マサムネの家・リビング】

「どう？ むいしい？」

「は、はい！ おいしいです！」

マサムネ達はヨコが作った特性料理を食べていた。

「なんかいつもより豪華だな」

「引っ越しして初めてなうえにミズホちゃんもいるしね」「わ、私なんかのために… ありがとうございます……」

わんをかわんをかわきあいあいと盛り上がりを見せていく。

「モグモーグモグモグ」

「ガメガメーメ、ゼニガア」

「モオオグ」

「ガメ！」

ポケモンたちはポケモンたちで何か盛り上がりしているようだ。

「それで、一週間後に出発するのね？」

「はい。そういう予定でした。でもマサムネさんは準備などは……」

「いやいや、まったく無問題ー！」

「そ、そうですか。よかったです」

(マサムネ……見ると何だか……て言つかもつ相思相愛状態なの

?)

ヨ ハは一人の様子を見ながら既に一人は互いに好きなんだ、感じた。

少し昔を思い出していた。

(しかしまあ……ミズホちゃんは10歳なのよね……)

「ヨ ハさん？ どうかされました？」

「え？ いや、別になにもないわよ」

そんなこんなで時間は過ぎていく……

「あらもうこんな時間ね。ミズホちゃんどうするの？ 今日は止まつて行ったりする？」

「え？あの、ヨ ハさん。家は近いので別に……」

「あらあら。もうすぐ一人で一緒に旅するって言うのに、恥ずかしいのかしら？」

その言葉とともにミズホは赤くなり爆発した。

「あっ！ ミズホちゃんが倒れたぞ！」

「やっぱり若いわね。育つところは育つても」

「なにを言つてるだこの母親はあ！ ただし大正解です！」

さすが親子と言わんばかりのコンビネーションである。

これを見ている人が一人もいないと言つのはもつたいない。

「で、ミズホちゃんどうするの？」

「ハリカのハミガキも...」

「じゃああなたの部屋で一緒に寝なさい」

マサムネはすぐ驚いた。

この母親は何を言い出すのだ。

「なによ、まだ10歳と15歳でしょ。なにを考え
「いや、10歳だけどね！？ なんですがね！」
「まったく……昔はこんなんじゃなかつたわよね」
「人間は成長して変わる生物なのです！」

マサムネはその場をぐるぐると回りながら叫び続ける。

「とりあえずあなたの部屋に連れていくわよ。と言つかベットはつしかないし他に寝るものはないわよ」

「それをわかつていながら連れて行く母上様の考えがわかりません」「なによ。子供が二人寝るだけよ。間違いでも起こるの?なに? まどきは15歳でそこまで行くの?」

ニヤリと笑いながらヨコはミニズホを抱え。

「おのれを何でいつむせ」

そういうながらマサムネの部屋に向かつた。

マサムネの暴走限界はソミットブレイクした。

【マサムネの家・お風呂】

「う～何なんだあの母親は。本当に親か？人間か？子供の親か？」

風呂場でマサムネは体を洗いながらこう考へる。

「モグ。モーグ」

「ああ、シモン。俺の理解者はお前だけだよ

「モグリュ！」

「そろそろ上がる。まだ脱衣所に人の影はない。あの母親がミズホちゃんをあおる前に」

そう言つてマサムネは風呂からあがり脱衣所に出た。

「ふう。しかし今日寝る時はまくなつてしまふのか」

《ガラフ》

「へ？」

「あ！」

突然廊下への扉が開きミズホちゃんが現れた。
そしてマサムネは何も着ていなかった。

叫び声とともにミズホは走り去り、マサムネは扉を閉めた。

(なにこれ！普通逆でしょうー)

マサムネはその場にへたり込む。

「モ、モグリュウ……モ、モグモグ

「モ、モモグググモグリュ！」

熱い信頼関係は深まり、男と女の関係は深まつたのかは分からぬ。

【マサムネの家・マサムネの部屋】

「あれ？お袋。ミズホちゃんは？」

「帰ったわよ。……なにかあつたの風景で、お袋が考へてゐることとは違ひと悪ひよ。……」

そんなこんなで怒涛の一 日は終わる。

次回に続く。

第三壞 親つて何なんですか？ 精神道徳つて何ー？（後書き）

そろそろ旅に出ます。

時間がぐんと飛びます。

その間に起つたことをダイジェストで行きます。

第四壇 ダイジエスト。でもこりこりあつたんだよ本筋（前編）

いつもより短いです。

第四壊 ダイジェスト。でもいろいろあったんだよ本当に

【それからそれから】

「簡易テントに懐中電灯と。なんかキャンプに行くみたいな用意だな」

「モグリュ。モグモーグ」

「はいはい。ポケモンフーズもね。大事だな」

マサムネは出発の準備をしている。

しかしあれからと言う物のいろいろあつた。

親達によるくつつけ合い

親達は父親・母親ともども知り合いで、たらしく。どうやらマサムネとミズホをくつつけたいようだ。そのために何かあるたびに一人きりにしてくる。

マサムネはそこはあえて何事もないように普通に進めた。ミズホは顔を赤くしていたが。

あえてのスルーである。

ポケモン同士の友情

なにも言つまでもないだろ。

二匹はマサムネ達が一匹きりにされている間これからについて話し合っていたのだ。
いろいろ大丈夫なのかと……

「(四)の心は一つになつていいくのであった……

オー・キド博士の3人目の孫

三人目の孫のグリーン君とマサムネは出合つた。

彼はクールな少年のように感じた。

彼の母親はミズホの妹さん。

つまりはミズホのいとこである。

しかし好きなタイプの女性はミズホではなく
姉のナナミさんのようにある。
報われない話だ。

そして父親から

マサムネは仕事で家にめったに帰つてこない父親から
送られてきた荷物をひらいた。

中には捕獲用のボール数種とマサムネ好みの服が入つていた。
父親からの思いを受け取りマサムネは『ちゃんとした』旅への思い
が強くなつた。

「じゃあ、行つてくれるよ。チャンプになつて帰つてくるわ
「楽しみにしてるわよ」

いつもの信頼した親子関係。

「ミズホもがんばるのじゃぞ」

「はい！」

「これは仕事でこれなかつたミズカからのプレゼントージャ」

「お母さんからですか。大事にすると書いてこて下せ」

何やら家族との関係が覚めているような感じだ。

（ふむ。考えてみれば俺とミズホちゃんをくつつけようとしていた時も会話していたのは電話だつた……親子であまつ余えていないのか？）

ミズホの親はミズホのことが大事なのだろうが。その気持ちをミズホはわかっていないのだろつか。

いろいろ成長していくも10歳だ。

15歳のマサムネとは心の成長度は違つだらう。

「あ、うん。わたくし、ミズホちゃん。出発しようつか！」

「はい！ 行きましょうマサムネちゃん！」

「おおつと。待ちたまえ一人とも」

いよいよ出発と活き込んでくるとオーキド博士が話しかけてきた。

「このポケモン図鑑を持つてこくとい。未完成でカントーのポケモンしか調べられんがの」

「図鑑ですか。ありがとうございます」

「ありがとうござります！」

やつぱり二人はポケモン図鑑をオーキド博士から受け取った。

「シモンの事は調べられないんだな」

「モグウ～」

「すまんのあ～他の地方の博士たちとの図鑑制作用データの交換が終わつてなくての。間に合わなかつたんじや」

「いえ、それでも嬉しいです」

そつ言いながらマサムネはポケモン図鑑を服のポケットにしまった。

「では、氣をつけていぐのじゃぞ」

「マサムネも氣をつけるのよ。おばあちゃんにはなりたくないわよ」

見送りの言葉にしてはおかしいものだ。

そもそも何度も言つが二人はまだ未成年で結婚できる年齢でもない。何かあつたらそこで人生が終わりだ。

「なにもおみるわけありませんよ、お母様」「わかつてゐわよ、そんな事」「まあ、今はつて言葉もつくけど」「なら落としきなさいよね」「無論」

一人は一人でひとりと会話してゐるのをミズホは少し離れたところから不思議そつに見つめていた。そして……

「では、それそろ行くとしまじょうかー、ミズホちゃん」「あ、はいー！」

そんなこんなで一人の旅は始まる。

その一人の背後には一匹のポケモン。

一人と一匹の長い物語はここからスタートするのである。

「おーい。ミズホちゃん！ 下着忘れてるわよお。特注品でしょお！」

「なつ！ なああああああああ！」

ミズホは荷物をひとつ忘れていたのであった。

「あれ、勇みよく出発して盛り上がりっていたのに……」

「ガメメメ……ガメガアアアアアア！」

「モ、モグモグ？！モグモモググモ？！」

そんなこんなで旅は始まる。

次回に続く。続くつたら続く！

第四壇 ダイジエスト。でもこりこりあつたんだよ本当に（後書き）

いよいよ旅の始まりですよ。

第五壊 バトル?なんだよそれ。あるいは男の花道よ!（前書き）

タイトール。

第五壊 バトル?なんだよそれ。あるいは男の花道よー

【一番道路】

「いやはや。災難だつたねえミズホちゃん
「はううううう……」

ミズホは顔を赤くしている。

言つまでもなく恥ずかしいのだ。

(せうううう。やっぱり私は普通じゃないんですう！ 嫌われます
うー)

実際そんなことはないのだが、乙女心とは複雑なものである。

「それはさておき。ボールは持つてるよね？」

「あ、はい。お祖父ちゃんにモンスター・ボールをもらいました」

「ああ、普通のやつね。俺は親父からもらったこの数種のボール」

マサムネが持つていてるのはジョウト地方でぼんぐりと言つ木の実で
作られる

特性のボールである。マサムネの父親がガンテツ氏に頼み作つても
らつたのだ。

「す、すごいです！ あの有名なガンテツさんが作った特性ボール
ですか！？」

「そう。これを用意してくれた親父には感謝せんといかんね」

「お父さんですか……」

「むう……とにかくだよミズホちゃん！ ポケモンを戦わせ捕獲す

るー それがポケモントレーナーと並つ物だよ

「はいです！」

「マサムネは少しあびしそうな顔をしたミズホを元気づけた。それを聞いてミズホは元気に返事をした。そして揺れた。

「う、む。よしー。とりあえずトキワシティに行こうー。」「はいです！」

そんなわけで草むらを歩いて行く一人。

「ポツホオー！」

「おお、ポツポだ、ポツポ！」

「つ、捕まえますか！？」

「うーん。ポツポだしなあ……」

「モグリュー！」

「お、やる気だなシモン。よし初バトルだ！」

「こうそくスピンド終わりだー！」

「モグモグモグリュウウウー！」

「ボオボオオオオー！」

あつさりとポツポを倒した。
レベル差と言う物なのか。

「モツグー！」

「さすがだ。シモン…… もや？今度はコラッタの登場だ

しかも4匹。「ラッタの群れだ。

「あの、マサムネさん？ 4匹いますけど？」

「倒す！ 2対4だけど倒す！ 道理は俺達でぶつ壊す！」

「え、あ、それでいいんですか？」

「いいんだよ！ 行くぞおおシモン！」

「モグツモ！ モグモ！」

そつまうとマサムネとシモンは「ラッタの群れへ駆けだした。

「え、あ、ええと……行くよトカ!!」

「ガ、ガメガアアアアアア！」

「へつへへ……ついたぜトキワシティ」

「あ、あうあう……あの、私が襲われそうになつたところを助けてもらつた時の怪我が……」

「ふつ！ 男つてのはなあ！ 少しげらい怪我があつた方がいいもんなんだよお！」

「モグウ！」

マサムネとシモンはミズホとトガミの前で「王立ちして男らしく語つていてる。

「はあ、はううう

(か、かつこよすぎますー)

「ゼ、ゼーイー……

なおトガミはボロボロだ。

「へへひ。まあなんだな……ポケモンセンターに行ひひぢ
「あ、はい」

そう言い、マサムネ達はポケモンセンターに向かつた。

「しかし……」元氣いるトレーナーは年下ばかりだなあ
「まあ、10歳から旅ができるという決まりになつていますし。す
ぐに出る」の方が多いんですよ
「なんか年上みたいに言つね」
「私ももうすぐで11歳です。出発が一年遅れてたんですね」
「え?なぜ?」
「……秘密です」

そう言ひとびズホは少しうつむいた。

「ふむ……ま、人には知られたくない秘密ってのはあるもんだわな
「マサムネさんにも?」
「おこおこ。そう言ひのほは聞かなこつて話だろ」
「そう、ですね」

一人の仲は少し進展したのだろうか……

「トレーナーにはタダで料理つて言ひからざるものが出ると思つ

たらこじんなものだつたな

「た、タダなんですか文句なんか言つつけだめですよー。」

「あ、あの、声、小さくな」

別だん不味いとこつわけではないが、美味しいとこつわけではない。
マサムネが自分で作るレベルの料理よりトと言ひへりこの美味しい
なのだ。

マサムネの料理の腕は親直伝であり。そういう家庭料理などは軽く
超えるほどである。

「おやおや、大声で凄こい」と叫ぶねえ

「あん？ 誰だ？」

「じつせりマサムネよつま年下だらう少半だ。

「なんだあ、お前？ まあ無礼つてのはわかるけどよ。お前が出てくる必要があるのか？」

「いや、ただよくそんなことがいえるなつて思つてさ

「ふ、俺の料理の方がうまいからわ」

「君がか。じつせり年上のようだね」

「わかつててそのしゃべり方か」

マサムネは少し少年を睨む。

「マ、マサムネさん？ あの、喧嘩は……」

「いや、喧嘩はしないよ。別にね」

「ふふつ。やうだね。僕が話しかけたのが悪かったかな」

「ただ年上へのちゃんとした対応ができるなかつたのが気に障つただけだよ」

「ふふつ。じめんなやこ。そうだね僕の名前を名乗つておくれよ。僕

の名前は『カナテ』。よろしく

「? カナテ? 女の子みたいな名前ですね」

「……なあ ミズホちゃん。この子は女の子のようだ」

「ふえ? ふええええ!」

「あ、あの、声、小さくな」

「この出会いは一応の出会い。

これから先の出会いに一つに過ぎない。

続
くよ

第五壊 バトル?なんだよそれ。あるいは男の花道よー。(後書き)

戦闘描写は重要なときのみ。

なぜなら熱血度をたびたび消費するわけにはいかない。

第六壇 ヘルアンデくウンハのせりだよー(前書き)

だいたいヘル。

第六壊 ヘルアンドヘウンハウのいるだけよー

【トキワシティ・ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「いやあ、悪いね。一人だけの空間を邪魔して」

「ペ、ベベ別に私達はそんななかではありますからー。」

（なにその否定。少し泣いてるよつにも聞こえる不思議）

「や、そつかい」

（カナデちゃんがちょっと引いてるじゃないか。バレバレだよー。）

トキワシティのトレーナー達が止まるための施設。
ここは一段ベットが4つあり4人まで泊まれる。

今日は満員まであと一人と言つまで宿泊トレーナーがいるらしい。
そのためこの三人でこの個室で泊まることになつたのだ。

「そういうや、カナデはどうの出身なんだ？」

「僕？ 僕はニビシティ。と言つても引つ越してきたばかりなんだ」

「カナデもか」

「カナデもと言つと。あなたも？」

「ああ、イッシュからな」

「それは遠いところを。僕はホウエンさ」

「ホウエンかあ。俺のしらないポケモンもいるんだろうな」

「まあそうだね。僕のポケモンは明日にでも紹介しますよ」

カナデはマサムネに対してのしゃべり方は夕食時と違う丁寧になっている。マサムネの言葉が通じたのかもしれない。

「そうか。じゃあおやすみ
「モグウ～」

マサムネはシモンと一緒に寝ている。
ちなみにトガミはミズホと一緒に寝ていにない。
以前に窒息死しかけるほどに苦しみでいたらしい。

「おやすみなさいです
「おやすみ」

「ん……む、朝か
「モグウ……」

マサムネは目が覚めてベットから出る。

「おや、カナデがいないな。顔でも洗いに行つたのか?
「モグリコ?」

ビビりながらカナデはマサムネより先に起きていたようだ。

「いい時間だし、ミズホちゃんを起こすか

そういうながらミズホが寝ているベットに近づくマサムネ。

「ミズホちゃん。朝だよ

「ふみゆ」

「起きないなあ……ミズホちゃん！ 朝だつて！」

「はあ～みゆ！」

「グオボア！」

奇妙な声を発したと思った瞬間

マサムネはミズホに捕まってしまった。

「うむ。」さればああああー。」

これぞトガニが窒息死しかけた技。

地圖

「く、こんな意志のない状態でやられてもうれしくない。」

そう言つてマサムネは『地獄の樂園』を自力で脱出したその時。

「ほえ？」

一
あ
!」

ブチユ？

ガチヤ

「ふう、やはり朝は少し歩くのが……あ、」じめん。『おひべつ』

パタン

「…………ふぐう」

「モ、モグウ！？」

マサムネはその場に倒れた。

「ふ、ぎやあ……あー、マサムネさあああん！」

「私のせい……」

「いや、いいんだよ」

「いやあ、空氣呼んだのにそのまま行かなかつたのかい」

「いや、呼んだて……」

氣を取り戻したマサムネは泣き続けるミズホと
残念そうにしているカナデに言葉をかけていた。

「まあ、いい。とりあえず着替えよう。俺は少し席をはずすよ
「あ、はい」

ガチャ

「しかし。なんかポッポとコラッタの大軍以外と戦った記憶がない
な。なんかもつと強い奴と戦いたい！」

「モグッ！」

少し戦いに飢えている二人。

マサムネはジャージ姿でポケモンセンター周辺の公園を走っている。

「かと言つて旅始めだしなあ。適度な強敵いないかなあ
「ならば拙者と勝負するで、」
「え？ 誰？」

「拙者はむしとつしょうねんのカナブで、」
「鎧を身にまとつたむしとつしょうねんのカナブが話しかけてきた。

「バトルの申し込みか？ しかし俺は旅を始めたばかりで
「拙者も旅を始めようとしていたところだ」
「お、そうなの？」
「うむ。拙者はキワ出身トキワ魔の虫好き男児で、」
何やりかつこいいポーズをとるカナブ。

「でもちゅうじこな。まあジャージ姿で悪いが。朝一バトルと行
くか！」
「モグウ！」「
「では行くで、」
「カイのしこー！」
「ロオ スー！」

カナブはカイロスを繰り出した！

いよいよ戦いが始まる……

「おせいですね、マサムネさん
「女にも何かあるみたいに男にも何かあるものなんだよ

次回に続く

第六壇 ヘルアンダヘウンハトのモリモリだよー（後書き）

むしどりしょうねんのかナブ君

モーテルは言わざもなが初代アニメ四話の
むしどりしょうねんです。

サムライしょうねんのほうが正しいのかもしれないけど。
見たのが当時放送していたものなので記憶があやふやです。

第七壇 热血ヒート 心のつながりヒート もともと 戦いだーー（前書き）

読者のみなさん！ バトルですよ、バトル！

第七壊 熱血とはー 心のつながりとはー わる、戦いだー！

【公園・中央広場】

「カイのしんか。いい名前だな」

「やつで『じまるか？ そつ言つてくれたのはお主が初めてで『じまるよ」

「でも名前ならおれのシモンも負けでは『ねえ！」

「うむ。何やらかつ『』に感じの名前で『じまるよ」

「だらお？ よつし！ ノリノリになつて来たと『』で始めつかー！」

「『じまるー」

中央広場のフイールドでモグリューのシモンとカイロスのカイのしんが向かい合つていた。どつやらやる気満々のようだ。

「行くぜー！ ひつかくだー！」

「モオグリューー！」

シモンはカイのしんめがけて突撃する。

「ただの突撃で『じまる。そんなの横によければいいだけで『じまるー」

「口オスー！」

俊敏な動きでカイロスは横によけよつとする。

「ところがどつ こーだー！ 緊急ブレーキで『』をくスピンドルケット
アタックだー！」

「モオオオグリュウウ ウウー！」

ひっかく攻撃のために加速したスピードでその場にとまつた瞬間、ロケットの「」とカイのしんに向かってヒツヘスピニをした。

「な、なんと… で、」
「

「加速 + ヒツヘスピニによるロケットのヒツヘスピニ」
「

普通のヒツヘスピニよりも高速のヒツヘスピニ。
まさに高速回転するドットの「」とへ

「モオグウウウウウウウウ…」
「

「口オオオオオス!」
「

カイのしんに攻撃は直撃する。
しかしカイのしんは倒れない。

「ちつ。 もともと威力の低い技だつたからな……」
「

「モグア!」
「

「口オス…」
「

「むむむ。 旅始めとは思えないほどの戦法でござる……」
「

「旅始めとか戦法は関係ねえ! 倘達は熱血で進むだけよー!」
「

「ふむ。 ならば拙者にも負けられんぞ!」
「 カイのしん!」
「

カナブがそう呟ぶとカイのしんはシモンに突撃してきた。

「突撃してたら横によけるだけ。 わりとまあの重つたことだぜ
!」
「

「そんなのわかつきつてるで!」
「 カイのしん、しあつかるで
!」
「

「モグリュー?」
「

横にかけようとしたところをカイのしんの腕につかまりしめつけられる。

「じつにやられるか！ 手を伸ばせばよけの前に捕まえられるとか」

「そうね。さすがだ。感動できだ。だが、無意味だ！」

モネケリニ!

シモンは「うそくスピノン」によりしめつけから脱出した。

「何でもかんでもかへと細つなよが。」
「な、なんで『さがり』とおー。」

脱出したシモンは空中にいる。

「さあ！ これで終わりだぜええええええええ！」超落丁ひつかくう
うううううううううううう！

モオグウ！モオオオオオグ！」

落下速度が追加されひっかくの威力は倍増する。
そしてつ！

「カ、カイのしん！？」

卷之二

カイのしんは戦闘不能のようだ。

「俺達の勝利だつ！」
「モオオオグ！」
ふふつ始まるぜ俺達の真の始まりが！

「か、完敗で」「ざるよ。レベルもそれほど差がない」と叫つたに負けてしまつたで」「ざる」

「いや、カナブの戦闘もなかなかだつたよ」

「カナブ……うむ。マサムネ殿、拙者また強くなるで」「ざる。その時また戦おうで」「ざる」

「ああ、わかつたぜ!」

そう言つてマサムネとカナブは熱い握手をした。

「さて、拙者は血元に戻つて出発の準備をするで」「ざる」「ひがみ」

「さうか、旅に……ん? つてかミズホちやん達の事話れてたしい!」

!」

「モモグウ!」

「む、旅の仲間がいたで」「ざる?」「ひがみ」

「ああ! 待たせてるんで悪いな。じゃシーコーアゲイン!」

「よ、横文字は……」

カナブが戸惑いつつマサムネは走つて宿場に戻つて行った……

【トキワシティ・ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「うおおおおおー! も、着替え終わつた?!

「そんなのとっくの昔にだよ。遅かったね」

「し、心配し、したん、ですよ、お~」

「ああ、わかつたぜ!」

カナブは泣きそな感じで話しかけてきた。

ミズホは泣きそな感じで話しかけてくる。

「あ、『レーベル』めぐみミズホちゃん！」

そしてつい勢いでミズホをマサムネは抱きしめた。

「俺はミズホちゃんと心配させるようなことはしないよ……」

「マ、マ、ザム、ネザアアン…」

「……お熱いことで……さて、僕はマサラに行くから」「お別れ

だよ

「え。あっと… そ、そつか…あれ、ポケモンの紹介は？」

「ああ、向やう君が帰つてくるのが遅くて流れたからね…」

やつ言つてカナデはモンスター・ボールを取り出した。

「でて」、「カミカ

そつ言つてボールからポケモンが出てくる。

「チトオ」

出てきたのはクチートだった。

「僕の相棒のクチートのカミカさ

「チト」

「ふむ、始めてみるけど口一つだなあ

「チト」

カミカはマサムネに愛想ふりまいている。

ちなみにミズホちゃんは泣き疲れたのか寝ている。

そういうところは年相応だ。

「じゃ、元氣でね。また会おう」

「ああ、またな」

そう言ってカナーテとカミカは部屋を出て行った。

「行つたか……さて、これからどうするかな

すやすやと腕の中で眠るズボを見ながらマサムネはこうこういふ考えた。

「寝てるよな?」

気持ちがよかつた。

次回に続く

第七壊 热血とはー 心のつながりとはー もあ、戦いだー！（後書き）

なに、最後の一言で多くの人が
多くの考えを持つだらう。

小説とはそこが楽しい。

裏第七壙 真実はござりに…… 序盤は真実だらつ……ね（前書き）

第七壙の待っていた二人の様子です。

裏第七壇 真実はじゅに…… 序盤は真実だらつ……ね

【トキワシティ・ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「マ、マサムネさんが遅いです……何かに巻き込まれたんじゃないでしょうか!」

「いや、別にそんなことないと思つナビ。そんな怪事件はよくよく起つることじやないよ」

「や、そうですね」

二人は着替えを終えたが一向に戻つてこないマサムネのことをミズホは異常なほどに心配していた。

「いや、大丈夫だと思つよ? 彼は弱い人間じやないしね」「で、ですよね!」

しかしミズホの心配そうな表情は一向に変わらない。狭い部屋を意味もなく歩き続けていた。

「まあ、部屋は俺までに出てくれつて言われてるし早く帰つてきてくれたらいいね」

「俺までにって言つるのはマサムネさんも知つてますよね……な、何で帰つてこないんですか!?」

その時カナデは（しまった!）と思つた。
言わなければこの状態にはならなかつただろつ。

「ふ、ふえええ~きつと恐ろしい人たちに襲われたんですね~」「いや、ないと思つよ? 一、彼強いから! ちゃんとしてるからさ

「！」

成長していく年相応。

やはりミズホはもうすぐ11歳になるといえ子供なのだ……
それを慰めるカナデは年下なのだが。

「うわああああん～！ マサムネさんが死んじゃいましゅ～！」

「大げさだよ！ 後泣叫ばないでね！」

そういうながらカナデはミズホの口を押さえれる。

「もが、もぐ、もぐう～！」

「なんか彼の相棒みたいになっちゃってるね。君」

「も？ もぐもぐう～？ もぐもづぐう～」

『彼の相棒みたいになってるね。』カナデがそう
言ったとたんにミズホは泣き止み目をつぶりながら体を揺らしだし
た。

（突然泣き止んだと思つたらなんだいこれ？ 僕が『彼の相棒みたいになってるね』と言つたとたん……そつか、なるほどね）

つまりは『マサムネの相棒』として自分が見られていると思つたの
だろう。

そしてミズホは勝手に自分を相棒とした『マサムネとの未来予想図』
を妄想していたのだ。

（やれやれだよ。まったくマサムネさんは幸せ者だね）

＜ガラツー＞

「うおおおおおおー、さ、着替え終わった？！」

「そんなのどつぐの昔にだよ。遅かったね」

帰ってきたマサムネにカナデは返事をしたすると。

「し、心配し、したん、ですよ、おー」

突然ミズホが妄想モードの前の状態に戻った。

（切り替えが早いよ！ 何？ 彼に妄想しているといふ見られたくないわけ？！）

そうカナデが考へていると田の前でマサムネがミズホを抱きしめていた。

マサムネは『気がついていな』よつだがミズホはにやりと笑っていた。

（そこまで計算しての泣きだったのかー？ そりなのかー？）

カナデは少し混乱している。

するとミズホは寝たようにマサムネの腕に収まつた。

本当に寝ているのかはわからない。

「……お熱い」として、僕はマサラに行くからいいでお別れだよ」

そう言つてカナデは部屋から出て行こうとした。
邪魔をしちゃいけない空気だと思つたからだ。

「え、あつと！ そ、そつか……あれ、ポケモンの紹介は？」

「ああ、君が帰つてくるのが遅くて流れてたからね……」

そういうながらカナーデはポケットからモンスター・ボールを取り出す。

「ででこー、カミカ」

そしてモンスター・ボールからポケモンが出てくる。

「チトオ」

「僕の相棒のクチートのカミカさ」

「チト」

カミカはその場でぐるりと回る。

「ふむ、はじめてみるけどロードだなあ」

「チト」

マサムネはカミカの頭をなでている。
カミカは少しうれしそうだ。

「じゃ。元氣でね。また会おう」

「ああ、またな」

そう言つてカナーデは部屋を後にした。

「まったく。彼は彼で、彼女は彼女で不思議だつたよ」

「チトツ」

「ふふつ。カミカも気に入つたのかい。そう、面白いね」

そう言ってカナデとカミカはマサラタウンに向かった。

続く

裏第七壇 真実はござりに…… 序盤は真実だらつ……ね（後書き）

このこの想ふるじがでせぬでしょい。

第八壊 イヤのアーリアの……いや、いこよ戻る。（前書き）

バザールで

第八壊 イゼウノドリノゼヌ……いや、こいよ麗に。

【トキワシティ～トキワのもり・入口】

「」

「」

「……ガメガ？」

「モグリュ。モーグリュ！ モグリュー！」

楽しそうに「」機嫌に歩く一人と

それを見て不思議そうにするトガミ

そしてそれを横目に戦いで買ったことを自慢し続けるシモン。

「ガ、ガメガ……」

何がなんだかわからない……

自分だけのけ者にされているようにトガミは感じた。

【トキワのもり】

「さすがは虫ポケモンの宝庫だ。深い森だな」

「少し怖いですね」

そう言いながらズボはマサムネの手を握る。

前回の一軒からなにやら瑞穂は少し積極的になり始めた。

「まあ、虫ポケモンがいるだけだらう。動物なんていやしないよ」

そもそもポケモン世界には動物がいるのか。
絵本の中には犬が描かれていたが。

「「」の道に沿つていけば出らねりしこし。」のまま進めば
「おや? マサムネ殿では」ぞらんか」

マサムネがミズホに説明をしていと誰かが話しかけてきた。

「おお、カナブじゃないか」

「偶然で」ぞるな。そちらがお連れの方で」ぞる?」

「ああ、ミズホちゃんだよ」

「あ、」?」……」?」ミズホです。よろしくお願ひします」

ミズホは挨拶しているがマサムネの後ろに隠れている。

「おや、どうやらマサムネ殿以外の男は苦手のようだ」ぞるなあ」

「あの、一矢一矢しながらそういう言葉を返さないでもらえるかな

」ぞりゅう!ミズホがマサムネが好きなことは理解したらしい。

「いやいや、あからさま過ぎるだ」ぞるよ

「ああ、そうだな」

「? なにがあからさまなんですか?」

「さりに本人は行動の意味に気がついてないよ」ぞるよ

「……そつなかね」

「?」

ミズホが天然なのか考へての行動なのは本人以外にはわからない。

「して、」?にそのまま向かう氣で」ぞるかな?」

「え、いや、だって別に虫ポケモン狙いじゃなーし」

「いやいや、トキワの森は虫ポケモンだけではござりまよ

「あれ、ここは虫ポケモンの巣窟だと……」

「な、何かひどこ言われよ!」「やれるな。オホン。ピカチュウがいるで!」「さるよ」

「あの電気ネズミ!!」とピカチュウがいるのかあ

それを聞くヒマサムネは道沿いを歩いて行った。

「あ、あれ? つ、捕まえに行つたりしないで!」「やれるか!?」

「いや、俺の興味の対象じゃないっていうかな

「へ、そつなので!」「やれるか? 捕まえ少しこの森を探索していくで!」「やれる! では、またで!」「やれる!」

セツナヒトマサムネは森の中に入つて行つた。

「さて、行こうか

「あ、は……あれ? ヒマサムネさん。あれ!」

「ん? オヤ、あれ? ピカチュウじゃないか!?」

田の前には少し傷ついたピカチュウが倒れている。

「……これって他のトレーナーが捕まえ損ねたやつなのかな

「多分そうだと思しますけど……」

「しかし、俺の興味の対象じゃない。気が付いたら住処に帰るだろう。まあ行こう」

セツナヒトマサムネは道を先に進む。

「ん？ ボールを投げた音？」

ポン

「マサムネさあん！ ピカチュウゲットしましたよー！」
「ええつー？ ちょっと… なにしてんのー…？」
「私はこいつのが好きでして」
「欲望に忠実すぎる…」

そんなこんなで旅の仲間が増えたのだった

【ハイジティ・ポケモンセンター】

「……回復してきたの？」
「はい。名前はカミノになりました」
「あ、そつなんだ」

(何なんだろう。ポケモンの名前は神縛りなのかな……)

「カミノと書うと/orの子はメスなのか」
「はい。メスらじこですよ。後……」
「後？」
「普通にはなこと」いろがあるそつなんですが詳しきは教えてもらひえませんでした」
「詳しく教えてもらひえなかつた？ ……教えなかつたつてことは意味があると思つ」
「わかりました。追及はしないでおきます」

(気にはなるがな。しかし聞かない方がいいといふことかもしけない)

「ガ、ガメガ」

「ピカ。チュチュチュ」

「ガ、ガメメ」

「チュ？ ピカチュチュ？」

「ガ、ガメガメガ」

「チュウウウウウ！」

「ガ、ガメガメガアアアア！」

「モ、モグリュ？ モモグリュ！？」

その後方ではなぜか知らないがトガミとカミコが喧嘩していた。
突然の出来事にシモンは戸惑っていた。

「モグリュー！」

これから旅が不安になるシモンであった。

「あれ、この街のジムリーダー何か今コンビで戦いを挑むトレーナー募集中だつて」

「ダブルバトルと言う物ですね。最近正式ルールとして認められ始めました」

「ええと、ジムリーダータケシと弟子のコンビと戦うことになるらしい」

「そうなんですか。ちょうどよかったです！ 私達の力を見せてやりましょう！」

「そうだな！」

(そして勝った勢いで私は告白するー。)

いよいよミズホの暴走が最終段階に入った。
早すぎるような気がする。

(……なんかガツツポーズしてるけど何かなあ……)

マサムネはまさか一つ目のジム突破で告白されるなどは予想していない。

「ガ……ガメガ……」

「モ、モ、モグリュウウウウウ！」

そして後ろでは惨劇が起きていた。

そしてその後、大変なことになっているトガミを見て
ミズホはあわてて回復をしに行つた。
なにがあつたかは知らないまま……

続く

第八壊 ケルベロスの魔界へ……いや、ここよ罷。 (後書き)

ミズホちゃんはまだまだ子供なんだよってところです。

裏第八壇 いや、訳ないと……ドカーンだよ（前書き）

裏は大体マサムネ以外の視点

裏第八壊 いや、訳ないと……ドカーンだよ

【真実その？・トキワのもり】

「やつて来たで」ジギル「

一
口才
ス
レ

トキワのもりにやつってきたカナブとカイのしん。

「うーん」で虫ポケモンを捕まえるので、うーん。

一
ロ
オ
ス
！
」

ガサガサ

「む？ 早速いたで『Jやる！ カイのしん。きあいだめで『Jやる！』」

「口才才才ス！」

—そしてお主の親から受け継いだ技！ はかぢからで！」わな！」

四二二

ドシイイイイイイン！

草むらめがけて攻撃すると草むらから何かが飛び出し木にぶつかり
カナブの前に出てきた。

「チャ、チャアア」

虫。ポケモンだと思つて、いたで、カナブには、予想外だつた。

「む、虫ポケモンだけいるのではなかつたで『じぞるか』
「ロオス……」

「も、もう少し森の中に入ればよかつたで『じぞるかな……おや?』」

カナブは森の入口から見知つた顔が来るのを見つけた。

「マサムネ殿と……お連れの方で『じぞるかな』

そつ言つてカナブはマサムネ達の方へと向かつた……

【真実その?・「ビシティ ポケモンセンター】

「ガメガ。ゼニゼニ」

「モグウ」

「ガメエ、ガメガメガ」

シモンとトガミは新入りの事を気にしているようだ。

「ゼニ? ゼニガ」

「モグ、モグモグリュ」

そつ言つてシモンは少し離れて行つた。

「ゼニ? ガメガ……ゼニ? ゼニゼニガア」

「ピチユ、ピカチュウ」

「ガメガ……ガメガメガ、ガメガメ」

「ピカ? ピカチュ、ピピカチュ」

「ガメ？ ガメガメガメガ」

「ピ、ピカチユ！」

「ガ、ガメガ」

「ピカ。 チュチュチュ」

「ガ、ガメメ」

「チュ？ ピカチュチュ？」

「ガ、ガメガメガ」

「チュウウウウウウ！」

「ガ、ガメガメガアアアア！」

「モ、モグリュ？ モモグリュ！？」

少し離れていたところから見ていたシモンはなにが何だか分らなか
つた。
二人の争いは続いた。それにマサムネ達が気がつくまで。

本編に続く

裏第八壞 いや、訳ないと……ドカーンだよ（後書き）

訳は自分で考えてみて下さい。

第九壊 謎・ミステリー えりあむ回じじやああああ！（前書き）

考えるな、感じるんです！

第九壊 謎・ミステリー ひみつじこじやああああ！

【一九】シティ付近・草むら】

「ポケモン～ポケモン～」

「モグリュ～モグリュ～」

マサムネ達は新たなる仲間を探すために草むらに来ていた。
『達』と言つてもマサムネとシモンである。

ミズホちゃんは宿場で寝ている。
今回は一人部屋だ、絶対に部屋から出なよ！」マサムネは伝えて
いる。

「ミズホちゃんなら男に襲われても過言ではない」

「モ、モモグ、モモグモグモモ」

なにやら普通に話すと危ない話をしながら一人は草むらを歩く。

「いないんかなあ……いいやつ。ポッポとかコラッタとかしかいな
いんだよなあ」

「モグウ」

そう言つてふたたび歩く。
すると誰かがいた？

「おや？ 君はここいらでは珍しいポケモンを連れているんだね」「
ん？ 誰だあんたは」

「俺か？ 俺の名前はガイト。シンオウ地方の出身なんだぜ」

そう言つてかっこいいポーズをしている少年ガイトを前に覚は少し
ひいていた。

「あ、ああ、そうなの……」
「おいおい、なんだそのひきよつけ」
「いや、なんかね」
「ちなみに俺はこれでも15歳なんだぜ」
「ええ！ そんなボーッとつたりして！？」
「ひ、ひどいこと言ひづなあ……」

ガイトはがっくつとしていた。

「あと、俺も15歳や」
「そりなのかな。めずらしいなあ」
「事故で10歳の時旅に出なくて今まで長引いたのさ」
「おや、俺も10歳の時に事故で行けなくつてや」
「同じ理由なんて意外なこともあるもんだ」

言葉が重なった。

「なあ、その事故つて……」
「ん、事故の事か、あんまり他の人には言わないんだが……」
「何かにさらわれて気が付いたら病院だつたんじやないか？」
「！？ なぜその事を……」
「そして親達や世間一般には事故として見られていると」
「……どうか、なるほどな。ここで君と出会つたのも偶然かな？」
「それとも……」
「必然だつたのかもしないぜ、これが」
「……どうか。まあいいさ、考へても仕方がない」

そう言つてガイトは手を横にし、やれやれとポーズをとつた。

「そんなことよりも、ここにはポッポやらしかいのかねえ」

「そうだな、なにか珍しいポケモンでもいなかと探してるんだが」「モグリュー」

「オール！」

二人が話していると一人が話してゐる間に草むらを探索していたパートナー達が返つてきた。

「お、ガオイン。何か見つけたのか？」

「シモンも何か見つけたのか？」

「あ、そいつの名前はシモンって言つのか」

「そのリオルの名前はガオインっていうのか」

「モグモグ」

「リオルウ」

どうやら二人とも同じ方向にマサムネ達を連れていきたいらしく。

「わあつたから引っ張るなよ

「いつたい何があるんだ？」

そう言って二人は二匹が向かう場所へ行く。
するとそこには……

「なあ、ガイト。」「こつら……」

「ああ、怪我をしているようだが……どちらもカントーでは珍しい」

そこには傷ついたチュリネとコリンクだつた。

「ここの近くに持ち主らしき人影はなかったのか?」「

「リオル」

「足跡とか人がいた痕跡は?」

「モグリュ」

不思議な話だ。

こんな所でこの一匹がいるわけがない。

「なんでここにいるのか……」

「まあ、それは謎と言つことだろ?」「

「何やら因縁めいたものを感じるがな」

「そうか? 僕たちに関係する……か?」

「わかんない。なんとなくや」

「なんとなくか……関係なくともこいつこいつとは言いたくなるよな

そう言つてガイトはコリンクを抱きかかえた。
そしてマサムネはチュリネを抱きかかえた。

「で、どうする。ポケモンセンターは持ち主不明のポケモンは回復
してくれないぜ」

「厄介なシステムだよなあ。盗犯などを防ぐためとはいえよ

そう言つてガイトはモンスター ボールを取り出す。

「捕まるのか?」

「持ち主がないようだしな」

「自然に回復して住処に戻るかもしれないぞ」

「ここらにこいつらの住処があると思うつか?」

「それも……そなたがな。なら……」

そう言ってマサムネもモンスター・ボールを取り出す。

「何かこれでこいつらの自由を奪うようで嫌だなあ」

「そうだな……でも捕まえないとかわいそうな気もしてくるんだが
「ん、そうか……そうだな。なんでだろ?」

「さあな。さて……」

そう言ってガイトはボールを投げる。

マサムネもそれに続く。

「『リンクと……』

「チュリネか……』

新たな仲間を手に入れたマサムネ達はポケモンセンターに向かう。
その心はつれしさではなく、疑問など負の感情が多くを占めていた
……

【ニビシティ・ポケモンセンター】

マサムネ達はポケモンセンターの中に入った。
すると一人の女の子が小走りで近寄って来た。

「マサムネさああん
「ガイトおおおお！」

二人同時のフライアタック！

「ぐおぼふあ！」

「わわわふうおー..」

「つかせばつぐんだ！」

「い、いきなり突撃はやめると言つただる。」「わわわ」

「ミズホちゃん。なんか息が苦しいですよ.....ですよー」

「つてあれ？」

「なんか同じような状況だな」

マサムネとガイトは上にいる女の子をじけて立ち上がる。

「そちらもお連れの女の子と二人旅？」

「そう言つお前もそうだったのか」

「あれ、マサムネさんそちらの方は？」

「ガイト~その人誰なの~」

「俺はマサムネ。」のミズホちゃんと一緒に旅をしてくる

「そして俺はガイト。従兄妹であるコウ//と一緒に旅してくると言

うわけだ」

「なんか似てるな

「微妙に違うがな

「似てこるとこひどいっつと?..」

「体型とかだろ?..」

「ふふつ」「

「なに笑っているんです?」「

「そうだよ~」

不敵に笑う男組。

それを見て不思議に思つ女組。

「つて、こんなことやつてゐる場合じやない」

「そうだったな。回復に行こう」

そう言って回復コーナーに一人は早歩きで向かった。

「あ、待って下さいよお～」
「ガイド～おいてかないで～」

次回に続く

第九壇 謎・ミステリー むらむらじじやああああー（後書き）

過去つていうのは戻れないものです。

小学生・中学生・高校生などが青春と言われる時期です。
つまりは青春を楽しめる時期こそが子供なのです。

つまり自分は青春を楽しめてなかつたということなのですよ～

第十壇 - 1

クン ットヽ (前書き)

感想募集中です。

第十壱・1 クン ットゞ

【「エレシティ・ポケモンセンター宿場・個室B】

「と言つことがあつてだな……」

「そつなんだあ」

「そつなんですかあ～」

待つていた女子組は簡単に納得したようだ。

「しかし一人用の部屋に四人は少しきついな……」

初めは一人で泊まる予定だったのだが、何やら人数が切羽詰まつた
ようでのこの部屋に四人で泊まることになってしまったのだ。

「あの二匹は明日には怪我が完全に治ると言つことだ」

「そつか、それは良かつたな」

マサムネの表情が穢やかになる。

「しかし謎は謎のままか……」

「まあ、深く考へることはない。無事ならそれで終わりだ」

そう言つてマサムネは話を終わらせる。

「そついや一人はジム挑戦の旅をしてるんだよな？」

ガイドが問いかけてくる。

「ああ、今日は『』のジムリーダーと弟子を一人のコンビネーション

で倒したぜ」

「なんだと！」

マサムネはガイトの肩を持ち揺さぶる。

「お、おうっ！ いや、何だって言われても……」

「……いや、それもそうだ。しかしこの間に？」

「何時の間にと言われてもなあ。君に会う前かなあ」

「草むらにいたのは戦力の捕獲じやなかつたのか」

マサムネはガイトの方から手を引き

腕を組みながらそう言つ。

「あれは経験を積ませて強くしてただけだよ」

「レベル上げってか」

「ああ、明日に『』の怪我が治つたらハナダに行こうと思つて

いる

「そつか。何かあつてすぐに別れることになるとは」

「なに、俺達はライバルみたいなものなんだぜ」

サムズアップしながらそう言つガイト。

(何でもかんでもかっこつけで……)

「ガイト、かっこいい！」

「な、なんだよいきなり……」

「べつっこい」

突然コウミがガイトに抱きつぶ。

「なに見せつけてるんですか……」

「ミ、ミズホちゃん？ なんか声に怒りが込められてるよ! なのですが……」

（こや、なんだ。そつぬつ感じだとパレパレだよ……バレでないと思つてゐるミズホちゃんだけになれるよー）

「なんでもんなに怒つてるのミズホ？」

のほほんとコウミがミズホに問いかけている。

「空氣を読むんだコウミ」

「？ 何だかわからないけど空氣読む～」

（天然と言つのかこれは……俺はこのノリにはついていけん……ガイトはすじこわ……）

「ま、まあ、とにかくだ。今日は寝よつぜ。明日の朝一に俺は出発する予定だからさ」

「そりか、そうだな。とりあえず俺とガイトは寝袋で床に……」

「やだあ～僕はガイトと寝るんだあ～！」

（ほ、僕つ娘！？ つてそじゅねえ！ 一緒に寝るだとお！？）

コウミの衝撃発言に驚くマサムネ。

しかし驚いているのはマサムネだけだ。

（これは……コウミとガイトさんが一緒に寝れば私もマサムネさん

とーー

(またか……やはりコウモリ子供だな……)

ミズホはこうじる企み、ガイトはいつものことと呆れていた。

「わあつたよ。一緒に寝てやるよ」

「わ～い」

「!？」

そう言つて、ガイトとコウモリはシングルベットに一人で入った。

「……なにこれ。俺の考え方があかしいのか?」

「あ、マサムネさん。寝ましょう」

ミズホがマサムネの肩に手を置きベットに引き込む。

「え? いや、その……し、シングルベットですよ?」

「なにを言つていますか? 隣の一人も同じじゃないですかあ

「あ、うん」

「えへへ。初めての一人で夜に一緒に寝るつてやつですねえ

「な、なに? そ、そういう言葉はどうして覚えるのー?」

「え、この野球ゲームですよ」

ミズホちゃんは某全年齢対象ギャルゲームがあああああマサムネに見せていた。

「この全年齢対象ギャルゲームがあああああー」

「つるわーい」

「"めんなさい」

マサムネが叫ぶとユウニに怒られた。

そして気がつくとマサムネはペットのすぐ横まで引きずられていた。

「大藏經」

「せよなら、俺の春にできる花の実……」

よし、バネ持つてこい

セシル ヴァル ハンチング

「はつ！ 朝か……はむにゅうー！」

前回の死の樂園再び！

「ふへへゝマサムネをあゝん...」

しかし今度は少し違つた。

顔ではなく背中に押し付けておられるのだと

いや、ただの天国である

('ପ୍ରକାଶ ମହିନେ ଏହା ଏହା ଏହା ଏହା ଏହା ଏହା ଏହା ଏହା -)

マサムネは天国を楽しんでいた。

すると、隣のベットからガイトが出てきた。

「ふあ～朝か……ん？　おやおや。まあ始めはなれんわな……楽し
んどけよ」

そう言つてガイは部屋の洗面所に向かつた。

「ガ、ガイトおおおおおおおー！」

「うねせこーー！」

ブンツ！

「ブゲラッ！」

隣のベットから枕が飛んできた。
そこでもマサムネの意識は途切れる。

後半に続く

明日は14日か。

義理はもらえるのは確定してゐただけだな。
本命など見たことない。

第十壇 - 2

攻守逆転劇は知りかねつた起きたのよー（前書き）

前半のあまり的なもので短いです。

第十壊 -2 攻守逆転劇は知りかのつむぎ起動したのよ-

「……さん ムネさん」

(ん、あ……ん……な、何だ……)

「……ムネさん。マサムネさん…」

「つねわつー?」

ポフン

「マサムネさん。味わいたいなら話してくれればいいじゃないですか」

「ふい、ふいひまふー！」

ミズホの前回と反応が違います。

前回のカナデの言葉により何かが変わったようである。

「朝から何やつてんだ? とりあえず着替えろよ。イチャイチャは俺らがいなくなつてからにしな」

そう言ってガイトは荷物を持ちコウフ//とともに部屋を出て行つた。

「あらら。いろいろ見られてしましましたね」

「なんかいろいろ誤解が生まれつつある」

その後マサムネは力押しでミズホを部屋の外に出した。

その時ミズホはいろいろ言つていたが何もなかつたこととした。

【ポケモンセンター前】

「チヨリ」

マサムネの肩の上にいるのは昨日のチヨリネだ。元気になつたようだマサムネにすりよつていてる。

「ランー！」

ココンクもガイトの足元で元気に声をあげている。

「行くんだな」

「ああ、早くハナダに行きたいんでな」

「またな、ポケモンリーグで戦おうぜ」

「ま、それまでにまた会うかもしけねえけどな

「かもな」

「男の友情ってやつだね」

「や～じょ～」

ミズホとユウミはそれを離れた所からじっと見ていた。

「てなわけで。またな」

「ああ、またなー」

やつぱりガイトとユウミはおつきあいをめぐらしくて向かって行つた。

「行つたか……」

「行きましたね」

「所でなんで俺達は手をつないでるのかな」

「気にしなくていいんじゃないですかね」

「そう……」

（攻守が逆転してゐる気がする……何時から逆になつた！　昔はもつと恥じらいを持つた子だった！）

何が起こるか分からぬ。
それが人生である。

次回に続く

第十壇 - 2 攻守逆転劇は知りかのつばさ起もてこたのよー（後書き）

セットヴァルエンチン St Valentine

裏第十壱 別れた後に何があったのか（前書き）

カナブのしゃべり方はお気に入り。

裏第十壱 別れた後に何があったのか

【トキワのもり】

「うへむ。キャタピーチビードルばかりでござるよ……」

カナブはむしポケモン捕獲のためにトキワのもりを捜索していく。

「まつたぐ。拙者むしとつしうねんでござるがバタフリーやスピアーには興味ないでござるよ」

カナブはむしとつしうなんの家系に生まれるがめちゃくちゃむしポケモンが好きなわけじゃない。

「何かもつといひ……かつてこといつ感じのポケモンがござるなあ～」

ブンツ

「カイロツー？」

「じゅわーっ！」

カナブ達は突然何かに襲われた。

「な、何なのでござるー？」

「ストラ～」

「ス、ストライクでござるか！？ な、なんとー、か、かつくいい！ でござれぬ」

そこにはストライクがいた。

人を襲つてくる時点で凶暴なのはわかる。

「もえるで」「ざるうううううううううう！」

「ストラア！」

叫ぶ力ナブにしんくうはが飛んでくる。

「口オツス！」

それをカイのしんが止める。

「カイのしん！」

「口オオオオス！」

カイのしんの気合がたまつていく！

「口オオオオオス！」

ストライク目指し突撃するカイのしん。

「ストラアアアア！」

突撃、そして衝突する一匹。

「口オオオス！」

「ストラアア！」

相打ちになる……だが。

「口オオオス！」

弱りながらもカイのしんはストライクをつかむ。

「ラアアイク！？」

「口オオオオオ！」

そのままストライクを押し、そのまま木を駆け上がる。
そしてつ！

「口オオオオオオス！」

急速に下に落下する。

「ラアアアアアアアアイック！」

高空からの落下攻撃……

カイのしんの俊敏さとカイロスと言うポケモン自体が持つ力を使った
カイのしんオリジナルの攻撃とも言えるだろう。
駆け上がるものがなければできないが。

「口オオオオス！」

「や、やつたで！」「やるよ。カイのしん！」

そう言ってモンスター ボールを投げるカナブ。
ボールは揺れる、揺れる、揺れる……
そして……

「や、やつたで！」「やるよカイのしん！」

「カアアアアアイ！」

抱き合『うカナブとカイのしん。

「あ、す、少し痛いで』れる……」

顔に角が当たつた

本編に続く

裏第十壇 別れた後に何があったのか（後書き）

初期は技が少なくて困る……

第十一壊 ダブルバトル！

ボケとシッ ハリのほかのあと一人の必要性！（前書き）

—ビジム戦です。

第十一壊 ダブルバトル！ ポケヒシシ「//のほかのあと一人の必要性」

【「エラシティ・エラジム】

「と言つわけで、ダブルバトルをしに来ました」

「はい。今現在は二人一組のダブルバトルしか受け付けておりません」

「いや、だからですね」

「はい。お申込みですね」

何かおかしいような気もするが受付を済ませ1時間後にバトルと言うことになった。

念のために言つが受付は決まりなので今ダブルバトルしか募集していないと言つたのである。

「と言つわけで、ミズホちゃん。戦いの準備……はできるね。一時間どうじょうか」

「ならあっちの茂みの駆け出にこやんこやん……」

「セタアアアアアアプ！」

「X!? ジヤなくてなんですか？」

「そう言つのはやめようね……」

「大丈夫ですよ。パケに比べたらまだまだですよ」

「……そこベンチでこれからについて話し合おうか

「え、もづ未来設計図を？」

「……」

そしてマサムネ達はベンチに座つて無言のまま時間が過ぎて行った。

【パラジム・バトルフィールド】

「マサムネ達は準備ができたよつのでバトルフィールドに呼ばれ連れられた。

(岩でできたフィールドか……下は地面なのか……)

下は地面である。

シモンなら潜ることもできるだろ?」

そして岩のオブジェ。

これもつましく使えば戦いを有利に進められるだろ?」

「お前達が今日の挑戦者だな」

「くつへへ、タケシさん。今日こそ俺の本気を見せてやりますよ!」

「何時もお前は言葉だけだぞ、トシカズ」

「うつ! もう油断しませんぜ。さあ挑戦者ども! お前達がタケシさんや俺に戦いを挑むのは一億光年早いことを思い知らせてやるぜ!」

「それは距離だ……」

何やら前で漫才をしているのがジムリーダーと弟子のようだ。

「あ~つと、準備OKでいいのか?」

「ああ、準備はできている」

「くつへへ、お前らなんか役不足だぜー!」

「それを言つなら役者不足だ……」

(なんだこの漫才は……調子が抜ける……)

そして戦いは始まる。

「よし、行つてきてトガミー！」

「男の生れやも見せてやれ！ シモンー！」

「ガメハー！」

「モグウー！」

シモンとトガミがバトルフィールドに出る。

「行つて来い！ イワークー！」

「行くぜ挑戦者！ サンドー！」

「イワアアアアク！」

「サンーンー！」

イワークとサンドが出でくる。

(……強そうだな。まア戦わんと実際わからんがな。これがな)

「では、それぞれポケモンは各自一匹ずつの2対2のバトルとしますー！」

審判がやつらと全員がつなづく。

「では、始めー！」

そして戦いが始まる。

「イワーク！ がんせきらうじー...」

「ワアアク！」

空中から岩石が落下していく。

「なつ！ イワークがこんな技を覚えてるとほー。 よけるシモンー。」

「よけてトガミー。」

「四は上から落ちて来る岩をよけ……

「よけてもそれで終わりやせんぜえー。」

「サンー。」

落ちて来る岩の上からサンダが奇襲をしかける！

「落^ハ下^ス率^ハこうそくスピン + 岩石つぶてー。」

「ガ、ガメガツー。ガメヒーー。」

その攻撃はトガミーに当たる。

「ああつー。トガミー。」

そしてすべての岩石は落下し障害物となる。

「ガメヒーー。」

「モーグリュー。」

シモンは攻撃をつまくよけるがトガミーはサンダの攻撃を食いつてしまつ。

「これは、弱点である水のトガミを狙つてきているのか……」

(まあ、どちらも同じだがな……)

「へへへっ！ こままのテンポで行くぜ！」

「ならばサンンドをこちらも狙わせてもらひ。シモンー！」

「モグリュー！」

そつまつと落ちてきた岩の上をシモンがはねる。

「サ、サァン！？」

シモンがサンンドの周りを駆け巡りサンンドをかく乱する。

「ちょこまかと……ふん。そつきの攻撃でゼーガメもあまり動けないだろ。モグリューを狙え！」

サンドはモグリューを追いかけ攻撃しようとする。

「ふつ。今だぜ！」

「はい！」

「ガメガアアア！」

ひとつやくスピンしながらサンドに接近するトガミ。

「しかしあまい」

「ワアアアク！」

「ドスーン！」

「ガメエ！」

「ゼニガメ、戦闘不能！」

サンドに接近していたトガミはイワークに落とされる。
そして、審判の言葉が響く。

「おおっ。さすがはタケシさんだ」

「ゼニガメの事を無視するからこうなる」

「その通りだ」

「なに？」

「お前ら今のでシモンの存在を一瞬忘れたな」

そう、その時すでに一番大きな岩のオブジェをシモンは駆け上がり
きっていた。

「行くぞシモン！ 超落下メタルクロオオオオオオオオこうそくスピ
イイイイイイン！」

「モオモモモモモモモオオモオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！－！」

高速に回転しながらのメタルクロ一。

この攻撃はよけることは難しいだろう。

「グウウウウウウウウウウリュウ！」

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアク！」

「イワーク！」

イワークは倒れる。

「イワーク、戦闘不能!」

審判の声が再び響く。

「そ、そんな……タケシさんが……せつ……モグリューせどりだ…?
?」

まさかまた上にと上を探すサンド。

「残念!」「だぜえ!」

「なつ!」

サンドの真下からシモンが出てくる。

「みだれひつかきこ!」
「サアアアンデ!」

サンドはよろめく。

そして近くに立つて擂盤の上にシモンは行く。

「よし、落下一いつやくスピイイイイン!」
「ココウウウウウウウウウウウウウウウウ!」

そしてその攻撃がサンドにクリティカルヒット!

「サ、サアアアン!」

「サンド、戦闘不能! 勝者、挑戦者チーム!」

そして、戦いは終わった……

「昨日といい、今日といい。やはりダブルバトルは相方と息があつてないとつらいものだな」

「そ、そりやないつスよ、タケシさああん」

「……とにかく、このメダルを受け取ってくれ」

そう言つて猛はメダルを二つ差し出す。

「よおおおおおおおし！ グレー・バツチ・ゲエエエット！」

「モオオオオオオオグリュ！」

「……うん。この後だ」

「ガメ？」

そしてマサムネ達はポケモンセンターに向かつことにした。

続く

第十一壇 ダブルバトル！ ポケとシシ『ミ』のほかのあと一人の必要性！（後書き）

タケシなどはダブルバトルにあまりなれていません。

このごろルールになつたばかりです。

試験的にテストとしてやつている期間なだけです。

第十一壊 そう一 基準があればいいのだっ！

【一二ビシティ・ポケモンセンター】

「モーグリュ」「
「ガメガ……」
「モ、モグモーグ！」
「ガ、ガメガ？」
「モグモーグ！」

さあこんな男の友情は置いておき、その頃マサムネとミズホは……

「今日は勝ててよかつたですよね。マサムネさん」「ああ、なんかトガミを囮に使つてしまつたがな……」「ふふつ。トガミは大丈夫ですよ。強いですから」

なおトガミはあの一件でだいぶ落ち込んでいる。
それにより上のシモンの慰めである。

「にしても、何なんだ。なんでこんな所に……こゝ人気はない」とは
いえ女子トイレなんですけど……」

無理矢理にミズホに連れてこられたのである。
マサムネはいやがる暇もなく連れ込まれた
いや、ついてこないと叫ぶと脅されたが……

「それはですね。『ホン。…………私はマサムネさんが好きです』

「え？」「

「世界で一番愛している自信があります」

「マサムネは固まつた。
何が何だかわからない。」

「は？ 今何て言つたさ？」
「私は世界で一番マサムネさんを愛していこる自信があると言つたん
です！」

突然であつた……
マサムネの予想を超えていた……
順序を踏んでからこちらから告白しようとしたら
むじづから告白されてしまったのだ……

(前々からおかしいところはあつたぞ……恋人以前の関係を楽しみ
たかったと言うつて……)

マサムネはあえてミズホの好意を無視してはいたがもつ無視できるも
のではない。

「ああ、OKと書つてください…… 言わなければ叫びます」

もう十分大きな声を出しているのだが、叫び声などあげられても困
る。

「……ふつ。わかつたよ。お前の彼氏になつてやるよ
「ほ、本当ですね！ よつしゃー ではそつそく……」
「ホワイ！？ なに？ 早速つなにー？」
「くくく、ワポ でえた知識ですよー」

「UEERO・Aのへせしてええええええええええ…」

その後運よくトイレには誰も来なかつたそくな……

【次の日】

「……てな訳でだ。おつきみやまに行こう」
「行きましょう」

のたのたと言つ歩き方で一人はおつきみやまへ向かおうとした。

「おおっ！ マサムネ殿～！」
「む？ カナブか？」
「おや、君達。お久しぶり」
「カナデさん！」

入口近くで懐かしい？ 一人と再会した。

「お前ら一人で旅してゐのか？」
「いやはや、偶然知り合つたで」「やるよ」
「彼も君達を知つてゐると言つしね」
「マサムネ殿はその様子だとジムは攻略したの」「やるな」
「ああ、このとうりな」
「さすがだね」
「つむ。さすが」

マサムネの事をたたえる一人。

「お前らはまだジムは攻略してないのか?」

「トキワのジムは営業休止中でござるし……」

「僕もレベルを上げていたくらいだしね」

「今はダブルバトルしか受け付けてねえぞ」

それを聞くと顔を見合わせる一人。

「となると。僕と君で行くしかないね」

「うむ。初めてでござるがよろしくするござるなよ」

二人は握手している。

二人は性別が違うはずなのに顔つきが似ている……
美形である。

「ふむ。お前らなりいけるような気がするぞ」

「おおっ！ でござる」

「では今日は泊まって、明日に挑もう」

「いざる。では、マサムネ殿またいつかござる」

「短い再会だけど……またね」

そう言って二人はポケモンセンターに入つて行つた。

「……さて、行くか」「はい」

ミズホは一人の会話を聞いていたのだろうか。
テンションが朝からずっとマックスである。

「……シモン。俺って幸せだよな」

「モグリュ？」

「ああ、わからぬえよな……わからぬだけじ」

かなりきわどい話である……

続く

第十一 壊 そう一 基準があればいいのだつ！（後書き）

短いが今日の後に伸ばす

第十一 壊・補足

これが眞実だ！

(前書き)

付け足し

第十一 壊・補足 これが眞実だ！

【個室でのその後】

「CERO・Aのくせしてええええええええ！」

マサムネの言葉が女子トイレに響く……

そしてマサムネは覚悟する……

そして皿をつむる……

「あれ？」

何もおきない。

そしてマサムネは皿を開ける。

「…………えーと…………」の先はどうすればいいんですかね？
「ほへ？」

ミズホの発言にマサムネは気を抜かれる。

「いやあ、わすがにこの先はないんですね
「CERO……」

そう、パワーポケットもその壁は乗り越えられなかつたのだ。
いくらサイボーグが出たり殺人が起きてても、裏でああいう描写があつても

夢の国のねずみに似た生物が出てきても、越えられない壁があつた
のだ

CERO・Aであるためには……

「よし、出よう。今すぐこの個室かい」

「え？ しかしあま私達は一いつて……」

「年を考えよう。そしてCERO・Aで行こう

そう。 プロクン 基準で……

「てなわけだ。この先は結婚するまでお預けだぜ
「むー。なぜです。恋人ならすぐにするものだと……」
「いいのー。君は10歳なのね！ だから駄目なのー。」
「チックわかりました。マサムネさんの言つこと従います
「ねえ、いました打ちした？ したよね？」
「いえ。じゃあ今日もう寝ましょう。こっしょこっしょこ……」
「そ、そこは譲らないのね……」

【カナブとカナデ】

「いやあ、マサムネ殿は相変わらずでござつたなあ」

「そんなに長い聞いたわけでもないんだが？ なぜそこまでいえる
んだい？」

「それはカナデ殿も同じでござるよ。マサムネ殿たちをよく知つて
いるよつこじやべるだいざわる」

そういうい言い一人は笑う。

「あの一人は興味の対象だ。面白」と言つものだよ」
「「」」

そういつて納得しあう一人。

「あ、おーいかなー」
「おや？」
「誰で「」」れるか？」

一人の男性がカナーテのほうに歩いてくる。

「カナーテ。ニービに帰つてたなら家に帰つてこいや」
「僕は旅を終えるまで帰らないと言つただろ」
「しかしだな……ん？ 隣の子は？」
「へ？ ええと、拙者はカナブと言つもので「」」
「へえ。俺はカナーテの兄のエンソだ。カナーテをよろしく頼むよ。今まで男の子がよつてきさえしなかつたんだ」
「は？ いやまあ、これからも仲良くなしていいで「」」

なにやらエンソの言つことが理解できていよいよだ。
カナブは困ったように言葉を返す。

「何を言つているのかこの愚兄は。君も別にあわせなくていいんだよ」

そういうながらカナーテはエンソの腰あたりをける。

「いつたあ！ な、なにするんだよ。俺は妹思いのいい兄なんだぞ

！」

「騒ぐな恥ずかしい」

そう言つてけり続けるカナテ。

「やめて、やめて！ それもそれで恥ずかしいだろ」

「愚兄がひどい言葉を言つよりは気持ちがいい」

「それ愚兄だけ心が傷つくよ！？」

続く兄妹げんか。

カナブはそれを見ているしかない。

「せ、拙者」の状況が理解できなくて、「やれる……」

本編に続く

第十一壊・補足　これが眞実だ！（後書き）

第十一壊でみんなが考えた幻想をぶつ潰してしまったか。

第十三壇・1 ねむせひと……こや、親父をさー（前書き）

パソコンの調子が悪いので前後でわけます。

【おつかみやま前・ポケモンセンター】

「なんかくるまでいろいろと疲れたな」「ですね、何あんなにトレーナーが……」

ここに来るまで行くと泣くトレーナーと戦った。

別に誰も進化などしなかつたが、戦いの経験がなかつたチコリネことサコキとカミツルのレベル上げとしてはいいものだつた。

「しかし疲れたな……」ここで一泊して明日にハナダに向かおひ「もうしましようか」

そつまつてマサムネたちはポケモンセンターに入った。

「ほつちゃん。ロイキングいらないかい?」

「ロイキング? ああ、あのか」

「500円なんだが……」

「まあ、物によるな。普通のロイキングならそこいらでも見つかる」「話のわかる人ほつちゃんだ。今までロイキングと聞くと誰も買つてくれねえ」

「そうだな。最弱とされてるわけだしな……」

「ああ、で、ここつだ」

そう言って男はロイキングを出す。

「金色のハイキングだと……」

「ああ、水につけてもさすりでも落ちない。本物だよ」

「色違いポケモンか……」

「ああ、どうだい？ 水などに付けで本物か試すか？」

「いや、買つ」

「……まほひちゃん。金はいらねえ。もつて行け」

「しかし」

「いいんだよ。信じてくれたしな……それにたつた500円だ。気にするな」

「おひちゃん……」

そう言ひてハイキングをボールにもどしあひちゃんは差し出す。そして受け取る。

「てか、何やつてんですかマサムネさん？」

「突っ込むなよ、ミズホちゃん……」

そうしてマサムネは色違いのハイキングを手に入れた。

【次の日～】

「ああ、行べデシャドウー！」

「ハイハイハイハイ！」

ハイキングは跳ねる。

なんかダメな気がした。

「マサムネさん。そのこ大丈夫なんですか？」

「無論。だってどびはねるを使っているからな」

地面から少し浮いている。

何やう普通ではない。

「ああ、行くぞ」

「いこいんですかねえ……」

そしてマサムネ達はおつかみやまくと向かいづ。

後半に続く

第十三壱・2 ホップステップ……ああっ！

【おつきみやま】

「暗いな……」

「でも完璧に見えないってわけでもないですよ」

おつきみやまに入り、辺りを見回す一人。

「ハツハツハツハツハツ」

「ピカ……」

「ハツハツハツハツハツ」

「チユウ……」

カツハツはシャドウから少し離れていた。

「とりあえずハナダの方向に向かうかな」

「はい」

そう言つてマサムネ達はハナダの方角へと進んだ。

【？？？】

「本当にここにあるのか？」

「間違いないや。」の文献にはそう書いてある

男一人が一人いた。

その男達は奇妙な格好であった。

「あるんだ、あのポケモンの化石がな……」
「カントーであるここにか？ しかしあれば」
「ふふふ……ここにあるとあるのだからあるのだ」
「お前は……われらの目的。忘れておらぬだろうな」
「くつくくく。わかつていろよ……くつくくくく」
「お前は化石のことになると……」

そして男はさくへくと発掘作業に戻った。

「シャドウ！ 回転しながら落ちて来い！」

「ゴシゴシゴシゴシ」

「う、うわああああああああ！」

マサムネはシャドウで近くにいたガールズスカウトやたんぱくジギーと戦い勝利を重ねていた。

「ううし。なかなかいい感じだぞシャドウ」

「ゴシゴシゴシゴシ」

シャドウは喜んでいるのかはねる。

「ピカチュウ……」

カノコにはなぜあのシャドウがゴコモで強いのか理解できないうらい。

「 ハシ ハハハ……」

ベタンー

「 シャ、シャドウー どうしたー？」

「 ハハハ……」

PP切れです。

「 ハハハまでよく持ったもんだ……休んでてくれ

そう言つてシャドウをボールに戻す。

「 よし、代わりに出でここシモンー。」

ボンツ

「 モグリュー。」

シモンが元氣よく飛び出していく。

「 モグリュー？」

「 ピカ」

「 どうやらアガハではなくカコガが出てきてる」と少し驚いたようだ。

いつも自分が出でているときはミズホはトガを出していたからである。

「モグ」

「ピ」

カミコにシモンはそっぽを向かれた。

「リュリュリュ～」

「ピカピ～？ ピ～ ピカピカ……」

「モグ」

どうやら何かをきつかけ気仲良くなつたようだ。

「よし、なんかいい感じになつたので出発～」

「はーい！」

やつぱりヒマサムネ一行は先へと出発した。

続く

第十三壞・2 ホップステップ……ああっ！（後書き）

PPの概念はゲームと違います

裏第十三壱　だからお前はわからずやなんだよ　ｂｙシモン（前書き）

少し時間が戻ります。

後感想を何回も見ながら一いやいやします。

【某日：ポケモンセンター】

「モグリュ」

「ガメガメガ」

トガミとシモンが話をしているようだ。

「ガメガ、ガメガニガメガガメガ」

「モ、グリュリュモ」

「ガメ……」

「グリュ！ グググリュ！」

「ガメガア！？」

シモンに殴り飛ばされるトガミ。

「ガ、ガメガ？」

「モグリュ！」

「ゼ、ゼニ……」

「モグリュ」

「ガ、ガメガメガ！？」

「モグリュ」

「ゼ、ゼニイ！ ガメガメガー！」

そう言つてシモンはその場を去つた。

「ゼ、ゼニ……」

そしてその場に残されたトガミはシモンのことを考えるだけだった。

【同日・同所】

「ピカピ」
「チュリ」
「ピピピ」
「チュリ」
「ピ」
「チュリ」
「……ピカチュ」

「あれ、なんか会話してるようで成立してなくないか？」
「そうですか？ 私にはわかりません」

二人の会話を見てマサムネはそう述べた。

「ロッロロロロロ」

そして後ろではシャドウがとびはねていた。

本編に続く

裏第十三壇 だからお前はわからやななどと b レンサム（後書き）

訳がほしこですか？
読もつと思えば読めますよ。

第十四壇 私達は夫婦ですかね（前書き）

今回からタイトル担当//アズホちゃんに変更

そして執拗に同じ感想を見てにやける自分じゃ作者さん。

第十四壱 私達は夫婦ですね

【おつきみやめ】

「グリゴー」
「ピカピカ」
「ググググ」
「チユチユチユ」

シモンの言葉をうるうる語きながらカ///は聞いている。

「何を話してるんだか……」

「なら、紙とペンでも渡してみればどうですか？」
「書かせるつてか。あの手で書けるんかね」

そう言つてマサムネはハナダに着いたら
紙とペンを貰えてみよつと思つた。

【??.?.?.】

「これを見てみろー。この化石をー。」
「！」これは！ 確かにだな……」
「ああ、この化石を持ち帰るぞ」
「だがそれを見つけるまでに見つかったそれらの化石はゼットある」
「ああ、たしかに珍しくも強力でもないし目的対象ではない」
「ならば捨てておけ」
「つむ。では帰るとしようつか。田舎が終了した場所にとどまる必要

はない」

そう言つて男達はその場を去つて行つた。

「しあつ わせわあー」

「モモググモモグー」

「だーから毎日ー」

「モモモグモー」

楽しそうに歌いながら先へと進むマサムネとシモン。
そしてそれを見ながらついていくミズホとカミコ。

「いいなあ、シモン。うらやましいなあ」

「……」

マサムネとシモンを見てミズホは息が合つ一人をうらやましがつて
いた
そしてカミコはなにやら考え方をしているようだつた。

「グモモ～モフッ！」

シモンは何かにつまづきつけた。

「大丈夫かシモン？」

「グ、グモモ……モ？」

シモンは何か埋まつているものを見つけた。

「モグリュ」

「どうした？」

「グリリュ」

すると突然シモンはその部分を掘り始めた。

「なんだ、どうした」

「モグリュ」

何かを掘り当てたようで、その堀上げたものをマサムネに差し出す。

「何だこれ？ 化石か？」

「そうみたいですね」

そしてマサムネは化石をかばんの中に入れた。

「よく見つけたな」

「モグリュ」

マサムネはシモンをなでながらほめる。

「あれ、ここには何か発掘した跡がありますよ？」

「何？」

ミズホがいる方向に向かつと確かに発掘した跡がある……そして

「あれ、化石がいくつか落ちてますよ？！」

「おいおい。何だこの宝の山は……」

いろいろな化石が落ちている。

売ればそれなりにはなりそうだ。

「これだけあれば結婚資金には困りません!」

「何を言つてるんだお前は」

「お前とは。いきなりどうしたんですか」

「ミズホちゃん。俺は呆れて君の名前も呼ぶことができなかつたよ」

「や、嫌いにならないでください! 付き合ひ始めて数日ですよ?」

「」

ミズホはなきながらぴょんぴょんと飛び。

マサムネは眼福である。

「いや、別れないから。絶対に」

「ほ、本当ですか?」

「本当わ」

「はー! では早速化石の回収を……」

「うへ、おこ」

そつ言いながらも結局ミズホとともに化石を回収した……

【おつきみやま ハナダ側出入口】

「重いな……これは」

「考えてみればそうですね。どうしてココまで楽に持つていられたんでしよう」

「ははは。愛の力で持つてこれたりしてな」

「……」

(あれ、これもしかして……)

「愛の力ですか！ すばらしいです！ その通りです！」

「やつぱりこういうなるのか」

マサムネはやはりなという顔で呆れていた。

ミズホは暴走し今にも走り出しそうな雰囲気だ。

「よし！ ハナダシティまで超速ダッシュです！」

「ほえ？ ほ、ほへええええ！」

マサムネはミズホに手をつかまれ連れて行かれる形となつた。マサムネは化石を落とさないようにするだけで精一杯だった。

【ハナダシティ・古物屋】

「これ全部でこれだけで引き取るよ」

「わあ　これなら将来安泰ですよー。」

「ここままで貴重な品か？ 店主」

「ああ、この店もカントリーで一々を争つほど大きな店だと自負しているが、これほどのものはよく見ないよ」

そんなこんなで大金を獲得したマサムネとミズホ。その大金はミズホにより『夫婦のお金』という事でマサムネの銀行口座に振り込まれた。

マサムネの将来は決められてしまつたようだ。

「俺の未来はどうなるのかね……」

「幸せですよ。幸せ」

「まあ、不幸ではないだろうがね」

そう言つて二人はポケモンセンターに向かつた。

【ポケモンセンター】

「おや？ ガイトじゃないか」

「おっ！ マサムネか」

マサムネはガイトを見つけはなしかけた。

「どうだよ調子は」

「ふつ。聞いて驚くなよ。もうすでにジムは攻略した！」

「また先越しか」

「というか旅を始めた時期がつてやつだな、これは」

かつこつけたポーズをとるガイト。

「そして俺達は今から次の街に行く」

「なんだと！」

「じゃあな。俺が一足お先にジム制覇するぜ」

「つか追い抜いてやんよー！」

そう言つと、ガイトは笑いながらポケモンセンターを後にした。

「ガイトはやっぱライバルといえる存在だぜ」

「ユウミも私のライバルです」

二人は心に必ず一人にかつと言つ思いを刻んだ。

続く

第十四壇 私達は夫婦ですかね（後書き）

これポケモンリーグはアニメとゲームのどちらのようになりますか
どう思われますかみなさんは？

第十四壇 捕捉 これはこれかー

【ポケモンセンター】

「モグリュ！」

「何を怒ってるんだシモン」

「モグリュ！」

「お、そうだ、紙とペンを買つたんだ。ほれ」

そう言つてマサムネはシモンに紙とペンを渡す。

「グリュー。」

受け取るとあの手で器用に紙に文字を書いていへシモン。

「モーグリュー！」

「何々？『何で俺が掘つた化石を売つたんだよ、兄貴』とな

そしてマサムネは少し笑つ。

「モグリュー！」

なぜ笑うのがシモンには理解できない。

「ふつ。安心しろ。お前が彌つたやつだけはちゃんと保管している

ぞ」

「モ、モグリュー？」

「ほり、これな」

そう言つてシモンが掘り出した化石をシモンに見せる。

「モ、モーグリュ！」

それを見てシモンは喜び踊る。

ちゃんと分けていてくれたことがうれしかったようだ。

「うれしいのが、シモン」

「モグ！」

『ああ、兄貴』と書かれた紙を差し出しながら喜ぶシモン。そして二人は喜び続けた。回りから注意されるまで……

「て言うかよくあんなにきれいに文字がかけるもんだな」「モグリュ！」

どうだと言わんばかりに胸を張るシモン。

「トガミもできる？」

「ガ、ガメガ？！」

そう言われてトガミも紙に文字を書いてみるが……

「汚くて読めないね」

「ああ、そうだな」

そしてこの答え。

「ガ、ガメガアアアアアアア！」

「モグリュ」

叫ぶトガミ、そしてシモンは横で紙を出す
『不幸だあああああ』と叫んでいる、と。

本編に続く

番外編？（前編） 事故だと黙つて言ひ逃れしても加害者なことは避けれない

【「エリシティ・ポケモンセンター宿場個室】

「え、え！？」

「……」

「力、カナデ殿……」

「……」

「お、おなつ！」

「いいからででけつ！」

「い、いやあ。気がつかなかつたでござるよ」

「気がつかなかつたで乙女の体を見たことが許されるとでも？」

「し、しかしでござるな！ ぐ、偶然でござるよ！ 事故みたいなもので」

「なら被害者には何もないのかい？ 加害者」

そう言われると何も言つことはできない。

事故というものは考えて起つるものではない。

それはあたりまえの話だと言えよう。

そして被害者に対し加害者が何かをする。

そんなの当たり前のことだらう。

なら今この状況。

どうすれば解決できる？

「ならどうすればいいといつのでござるか！」

「…………び……」

「？ なんでござる？」

「乙女の肌を見たんだから永久に僕のしもべになつてもらひよー。」「な、なぬう！？ 永久でござるとー？ といつか僕とかいつお人でござつたか、カナデ殿！？」

「い、いいからわかつたかい！ 僕のいふことはこれからは絶対だよ」

「い、いざれ…… 一人旅する予定だつたでござるのに……」

おろおろとしだすカナブ。

顔を赤くしながら起ころるカナデ。

もはや何も言つことはない。

かくして、女とは知らずに風呂場に突入といつ大変な事件はカナデに僕ができたということで幕を閉じた……

何？ 風呂場で両者全裸ということを知らなかつただつて？ まあ、いいんじやないかな別に。

そもそも一人とも10歳だ、こんな事件が起こつていても不思議

いや、いまどきの10歳はよくわからない……

「ほら、荷物はこれだけ持つてね

「え、これカナデ殿の荷物で……」

「いいから！」

「お、おお…… わ、わかつたでござる……」

やつはわれてはいけないとを聞くしかないカナブはいそいそと荷物を持つ。

「こ、今から一ページムに行くのだけれどよ。拙者疲れてしまつで
いざる」

「持つた後に何も言わないー。」

「わ、わかったでござるよ…………」

そしていそいそと先に部屋を出るカナブ。

「まつたく……女心とこつものを見分からぬがは…………

何を言おうと彼女たちは一〇歳である。

後半に続くよ。

番外編？（後編） ロンヒネーション おと僕 永久 つまりは「いつまつ」の物語

【エビシティージム】

「よかつたな。今日でダブルバトルは終わりの予定なんだ」「運が悪いのかもだぜえ。俺とタケシさんのコンビには勝てないだろつからなあ～」

ポカッ

「そう言って何度も負けた？ そのせいであの二人組と戦つてからは勝ち続けていたとはいえ苦戦を強いられた。だからイワークとサンドは傷ついて休養することになったんだぞ」「だ、だ、大丈夫っスよー イシツブテ達でも勝てますよー。」

「エビシティのリーダーと弟子の漫才はすでにエビシティで有名である。

「「」、「」、「」何なので「」やるか」「」……」

「あれだろ、この「」の有名になつたつていう漫才でしょ

「ま、漫才！？」「」はポケモンのジムのはずで「」やるよー。」

「いや、別に本業じゃないだろ。て言つた僕は説明キャラ位置に……」

…

なんやかんやでなんやかんやである。

「いや、よくわからないで「」やる

「何を言つてるんだ君は。早く戦いの準備を

「」、「」やる

カナブはポケットのボールを出す。

「じゅうじするで」「やるか……」「は……」

「いいから早くしなよ！ 僕から先に行くよ！ 頼むよカミカ！」

「ぬ、ぬ、い、行くでじまるよカイのしん！」

ポシュンイン！
ポシュイイイ！

「カーイ！」
「チート！」

カナブはこの間に捕まえたストライクのハサのすけを出すが悩んだ
のだが
急かされてしまったので相棒であるカイのしんを繰り出した。

「いけ、イシツブテ！」
「俺のイシツブテも！」
「イー・シツ！」
「ツーウブ！」

ジム側の二人もイシツブテを二体繰り出した。

「イ、イシツブテ二体でじまるか」

「小さいから狙いにくいというのもあるかもね

そして戦いが始まる!とする……

「イシッブテ！ まるくなる！」

「イシッブテ！ こわおとしー！」

タケシのイシッブテはまるくなつた。

トシカズのイシッブテは「わおとしを放つた。

「よけるで! やるよカイのしん!」

「なぜいわおとしにしなかつた……はつ！ カミカー！」

「クチつ！？」

「イッシイ！」

「カイロオー!?」

いわおとしのいわにまるくなるでまるくなつたイシッブテが紛れ込んでいたのだ。

落ちてくる石、つまりはイシッブテが突然軌道を変えた。それに「四」は対応することができなかつたのだ。

「どうだ！ 僕とタケシさんの『コンビネーションプレイ！』

「……」

トシカズは大声をあげるがタケシは無言だ。
恥ずかしいらしい。

「つて、ありや？ クチートがいねえ」

「以前もこういう流れが……」

「チトオ！」

「ラッシャア！」

クチートの不意打ちがイシツブテ（トシカズ）に決まる。

「しかし、『うかはいまひとつ』

「カイのしん！」

「カアアアイ！」

「イッシャア！？」

カイのしんがイシツブテ（トシカズ）を助けに向かうイシツブテ（タケシ）をつかむ。

「ちきゅうなげで」ざわるー！

「カアアアイ！」

そして宙に舞うカイのしん。

普通ならレベルと同等の威力しか『えられない。

だがカイのしんの異常なスピードにより通常の一倍のダメージを『える！

「イッシャアアアー！」

「イシツブテ！」

タケシのイシツブテは倒れる。

「イシツ！」

体勢を立て直したトシカズのイシツブテはカミ力を倒そうとする。

だがそこにはカミカはない。

またふいつきをするのだろうかとあたりを見るイシツブテ。

「イシー。」

カミカを見つけたイシツブテはカミカに向けて加速する。

「チ～ト」

「そう。狙つておつてくるから馬鹿を見る」

「『』れる！ ばかぢからで『』れる！」

「カアアアアアアアイロオオオオオオ！」

「イ、イシヤア！？」

離れた位置にいるはずのカイのしんが高速で走つてくるぞまほ
イシツブテからしたら絶望でしかなかつた。

「これにて」

「閉幕つてやつだね

そう一人が発言したとき。

「イシヤア！」

イシツブテは地に落ちた。

「僕たちの勝ちだね」

「拙者たちの勝ちで『』れる！」

「そ、そんにやあ～」

「やはりこいつとのコンビでは無理か……

「ひ、ひでえ！？」

【エリシティ・ポケモンセンター】

「勝てたでござるな。よかつたでござる」

「ああ、そうだね」

「これも一人の力を合わせたからござる」

笑顔でそういうカナブ。

「ツ！」

「？　ど、どうしたのでござるへ…」

「……何にもないさ」

「どこか具合でも……」

「ツ……ツラ…やつをと次の町に行く準備をするんだ！」

「！」

あわてふためるカナブ。

「君の地位はずつとそこだよ。カナブ、……」

「じ、事故でござったのにここまで……」

「加害者に何も言つ権利はない」

「ひ、ひどいでござる～」

たぶん永久に変わることのないだらつこの関係。
そう。永久に。

本編に続く

第十五壞 まあ別にマサムダれなんならここやかまわぬ
(前書き)

感想待つてます。

第十五壱 まあ別にマサムネさんならいいですけどねっ

旅。それは人生の縮図。男のロマンである。

「行つけえー！シャドウー！」

「コツコツコツコツコツ」

「どびはねーる・れつじまきしまむ・ぱあにんぐー！」

ピュー

「何してるんですか？」

「いや、なんか突然したくなつて……」

「ガイトに負けるわけにはいかねえ……」

「ゴウミに負けるわけにも行きません」

一人の背中くに燃える炎が見える。

「ガガガガガガガガガガガガ」

「ピチュー」

炎ではなくトガミがカミコから電撃を食らつていただけのようだ……

「モグモ」「チエリ」「コツコツコツコツ」

「マサムネの手持ちメンバーはそれを何もせず傍観するだけであった。」

「モモーグモグ」

トガミはすぐに回復した。

超回復能力でも持つているのであるらうか。

「とりあえずゴールデンボールブリッジに行こう
『いきなり何を言つてゐんせうか！』
『え、何？ せうか？』
『ゴールデンボールブリッジなんて！ 卑猥です！』
『ゲームフリークにでも言ひてくれ』

そんなこんなでゴールデンボールブリッジへ

「シャドウ。じびはねるー そしてシモンは落トウソヘスピンー。」

じびはねるで空に上がるシャドウの上にはシモンが乗つていて、そしてそこからシモンは落下しながらのじみかくスピン。

「ビビイイイイイ
「キヤアアアアア」

キヤタピーヒバードル相手にやりすぎな気もするが……
と言つた橋に穴が開いているようなきもするが……

「ま、負けでいい。負けでいいから。もつやめてくれーーー。」
「え、いや、まあ。うん」

そう言つて戦いは終わりを告げた。

「『ゴーリデンボール』ブリッジ制覇おめでとう」「と言つても二人で協力してなんですか?」「その通りです。愛のコンビネーションです」「そ、そういう。じゃあ商品のわざマシンだよ。一つしかないけどね」

そう言つて係りの人が渡してくれるわざマシンを受け取る。

「それカントーでは買えない非売品だからね」「へえ。ならござと叫びつきまでとつておこひ」「わざマシンは一度使いつときませんからね」

そう言つてかばんの中にわざマシンをしまづマサムネ。

「やうにえはこの先にポケモン転送システムの生みの親。ポケモンマニアマサキの家があるらしいですよ」「ほひ。一度会つてみたいもんだね」「じゃあ行きましょうか」「ん? いや、あ。あいに行つて会えるものなの?」「ああ」「ああ?『ああ』なんだよねやっぱり?」「とつあえず行きましょう?」

「俺は尻にしかれる旦那になりたくないあ～いーー！」

「リリがマサキの家です！」

「セツニヤミズホちゃんはマサキは呼び捨てなんだね」

「リリに呼び捨てでようじへじて書いてますよ」

ミズホが差し出したのは管理システムの利用条約。この一つにマサキは自分に話すときは呼び捨てでタメ口じゃないと駄目だと書いてある。

「なんか、お気楽そうな感じの人だな」「ははは。」れなら余おつとすれば会ってくれますよ

せつまつて家のインターフォンを押す。

ピーンポーン

「……」

ピーンポーン

「……」

「……シャドウ」

「ハシココココ」

「……行け」

「コツコツコツ」

スウ

「…」

スウ

「コツコツコツ」

「シモン」

「グリュ」

「コツコツコツ」

「グリュ。グリュ」

カキカキ

「グリュ」

「そうか、中にはマサキはいなかつたか」

「偵察ご苦労です」

「コツコツコツ」

そしてマサムネたちはポケモンセンターへと帰った。

解説

シャドウがどびはねるで家の中を調べ
シモンに報告して、シモンが紙に結果を書き
二人が呼んで納得した。
と言つことです。

続
く

裏第十五壇 なんぢやひやかわいせー（漫書也）

感想待つてまかよ。

裏第十五壇 なんやつひゅうさー

【マサキの家】

マサキの前には一人の男がいた。

「なんや、あんたらは」

「我々は……いや、なんか悪人ぽいなこれ」

「おーおー。えーとマサキさん。私達はこいつらのものです」

やつひゅうさきに男は名刺を取り出す。

「ポケモン解放会？ なんやねんこれ」

「ポケモンを解放するための活動でして」

「その為に転送システムを我々にお貸しいただきたい」

「んな」といきなり言われて『はい、そうですか』なんて言つ詫な
いやう』

何を当たり前なと言つ顔をしながらマサキは答える。

「それもそうですね。まあ我々も悪人ではないですし今回は帰ります」

「では、失礼します」

そう言って男達はマサキの家を後にした。

「なんやつたんや……また来るんかな、あの一人。めんどくさー

(ポケモン解放会……目的はポケモンの解放かい……なんてな)

ガチヤ

くだらない」と考へていると扉がまた開いた。

「ん?
なんや?
ポケモン解放会の一人が戻つて来たんか?」

そう言って後ろを振り向く。

「つて。誰がお前せー！」

「あ、悪人や？！」

驚かぬ。恐い。アガキ。

さつきの一人とはまったく違う格好をしている。

「いや、おまえがわれてたまるかー！ 行くんだよ」
「…………」

マサキは近くにいた口「ンを男に差し向ける。

「アーニがやつせいかないんですよ~」

さらに男が現れる。

「行くんだ。化石より再生されしポケモンよー。」

- 1 -

「な、何やそのポケモンは！ う、うわああああああああー！」

「くふふ。さすがにこのポケモンには勝てなかつたようですねえ」

「ふむ。さすがは大昔の強力なポケモンだ」

「しかしこれは私達の目的の一歩でしかないのでですよ

「ふつ。そうだな」

「では、帰りましょう。ジョウトへ」

「ああ……あの人も我らを待つてゐるだろうしな」

そう言つて男二人はマサキの家を去つた。
マサキはポケモンが袋に入れ扱いでいた。

本編に続く

第十六壇・1 そう、マサムネさん以外はいりでもこいのです
(前書き)

感想は隨時募集

第十六壊・1 そう、マサムネさん以外はどうでもいいのです

【ハナダシティ・ポケモンセンター】

「しかし、留守で残念だったな」

「ええ。でもまあ、会わなくともまったく問題ありませんー。」

「まあ、ないんだけどね。うん」

問題ないとはっきりと行こうと言つた人に言われるとほ
マサムネも予想はしていなかつた。

別にミズホ的にマサキなどどうでもよかつたようだ。
マサムネ的にはあってみたかったので少し残念だが。

「まあなんだ。レベル上げもなかなかにできたし明日はジムに挑戦
だな」

「そうですね。ハナダは水ポケモンのジムのようですし、明日は力
ハコで行きまよー!」

そう言つて足元にいるカミコを抱き上げ抱える。

「ピカチュー」

「そういうや、ミズホちゃんはカミコは抱えるけどトガミは抱えない
ね」

「ええ、オスですから。マサムネさん以外の男にカミコを触らすわけ
には行きません!」

「ああ、そう。ポケモンすりすりの対称なんだ……」

なんかトガミが倒れていつものように叫んでいる。

が、今回はマサムネは同情しなかつた。

「モグリュ……」

泣くなよと言わんばかりに慰めるのはシモンだけであった。

「お風呂付です！ 個室にお風呂が着いてます！」

「ああ…… やうだね……」

そう、お金がたらふくできたために少しお金をかけた部屋に泊まつたのだ。

超豪華と言つわけではないが普通よりいいといつレベルの部屋だ。

「わかつてますよね？ わかつてますよね！」

「え、あ……ああ……ミズホちゃんの言いたいことはわかるよ。でもね

「でも？ でも、何なんですか？」

「いや、その、さあ」

「私達の関係って何ですか？」

「え、いや、なんか流されただけつて言つか……」

「流された？ 意味のわからない」と言こますね

(じゅ、10歳の女の子に「」まで押されていいのか俺は……)

しかし、10歳とはいえっこ……ミズホと風呂に入る
と恥づ」とを感づるのは当然である。

「いいですか。私達は恋人なんです」

「いや、だから。今考えると流れで……」「…

「ひどいです！ 私とは遊びだったんですねー！」

「グ、グウ……」「…

(ミズホちゃんがこんな言葉を覚えるのもすべて野球バカエティゲ
ームのせいだ……)

「いつなつたら。むりやつにでもつれていぐー。」「…

「な、なにをすみ!! ミズホちあああああん！」

「ふふ。『じごびとじびつ』です『じせんぶ』です。」「…

その後のことばじ想像にお任せする。

大事なものは失っていいないとだけ言つてしまへ。

「朝ですよ~」

「朝ですね~」

マサムネは起きる。
ミズホも起きる。

『ただしなにもかうびしていいない』

「……着替えよつ」

「はー。この際だから着せあこましょひー。」「…

「さあ、ジムに行きましょう!」

「ああ、行こうか。ジム挑戦に」

何事もなかつたのよう」「一人はジムへ向かう。

「チュリチュリ」

「ピカチュ」

今回はこの一匹で挑むつもりのようだ。
くさとでんき。

愛称を考えてのものだがうまくいくかはわからない。

言い忘れていたがハナダもダブルバトルを受け付けている。
ただし。ジムリーダーひとりで一體を使つてくるらしい。
挑戦者は一人だろうが二人だろうがいいらしい。

「今回のジムリーダーのカスミはかなりの実力者だと聞く
「ぬふふ。私達の愛のコンビネーションに勝てるものなしです!」
「そんなドイツ人武士みたいなこと言われても……」
「? よくわかりませんが否定はよくないです。愛は絶対です
「……そうやね」
「なぜ関西弁……」

後半へ続く

第十六壇 - 1 もう、マサムネさん以外はじつでもこのでや
(後書き)

世の中思ひ道徳にはこまません。

第十六壇 - 2 なんていふをしてくれますか！（前書き）

感想は隨時募集中

第十六壇 -2 なんじことをしてくれますか！

【ハナダシティジム】

「ふふつ。あなた達が挑戦者ね」

ジムリーダーカスミ……水着姿だ。

「何で破廉恥な格好を！ マサムネさんにそんなもの見せないでください」

「え、ミズホちゃん？ ここ回りプールだよ。ただの水着だよ？」
「むきいい！ マサムネさんに肌をさらしていいのは私だけなんですうううう！」

ポカポカとマサムネを軽く殴り続けるミズホ。

「い、痛いよ。い、痛いって」
「……大変ね、あなた」
「はい、大変です……」

と言つわけだ。

「ジムリーダーはポケモンを二体。挑戦者二名はそれぞれ一匹のポケモンを使用のダブルバトルとなります」

審判役のカスミの弟子がそつまづ。

「では、始め！」

それを合図に戦いは始まる。

「行けっ！ サコキ！」

「行つて！ カミコ！」

「チュリ～」

「ピッカ～」

マサムネ・ミズホ組のポケモンがでる。

「行きなさい！ ヒトデマン。スター＝ーー！」

「へヤツー！」

「スタアアアアア！」

鳴き声の仕方がヒトデマンだけ違つよつた気がする……

「試合開始！」

審判の掛け声とともに戦いは始まる。

「スター＝ー、ヒトデマン。ヒツヘスパンよ

カスミの声とともに元氣いっぱいに接近してくる！」

「よけろサコキ！」

「カミ！」もよけて！

その攻撃をよけるが再び後方から襲い掛かってくる。

「チコリッ！」

サユキにヒトデマンがあたり。

「それほどでの威力でもないよつだ……レベル上げの成果か」

（しかしあの「いつわくスピン。ねむつ」なやしじれ「なをつかつた
いりじに返されかねんな……）

「カミロ。かげぶんしんです！」

「チコウー！」

カミロはかげぶんしんをする。

「そんなの「いつわくスピンで全部狙つてやるわー！」

そして再び「いつわくスピンでの攻撃が始まる。

（カミロに攻撃を集中させてくる？ そつか、やはりダブルバトル
には慣れていたんだ）

一対一のような戦い方をしている。

これではトレーナーが二人のマサムネたちに勝てるかはわからない。

「サユキ。せじちょうどだ」

「チコリ！」

カスミはサユキがしている行動に気がついていない。

「カミ」「。でん」「せつ」かです！」

「ピカチュウ！」

カミコのでん」いつせつか。

「へヤツ！」

ヒトデマンにヒット。

「ぐうう。やるわね」

「サユキ。ヒトデマンにメガトレイン」

「チュウウウリ！」

「へ、へヤツ！？へ、へヤアアアア」

突然の攻撃に驚きながら力尽きるヒトデマン。

「……ふつ。サユキのことを忘れているからだ」「スタアミイ！」

サユキめがけてスター＝一が飛んでくる。

「スタアアアア」

みずのはじつで攻撃を仕掛けてくる。

「」「かはいまひとつでレベルも同じ程度だ。倒れるわけないだろ
う！」

「チュリイ！ チュリイイイ！」

サユキはマジカルリー／フで攻撃した。

スター＝＝＝」直撃する。

「ス、スタアアア」

じいせいをするスター＝＝＝。

「カミコも忘れないでください。カミコ、ヒレキボール！」

「ピィイイカアアアチュー！」

「ス？！スタタタタタタタタタタ」

そして下に落ちていくスター＝＝＝。

「……はつーひ、ヒトデマン、スター＝＝＝戦闘不能。よつて挑戦者の勝ちー。」

そしてマサムネたちは勝利者となつた。

「完敗よ……なれどもないのに一人で戦おうとしたからかしらね……」

「ああ、そうだな。そうだね。さあバッジをくれ」「そんなにはつきりと言わなくてても……まあいいわ。はい、これ

そう言ってカスミからブルーバッジを受け取った。

「よし。また一歩前進だ！」

「チヨリ」

次回に続くです

裏第十六壇　いくつ始まる旅物語（前書き）

感想は募集しますよ。

裏第十六壇　いくつ始まる旅物語

【ハナダシティジム・更衣室】

「カスミが負けるなんて……カスミより強い奴ってまだまだいるんだ……」

彼女はジムの一員であるピクニッケガールのゴズエ。マサムネたちの戦いを見て自分はまだまだ下なのだと感じたようだ。

「これは旅に出るしかないわ！」

ゴズエ、13歳にして初の旅である。

【この小説だけのお話】

旅には10歳には出れる。これはよく知られるルールであるがジムの門下生となるという道もありなったものは旅に出ないでジムリーダーのもとで修業し一人前のトレーナーになるというものである。

「と言つても一人旅つてのはねえ……そうだわ」

そう言つてカバンをあさるゴズエ。
そしてポケギアを取り出す。

「あいつも旅には出てなかつたわよね」

プルルルル

「もし……もし……なんだ……」「ズハ……」「ど、どうしたのあなた？なんか元気ないけど……」「あ、ああ。気にするなよ……それでどうしたんだよ……」「いやね、実はね。旅に出ようかと迷つてね」

「旅に？お前が？」

「ええ。私、自分が弱いつてことを確信したの」

「そうか。お前は……まあ、頑張れよ」

「それでね。一緒に行かない？」

「……は？お前、俺はジムの門下生で……」「あんたも、痛感したんでしょ」

「……そうか、あいつらが来たのか。そりが……」

「私ね、あんたしかいないの」

「都合のいい走りってか。まつたくよ」

「まあ、そうね」

「うし、わかつた。タケシさんに話しつけてハナダに行くわ」

「うん。まつてるわよ。トシカズ」

そしてポケギアの通信を切る。

(これから旅が始まるのか……楽しみだわ)

そう、これはジムの門下生たちが旅に出るまでの軌跡である……

本編に続く

第十七壇

ちゃんとかく行つてくださいー 少しも見逃せないです……

感想は隨時募集。

第十七壇 セーフリードームかへ行つてください！ 少しも見逃せないです……

【ハナダシティ・ポケモンセンター】

「なにやらパツとしない感じだけど勝利したねえ」「すべては愛の……」「いや、もうそのパートーンはいい」「パ、パートーンとは何ですか！」
「もうそんなことをなくとも愛は伝わるよってこと」「なんと！？」

その言葉を聞くと突然ミズホはぐるぐる踊りだした。

「うれしいです」「……慣れるしかないよね。慣れるしかないんだよねー。」

マサムネの受難は続く。

「てなわけで、次はクチバシティに行くよ」「おや、ヤマブキシティのほうが近いのでは？」

ミズホが疑問の声を上げる。

「あそこはいまはゲート建設中で通行止めなの」「ゲート？ 普通の人間は入れなくなってしまうですか」「いや、ほれ、通行証」

ポケットの財布の中からマサムネが通行証を出し見せる。

「何で持ってるですか？」

「親父はヤマブキで働いてるからな」

そう言いながら通行証をなおす。

「てなわけで、クチバに向かおう

「クチバですか。海の町ですね……しかし水着はNGです。私はマサムネさん以外に肌はさらしません! なのでどうしても見たいならホテルでも泊まってそこで……」

「いつも道理飛躍しそぎだよ。別に海に泳ぎに行くんじゃないんだよ

「み、見たくないとおっしゃる! し、死ぬしかないですよ!」

「またまた飛躍しそぎ! 見たいとか見たくないとかの話じゃないよ」

いつも道理のミズホを抑えながらマサムネはクチバとの地下通路向かつた。

「ぶつぶつ……もつと勉強しなくては……その為には……」

(なにやらミズホちゃんが怖いこと言つて涙がするナビ
… 気のせいだよな)

「既……子……グフフ」

隣で不思議な笑い方をしてミズホを見てマサムネは少し恐怖を

覚えた。

「しかし」には長いなあ。クチバまでは遠いと言つてがよくわかる

「本当にですね」

ミズホは落ち着いたらしくマサムネの言葉に返答する。
そしてそのままとぼとぼと道を歩いていく。

「ん？ なんかあそ」でもめてるな

「なんでしょうか？」

「あなた達は悪人です！ ポケモンは解放すべきなのです！」

「何言うかてめえ！ こいつは俺が捕まえたんだ。どうしようと勝手だろ！」

女性が一人男性に詰め寄っていた。

「ポケモンにも人権と言つものがあります！」

「あるわけねえだろ！」

「ですからそういう人たちからポケモンを解放するのがですね

「うつせえんだよ！」

「うわっ」

解放解放と言い続けていた女性は男に飛ばされた。

「けつ。うせえ」

そう言つて野はその場をさつた。

「いたた……ポケモンの解放はポケモンを救うの……」

「おいおい。何があつたてんだ?」

「は、はい? どなたですか?」

「こや、なんかあつたのかなと思つて」

ミズホはマジ切れしてウルサをにらんでいる。

「あ、これはすこません」

ミズホは女性に手を差し出す。

「ふう。私の名前はウルサです。あなたは?」

「俺はマサムネ。こちまではミズホちゃん」

「よろしくです……が、わざわざこの手を離すのですー!」

ミズホはまことに手をつかんでいるウルサの手を無理やり引き離す。

「まつたぐ。何ですかこの女はー!」

「何も手をつかんただけでそこまでも……」

「マサムネさんはまだまれているのですー!」

「あの~私はお邪魔ですか?」

「え、いや、まだなんであんなことになつてたか聞いて……

「邪魔に決まつてます! この場から去つてくださいー!」

「ナニですか……ではこれで……」

そう言つてウルサはその場を去つて行つた。

「おじおじ、ハナダの方に歩いて行つちやつたで」
「ふん。これでいいのです」
「……ああ、そうね……」

マサムネの心には疑問が残つたままだつた。

【クチバシティ】

「つっきましたあ～」「なんか暑いな……」「なら、冷房のきいてるポケモンセンターに行きましょ～」「ああ」

そしてポケモンセンターに入るマサムネたち。

「お、おおこ。マサムネ君」「あれ？ オーキド博士！？」
「お、おじこさん！？」
「いやいや、久しいのぉ」

突然話しかれられたと思つたらその相手はオーキド博士であつた。

「な、なぜこに」「なに、サンタアンヌ号が年に一度来る日でな。船で講義をしてほしいといわれてな」「そうなんですか～」

「こじでも、ミズホは少し見ぬつかマサムネがつたつづつ
いてるのよ~」

「やだ、おじこれまつたら」

凄くうれしそうにしゃべるミズホ

それを見てオーキド博士は大いにうれしそうだ。

「これはヨーロッパさんに伝えておかねばならぬの」

「ははは、なんか未来が見えます」

「ふむふむ。おつー、やうじゅ、一緒にサントアントニオのパーティ
にでも行かぬか?」

「パーティーに?」

オーキド博士の言葉に一人の疑問の言葉が重なる。

「さつきも行つたが講義を頼まれておつての。その後にパーティー
があるんじや」

「それに俺達も……ですか?」

「どうじゅな?」

「マサムネさんの意思に従つままでです」

「え、そう? なら行きます!」

「やうかそうか。つむ。では明日はパーティじや」

そしてマサムネたちのパーティ参加が決まった。

続く

第十七壇 セイセイジンがく行つてください。少しも見逃せなことです。

サントアンヌ邸は一年に一度クチバに来るとこりこりになつてます。
あと、マサキですが、第一部にはまつ延できません。

裏第十七壇 気がつかないと 気がつく」と

【ハナダシティ】

「ふう、ふう。やつとつきましたね。ハナダシティ」

走りつかれている彼女はウルサ。
マサムネと別れた後早足でここまで来たのである。

「おお、ウルサ。来てくれたのですね」
「いやあ。まつてた、まつてた」
「すいません先輩。遅れてしまつて」
「いやいや、いいんですよ」

以前マサキの家に言つた一人組みと合流していた。

「いやあ、きっと他のよつな女性がいればマサキさんも協力してくれるはずです」
「ええ、美人ですか」
「そんなことないですよ。お一人の奥さんだつて……」
「はは、そんなの昔のことです」
「そうそう」
「後でそいつ伝えておきますね」
「や、やめてください」

うつたえる男二人組。

「とりあえず、マサキさんの家に行くのです」
「行きますか」

「行きましょ」

「あれ、お留守ですか？」
「いや、扉の鍵は開いてる
「おーい。いませんかあ」

勝手に家の中に入る三人。

「いないですね」
「いないな」
「いないよね」

そこにはマサキはない。
すでにさうわれた後である。

「特に荒らされた形跡とかは？」
「ないですが……ん？」
「どうしました？」
「でかい足跡が……」

部屋はそのまんまだが一部にでかい足跡がある。

「ん~何があるんじゃないですかね」
「何かつて何でしょ」
「わかりませんよ、そんなの」
「でも荒れた形跡がないですしねえ……」
「しかたないです。マサキさんの協力はあきらめて本部に帰りまし
ょう

そつ言つて三人はマサキの家を後にす。
事件が起つたといつ事實を知らずに……

本編に続く

裏第十七壞 気がつかないと 気がつくると（後書き）

悪つて何ですか？
正義とは何ですか？

答えはどちらも偏見です。
いや、求めるものの答えですかね。
まあそんなことは気にしなくていいのでしょ、ひ。
答えを考えるのは自分なのですか？

第十八壇 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですか？

【クチバシティ・ポケモンセンター】

「ふ、普段の格好でいいんです？」

「別にそういう階級の人があるパーティーと言つわけじゃないんじや。普通のトレーナーも来るぞ」

「サンタアンヌ号は豪華客船なのに庶民に優しいんですね」

「まあ、セウゴー！」とじゅの

いよいよパーティと緊張し始める一人をなだめるオーキド博士。

（もしかしたら新たな戦いの出会いがあるかもしれない……ワクワクだな！）

（もしかしたら）マサムネさんとの既成事実が……一くツ。楽しみです！）

それでは笑顔だったが、その心の中の考えていることは大差があつた。

「なにやら一人の笑顔から怖いものを感じるの……」

「マサキさんいませんでしたしねえ。私達のよを伝える方法内ですかね」

「そういえばサンタアンヌ号が来ているとか」

「それにのりこめばいいんじゃないですか！」

「でもチケットを買つお金がないですよ」

「ああ……帰りの分のお金まで使うわけには
「出入り口で講義でもします？」
「やつしましょうか」

【サントアンヌ号前】

「見てくださいマサムネさん！ 大きいですよ！ 大きいです！」
「ああ、大きいね」

年相応のはしゃぎ姿を見せるミズホを見て
マサムネはかわいいと思つて頭をなでていた。

「いく」

「なかよしだ」とは「こ」とじやの。さて、そろそろ行くぞ

そつまつてオーキド博士はサントアンヌ号へと向かつ。
マサムネたちもその後を追つ。

【一方その辺】

「ガイトおーあの船に乗らないのおー楽しそうなのこー」

クチバシティのジムから出てきたガイトとコウ!!。

「いや、しかしだな。俺はマサムネの先を行くと宣言してだな
「ええ～乗りたいよお～乗りたい～」

「ウヰは外との背中を乱打する。

「ああ、わかった。わかったから。乗ろ。乗りつけ
「そうこうと思つてたよ。はい、チケット」

そう言つて背中のカバンからチケットを取り出す。

「何でお前がチケット持つてるんだ」

「お母さんから貰つてたんだよ」

「お、叔母さんから!? 行かないと言つてたら叔母さんをたてに使つて無理やり連れて行く気だつたのか?!」

「ああ~」

「」「こいつ……まあいい! とにかく行くぞ!」

「おお~」

そんなこんなでガイトもサントアンヌ号に乗ることにとなつた。

【サントアンヌ号】

「す、凄い豪華ですね」

「そうだな。しかしいる客は一般人ばかりだ」

周りを見渡すと豪華な服装をしていると言う人は数えるほどしかない。

「豪華な服装をしている人たちは眞の金持つて人みたいなのばかりだ」

「ふん。世の中お金より愛です」

「まあ、金はあるんだけどね……」

そしてマサムネたちはオーキド博士の後ろに続々部屋に向かう。

ガチャ

「ヒノがわしの部屋じゃ」

「ほえ～」

「この船はカントーを離れた後シンオウに行く予定での。パーティの後はホウエンに向かう予定じゃ」

「シンオウに？」

「うむ。ナナカマド博士がわしに会いたいらしてこのでな

北の地シンオウ。
ガイド達の故郷である。

「へえ。一度行ってみたいなあ。雪とか見たことないし
「いずれ行くこともあるじやろつて」「さ、マサムネさん！ そいつを回つてしましちゃつー。」
「ああ、そうしよう

そう言ってマサムネたちは部屋を後にす。

「ふむ。ヒノで他の地方のものと戦うことができるかも知れんの……」

続
く

第十八壱 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですか？（後書き）

そろそろ疲れ始めた。

毎日一話考えるの辛いね。

ため書きしたりしてる人もいるんだろうけど。

第十九壇 何を感じた？（前書き）

今回からタイトルは再びマサムネくんに戻ります。

第十九壇 何を感じた？

【サントアンヌ号】

「バトルフィールドか。すげえなあ船の中なのに
「船なのにすごいですね！」

船の中にある大きなバトルフィールドを見て驚きの声を上げる一人。

「そうだな。すごいバトルフィールドだと思つぜ」

突然後ろから声が聞こえた。

「ガイト！ お前も来ていたのか」
「まあな。コウミのわがままだ」
「ぶう～私のわがままじゃないよ～」

ガイトの背中にべつたりとくつついでいるコウミは不満そうに言葉を発する。

「やれやれ……ともかくにもだ。俺は別に今はバトルする気はない。ジムに挑戦してそのまま来たしな」
「ジムに行って來ただと!? まさかまた……」
「ふつ。すでに攻略済みということだ」
「またつてことかよ……」
「決着は大会で……そういつたはずだ。俺は負けることはない」
「そうだな」
「ではそろそろな。コウミがつるせこしな」

そつまつてコウツを背中にくっつけたままガイトはその場を後にしてた。

「あいつはあいつで大変だな……」
「何が大変なんですか？」
「男にしか分からぬ大変さ……」
「男にしか分からぬ……そんな、マサムネさんの大変さを分かってあげられないなんて……」
「…………うん」

もはや何も言ひとはなかつた。

「バトルがしたい～したいんや～」
「おやおや、いつもと違つ感じやな」

ジョウト訛りの男と女の子が会話をしていた。

「いやな、じう言つノリの時はバトルつてのが筋やねん
「しかし、じいじで降りてジョウトに帰れんの？」

女の子が男に問う。

「帰れな話が進まんけどな」
「せやな。せやけど兄ちゃん。どこのだれと戦つて言つた？」
「てけとーや、てけとー」
「そか。てけとーか」

一人は一へラ一へラと笑つてゐる。

「おひおひ。なら相手あれでいいんぢやう?」
「よしよし。あいつと戦つてみよか」

二人は見つけた適当な相手に戦いを挑みに向かつた。

「なんか、会つてはいけないものに会いそうな予感が」「突然何を言つんですかマサムネさん」「いや、なんか体が突然震えて」

マサムネは何かわからない不安に襲われた。

「ん? バトルフィールドでバトルが始まるみたいだな」「おやおや、マサムネさんが一番になると想つっていたのですけど」

バトルフィールドを見ると同じ年の少年と年上りしき青年が立つていた。

「ん、あれ?」
「マサムネさん?」
「え、あ、何?」
「いえ、何かを見ていたようだ……」「俺が、何かを見ていた?」「ええ、何かに……」

マサムネは少し考えていた。

(俺があのフィールドを見て何かを感じだ……そういうえばガイトも

時も何か……（

何かとは何か……

何かを感じてはいる
何を感じているのか

何かはわからない……

「何か……」

「マサムネさん？」

「あ、いや。あれ？」

長い時間考え事をしていたのかバトルは知らない間に終わっていた。

「どうやら一対一で短期決戦で終わつたようですね」

「短期決戦ですか」

「もうバトルしてた人はどこかに行つちゃいましたよ」

「行つちゃつたか……」

感じた何かを分からずじまいに終わってしまった。
結局いつたい何だったのか。

そもそも『何』とは……

「どうやらおじさんのお話を始まるようですよ」

「ん、ああ」

ミズホの言葉へのマサムネの返事は軽いものだった。

「マサムネさん？」

「ん？ どうかした？」

「心ここにあらずといつ感じなので」

するとマサムネの顔は少し驚いたような顔になつた。

「いや、そんなことはないよ。いつまとも変わりはないよ」

「わ、ですか？」

（バトルを見ただけでここまで悩むものなんでしょうか……）

ただミズホの心には不安が残つた。

続
く

第十九壇 何を感じた？（後書き）

感想は募集しますがいつときますが
答えられないようなものにはこたえられないの
でそここのところはよろしくお願ひします。

第一十壱・一 かわいがゆくわく..... キーパー タン - (謹書也)

感想は募集中です。

第一十壱・1 かつじよかわる よじやーなん-

「以上で話はおしまいじゃ」

オーキド博士の話は終わった。

「どうやら話も終わつたようだ」

「わうですね。マサムネさん」の後は……」

「」の後ね。どうするかね「

(普段のマサムネさんに戻つてゐる……でもなにか……)

「どうした? ミズホちゃん?」

「あつ、いえ……」

間もなくダブルバトル景品付きバトルイベントが始まります

突然アナウンスが聞こえる。

「景品付きダブルバトル?」

「あつ。あつちで参加者募集中らしいですよ」

「景品は勝つたペアの一人一人がくじ引きで決まるか……」

面白そうな話である。

対戦相手は用意された船員と戦つらじい。

「運だめしに力試しつてか……面白い話だ」

「試し放題つてやつです」

「試し放題。しかも無料でつてか……参加しかねえよ
「グフフ。愛の力で簡単に勝利です」

ミズホもいつもの調子に戻った。
不気味な笑いが周りの視線を集めめる。

「ハ、ミズホちゃん？」

「さあ、行きましょう。グヘヘヘ……」

ミズホのキャラは安定しない。
壊れるときは壊れる。

【特設バトルフィールド】

「ん、ん？ 違和感はないか」

「マサムネさん？」

「ん、ああ。相手が気になつてな」

(さつきの違和感がない。つまりはあの対戦者はいない……)

マサムネは今のところ通常だ。

(しかし、いないというのは確定か？ ガイトの時も始め少し違和感を感じただけだ)

違和感は違和感。

その何かはわからない。

「君たちが挑戦者だね？」
「つと、そうです」

「ですよ」

船員が現れ二人に言葉をかけてくる。

「よし。ならばバトルの準備はOKか！」
「できます」

「です」

「ではパドル！」

船員はボールを構え投げる。
それに合わせ一人もボールを投げる。

「行けっ！ シャドウ！」
「行くです！ トガミー！」

ボールからシャドウとトガミーが出てくる。

「コッコロコロコロ」
「ガメ！ ……ガメ？」

隣のシャドウがいつもより光っているような気がする。
トガミーはそう思った。

「リキー」
「メノオ」

船員のポケモンはワンリキーとメノクラゲだ。

「試合開始！」

審判役の船員が叫ぶ。

「ハシ ハハハハハ」

シャドウはとびはねる。

「ガメヒー！」

トガミはじつそくスピン。

「リキキキー！」

「メノオー！」

トガミのじつそくスピンはよけられる。

「ガメガメガアアアア！」

だがちらに高速に回転し、じつそくスピンの勢いは高まる。

「リキツーー？」

「メノー？」

一匹の周りを回っているだけで攻撃をしているわけではない。

「ハシ ハハハハハ」

一匹がトガミに集中している瞬間にシャドウが落下してくる。

「リキッ！」

しかし氣がついたワンリキーのからでチョップで当たる直前に落とされる。

これによりほんの少しワンリキーはダメージを受けたようだが。

「ガ、ガメガ！？」

予定が崩れたトガミは急停止する。

「メノオ！」

「ゼ、ゼニガ！？」

トガミはメノクラゲにしめつけられる。

「ガ、ガメエ」

「リキキ」

徐々に近づくワンリキー。

「ガ、ガメガ……」

こうそくスピンしようにもワンリキーが近すぎる。
逃げたほうが大ダメージを受けるかもしけない。

「…… ハシ …… ハシ ハハハハハハハハ」

「リキ？」

後ろから突然倒れているはずのシャドウの声がする。
ワンリキーは気になり振りかえつてしまつ。

「ガ、ガメガ！」

その隙に「ひつそくスピン」でしめつけるから脱出する。

「メノー！」

再び捕まえようとする。

「「オオオオオオオ！」

『その時ふしきな事が起こつた』

シャドウは光に包まれた。

「リ、リキー？」

シャドウに近づいていたワンリキーはうろたえる。

「ついに来たということか……」

「な、何が来たんですか？」

「進化だよ……」

マサムネの言葉が終るとともにシャドウは巨大化していく。

「リ、リキイー？」

「ガ、ガメガアー？」

ワンリキーだけではない。トガミも驚く。

「ギャラアアアアアアアアアア！」

進化したシャドウの姿はギャラドスだった。

その姿は普通のギャラドスではなかつた……

赤色と言つには遠い。

黒い……黒い龍と言つべきだろ？

赤い模様が入つていてるのが凶悪さを強調させる。

「か、かつこよすぎます……」

「ああ、かつこよすぎる……」

どこの黒い？5の元刑事人のセリフを一人は言つていた。

後篇に続く

第一十壱・1 かつじよかわる…… よし「一」（後書き）

自分は90年代から見ています。

そろそろ更新を毎日するのはやめます。
少し更新が一時停止するかもしれません。
しないかもせんがご了承ください。

「」の人気のない実況の続きをしたいので。

第一十壱・2

かつじよかわる……

それともハーハ（前書き）

感想は募集中です。

第一十壱・2 かつこよすぎる……それとも一つ

「……おつと。かつこよすぎて見とれてしまつた……よし、シャドウ。お前の力を見せてやれ！」

「ギャヤヤヤオオオオ」

シャドウの口からはかえんほりしゃが放たれる。

「リキィイイイイ！」

体力が減っていたワソリキーはその火炎を受けたつていられず倒れる。

「メノオ！？」

「ゼ、ゼニガア！」

「メノオオオ！」

驚くメノクラゲにトガミはたいあたりをする。

「ギャラアアア！」

さらにシャドウの尻尾の部分で跳ね飛ばされトガミの方向に向けて飛んでいく。

「ガメエガア！」

トガミのアクアテールがメノクラゲにクリティカルヒット！つまりはきゅうしょにあたつた！

「メ、メノオ」

メノクラゲもその場に落ちて倒れる。

「あ、あ、ちょ、挑戦者の勝ち……です……」

審判役の船員は田の前で起きた出来事を理解できなかつた。

「勝てたか……しかし。かつじよすぎる
「ですねえ！」

そつ話しているとオーキド博士が近寄つてくる。

「なんとも珍しい色違いのギャラドス！ 素晴らしこのへ

オーキド博士は年甲斐にも泣く田をきらめりしてこむ。

「ですよね。自分も色違いは始めてみましたよ」

マサムネは田上の人への一人称は自分だ。

「ガメ……メニ…」

「あれ、トガミビラしたの……ってあれ！？」

トガミの体も光つている。
進化のするようである。

ピキューン

「カメー」

「なんか色が変わって田つきが悪くなつた感じですね」

「カ、カメル！？」

「もう少し頼りのある感じになると思つてたの！」

「ルウ！？」

トガミは膝をついて倒れた。

「しかし珍しい」のあ

「ですね」

さうしてシャドウに全員の興味が向きトガミにはだれも興味を示さない。

「カ、カメルウウウウ！」

そして誰も見ぬところでトガミは泣き叫ぶことしかできなかつた……
今回はシモンは出でていないので慰めることはなかつた……

「そういえばガイドがいないな
「もう帰っちゃつたんですねかね」
「まあ、今日に出航だしな」

ガイドはもうすでに出発したのだ。つい。
そう思いマサムネ達はオーキドに別れの言葉をいい
サントアンヌ号を後にした。

【その頃のガイント達】

「う、うひ。」「は？ 僕は……」

「ガ、ガイトイオ……」

「「ハハミハ…ツとなんだこれ……」

体が亀甲縛りで縛られていた。

「あ、あいつらだよ。あいつらが……」

「あいつが……」

ガイトイはある男の顔を思い出した。
一瞬だったが何かを感じた。

「それこの元の船もついで出航したみたいだよ……」
「なにつ！？」

ガイトイ、帰郷。

「ところうわけでシャドウとガミが進化した
「みんな仲良くな」

ポケモンセンターでシャドウを出すわけにはいかないので近くの広場である。

「ギヤラアー！」
「カメル」
「モグリュリュ～」

「ピ……

「リ」

何やら感想はそれそれのようだ。
しかしサコキは何にも興味を示していない。

「しかしシャドウは……博士が言つには……」

「おじこさんが言つには?」

「ガーリー」

「ええつー、そ、それは!」

それは一人には衝撃の事実であった

どうなる次回!

第一十壱 補足

もうこやかにこいつのもあつたね（前書き）

商品の存在を忘れていた。

第一十壱 補足

やつこやがりこいつのもあつたわ

【サントアンヌ号】

トガミが叫びながらひざを突いているとき

船員がマサムネ達に話しかけてきた。

「えーと。君達が勝利したからこのくじを引いてくれるかな

「ん、あ、ああ。そういう話だったつけ」

「すっかり忘れてましたね

シャドウの「」とでやんな」とをすっかり忘れていた。

「」の箱の中から引いてね

そう言って船員は箱を差し出す。

そしてその箱に開いている穴にマサムネは手を入れる。

「さて、何が出るやつ……」

ガサゴソ

「これが。結果は……2等!」

「おめでとう。」ひづみの品物のひでんマシンローだよ

「え? あ、どうも」

あまりうれしくはない。

「では、私も」

ガサゴソ

「これは……3等です！」

「凄いな君達は。」こちら商品のかみなりの「しだよ」「どりも」

使うかは微妙だ。

「と言うわけで、ダブルバトルイベント第一回目は白熱した戦いで終了！」一回目は一時間後に行われるのによりしく！」

船員がそう叫ぶと叫び声があがつた。
そうしてイベントは終わった。

本編に続く

裏第一十壇 ペッヘルたら 考えり（前書き）

感想募集中です。

裏第一回 壊ペンときたら 考えろ

【数日前・お月見山付近・ポケモンセンター】

「へえへえ……疲れたでござるよ」

「ああ、そうだね」

二人分の荷物を持ち歩き疲れるカナブと

何を打かで何を攻めか力で三とては猶も刀に力いふ道

「今日は」に泊つて明日にハナダで「さるな」

— そうだが、君が遠く歩けはたね。

ながら少しあはれて、さうしておれでモレモレとさる。

「ふ、労働基準を守つてほしいで」ぎわぬー！

泣き叫ぶカナブを置いてカナデは宿泊申し込みに向かう。

「おせ?
」

カナデはだれかを見つける。

「あの、人は……」

カナデの視線にいるのは……

「ギャラアアアアア！」

「モーグモーグ！」
「力、カメリ……」

シャドウが叫び、それを見て叫ぶシモン。
そして横で凹みながらシモンに話しかけるトガ!!。

「今日は寝るとして明日はいよいよクチバジムだ」「クチバジムはですね。間もなく引退するというキイガと言つ人がリーダーです」「キイガ……噂ではリーダーはマチスという元軍人だと……」「ええ、今月を持つて引退して交代らしいです」

そう言つてクチバシティパンフレットを読むミズホ。

「かなりの、」老体なんだろうな」「ええ、64歳で定年まで頑張つていたらしいですよ」「らしきじやなくて今もな。65まで頑張るつてか」

そう言つてパンフレットに書かれている写真を見る。昔の若じころの写真と今の写真が貼つてある。

「ん?」「どうしました?」「いや……」

(ビ)かで見たことあるような顔だな……ま、気のせいだろ(フ)

そう言つてマサムネは疑問をなかつたこととした。
別段氣にすることもなかつた。

「朝か……」

マサムネはペットから起き上がろうとする……しかし、お酔染のがんじがいめで起き上がることができるない。

「……もつらし寝るかな……」

何年後かにはあつと自制心を抑えられなくなる。マサムネはそり思つた。

続く

裏第一十壇 ペンときたら 考えろ（後書き）

オリジナルジムリーダー……
いつたい何者なんだろつか……

ところが次回をお楽しみにです。

ひなまつ…… 番外編じゃなこよー そして本編でもなこ（前書き）

アンケートでした。

今回作者さん書いて突然変な気分になりました。
というわけで暴走開始。

ひなまつり…… 番外編じゃないよー そして本編でもない

ひな祭りです。
ひな祭りですが

自分にはひまなつり。

つまりは暇がないってことですね。

いや、笑えませんね。

そうですね。はい。

この頃は感想を多くの人にもらえてるのに
感想が少なくてやる気でないですとかいう
わがままな人が増えてきたものです。

ゆとり教育の弊害です！

かくいう私もゆとり教育世代だよ！

そのせいでゆとりゆとり言われんだよ！
自分は頑張つて生きているんだあー！

と、そんなことを言いたいがために話を書いたわけではない。

アンケートですよ。
アンケート。

一つ目

この先何ですがね。
パワプロクンポケット基準の全年齢対象で話書き続けていいですか?
いやね、自分的にはこのまま行きたいんですけど

どうかな、と思つて。

まあ、参考にするだけですが。

一 三つ目

シャドウ君のよつなキャラを壇やしていつていいか。つまりは普通じゃなこ子を出しまくつでいいのかと。

二 三つ目

自分はポケモンの小説だけ連載してるわけではないんですね。
長期で連載休止しているものが多いんですね。
こっち止めそっちに行ったりしてもよろしいですか?
一月ほど離れるところになるでしょう。

四 三つ目

コラボって楽しいの?
てか、コラボとかつてどうやってやつてるの?
すると世界観を共通させなくちゃいけなくてむずくならない?
コラボ回は別世界なわけ?
それでいいならしたいなあ。
でも壊すよ、コラボ相手のキャラとか気にしないで設定だけで話作
るよ。
まあ、以前自分のキャラと性格が違いますとか言われた経験ある
けど……
あ、逆に使つてもいいとか言つるものもあるのですかね?

ドロドロしてない?

いや、するけど

他に何がこの要素が必要ですかね?

とこちわけで答えをお待ちしております。

ひなまつり…… 番外編じゃないよー そして本編でもない（後書き）

期間限定アンケート。

解答者が一人なら
たぶん意味ない……

ああ、わがまま言ってる人たちみたいになりたい……

第一一 壊・1 短くてもいい！ 説明しやー（前書き）

感想募集

そして今回は題名の「」とく

第一一 壊・1 短くてもいい！ 説明しろ！

【クチバシティジム前】

「さてさて、歴年のベテランに俺たちは勝てるかな」

「ふふ、私たちが負けるとでも？」

マサムネの言葉に笑いながら答えるミズホ。

「まあ、そう答えるとは思つていたけど。それで行こうか」

そう言って一人はジムの中へと行く。

「おやおや、挑戦者さんかの」

「あんたがジムリーダーのキイガさんか」

目の前にいる老人がジムリーダーのキイガ。
歴年の風貌を見せる。

「ああ、で、ここでの対戦方法は？」

「そうじゃの……引退までにダブルバトルというのをしたいと思つておつた……それに」

「それに？」

「今年はポケモンリーグ大会はダブルバトルを導入するよつじゅしな」

「なんだつて！」

知らなかつたとは言えまさかダブルバトルも導入されていたとは。

「シングルかダブル。どちらかしか参加できぬようじやしの」

「ど、どちらかにだけ！？」

「ダブルバトルに参加するにきまつてます！」

ミズホの叫び声が響く。

「さあ、私とマサムネさんとダブルバトルです！」

そう言ひてミズホはボールを構える。

「まだ話は終わってはおらぬが……まあよいかな

「よっしゃ！ ポケモンバトルだぜ！」

後半に続く

第一一 壊・1 短くてもいい！ 説明しろー（後書き）

感想募集なりです。
アンケートの答えも待っています。

第一一壞・2 なごみをかかせぬやー(前略)

感想隨時募集中。

【クチバシティージム】

「では行くかの。いでよマルマインー！」

「マルマーー！」

「マルマルー！」

マルマインー一体が登場した。

「ふおふおふお。スピード戦法についてこれるかの」

「勝てる勝てないじゃない。戦うだけだ！ 行け！ シモンー！」

ポシュウイン

「モグウー！」

「よし、お前に出来ないことをさせなさいと見せてやれ！」

「モグリコー！」

マサムネとシモンが燃え上がっていた。

「じゃあ、カ///ゴ。よしへんな

「ピカチュウ！」

ミズホとカ///ゴはこいつもびりつだつた。

「ジジジ

「ジジジ」

高速で動き続けるマルマイン。

その高速の動きにシモンは付いてこられることができない。

「ふふふ、属性がすべてと思わぬことだな」

不敵に笑うキイガ。

「モ、モグゥ～」

「チユウ……」

カミコは何かを考えているようだ。

「シモンで楽勝かと思っていたがな……しかしシモンに電気技は聞かない。長期戦になるだろ？」

「それはどうじやうな。マルマインー。」

「ジジジ」

「ジジジ」

「ピュンー

「モグリュア！？」

「ピカチュー！」

シモンはソニックブームを食らひ。

カミコはシモンを踏み台にしてよける。

「なんでシモンを踏み台にしたあー！？」

「カミコは晩御飯抜きね」

驚きとまじりマサムネと冷静に罰を決めるスホ。

「ピカア チュ！」

シモンを踏み台にして飛び上がったカミコはかけぶんしんをする。

「マ、マル！」

「マ、ママル」

一瞬それに片方のマルマインが驚いたが
もつ一方のマルマインがなだめ、再び元の動きに戻る。

「チユ！」

「チユ！」

「チユ！」

「チユ！」

かけぶんしんしたカミコは回るマルマインに向けてそれぞれ落ちていぐ。

「マル！」

「マ、マル……マルア！」

「な、なにんじゅー！ かけぶんしんにぶつかってまひ状態になるな
どー！」

本物のカミコは頭を押さえているシモンの横に着地しているのだ。
ならばあのマルマインたちをまひ状態にしたカミコは何なのか。

「し、質量をもった残像とでも言つのかー！」

「残像。そつ、かけぶんしんはそついうものだー。
だが、カミコのかけぶんしんは違う！

それぞれの分身にでんじはの電気が込められていたのだ！
それによりかけぶんしんにぶつかったマルマインはマヒ状態となつ
てしまつたのだ！

「でんじはとかけぶんしんの喰わせ技とはな。仕方ないから許して
やうつ」「ひろや

「でも別に晩御飯は豪華にしないからね」

トレーナー一人は冷静を取り戻した。
そもそもズボは冷静だ。

「モ、モグリュー！」

「ペペペ

「モ、モモモモー！ モグリュー！」

「モオオオオグリュー！」

踏み台にしたことを怒っていたがカミコに現状を説明され落ち着く。

シモンはマルマインめがけて攻撃をする。
マルマインはマヒして高速に動けない。

シモンはつめどきをしながらマルマインに向かいつりとく攻撃！

「マルマアアアー！」
「マ、マルー！」
「モグリュアー！」
「マルウウウー！」

動けないマルマインたちは速攻でシモンにより始末された……

「まさかこうなるとは思わなんだよ」

「俺もいろいろ予想外だつたけど……」

「まあ、とりあえずこのバッジを受け取るがよい」

そしてマサムネ達はバッジを受け取る。

「最後の試合。楽しかったぞ」

「ジムリーダーとしてだろ。あなたのトレーナー人生は終わってな

いよ」

「そうですよ」

「ほっ。うれしいことを言つてくれるの」

キイガは少し笑う。

「じゃあな、キイガさん。またいつか戦おう

「またです」

そう言つて二人はジムを去つた。

「もう一度か。まだまだ頑張れるかの……」

「おや？ 誰か来たのかの？ もう今日は挑戦を受けて」

ザガシユ ビヂョア

「な……」

「勝ちましたね。次はどこに行くんですか」

「次はどうあえずシオンタウンだ」

「シオンタウン？」

「ああ、タマムシシティに行くための通過点としてなー。」

そう言つて一人はポケモンセンターへと帰つて行つた。
その時何かがあったことを知らずに……

続く

第一一一壊・2 なごみ&おとぎ話動画ー(後編)

アンケートの答えも待つてあります

後よければ聞いてください。

http://www.nicovideo.jp/watch/
sm13785049

音量にご注意ください。

裏第一回　かかる「」とはないかかる「」と

【ポケモンセンター】

「と言うわけで。シオンタウンにはこの橋を通りて上に行くんだ」「でもここにカビゴンが寝ていて通れないとあります」

「ふふふ、心配は要らないぞ。これを見よ！」

マサムネが取り出したのは折りたたみ式の簡易ボートである。

「寝ている横からボートで行けばいい。深いから泳いではいけないがこれならいける」「さっすがマサムネさんです！」

いつもの如くきやつきやと喜ぶ//ズホ。

「力、カメリル？」
「モグリュ」
「力、カメ！」?
「モグリュ」
「力、カメルー！」

「匹はいつもと変わらなかつた。

その後二人はシオンタウンに向かつた後
クチバシティでは事件が起こっていた。

『クチバシティジムリーダー キイガ 行方不明！』

『まもなく定年退職寸前と言うところでの事件！』

『ジムには血痕が発見された模様』

そう。二人はこの事件にはかかわらないだろう。
だが、着々と何かが進んでいる……

続く

第一二一壊　はい、温もつた！　ついでに俺も温もつた！（前書き）

感想募集中です。

第一二二壊　はい、温もつた！　ついでに俺も温もつた！

「いやあ、船はいいなあ」

「簡易のボートですけどねえ」

横に橋をふさいでいるカビゴンを見ながらのんびりとボートに乗っている一人。

「ボーッとしているってのはいいですね」

「うまいこというね～」

寒いシャレすら笑いに変えてのんびりとしている一人。
そんな一人はボートをこいでではない。

「カメカメカメカメ！」

ボートの動力はトガミだ。

「のんびりだ～」

「のんびりです」

「力、カメールウウウ～！」

「さて、ついたついた」

「ご苦労様トガミ」

「力、カメ……」

トガミは睨んだ表情で二人を見ている。

「シャドウが使えばよかつたんだが、無理だしな」「仕方ないですよね。おじいさんの言ひつけないう

そつ。そもそもギヤラディスであるシャドウがいればボートなど入らないだろう。ならばなぜ？ その疑問は読者諸君の心に残るだらう。

「そうだ、トガ!!。このアメをやるよ」

「カメ？ カメ」

そつ言ひてマサムネから受け取ったアメを食べるトガ!!。

「力、カメ力！」

体に力がみなぎる。

レベルがアップしたようだ！

「ふしきなアメだつたんだがな。親父からの贈り物の一つだが」「マサムネさんのお父さんはいろいろな物を持つてらつしゃるんですね」

「確かにいろいろだな」

そつ言ひて胸中にしまつている父親からの贈り物を見るマサムネ。

(開発……か……そつこいやミズホちゃんの親つて……)

そつ言ひれば母親のマークと知り合いでいるが一度も顔を見たことがないし話したこともない。

昔遊びに来ていたときもオーキド博士の助手と来ていたはずだ。

「セツニルゼ、ミズホちゃんの父がさつて……」

「……」

「あ、こーや」

突然場の空気が悪くなってしまった。

（確かに、マサラから旅立つときにもいつこう感じにならなかったことが……確かに母親からの贈り物などがあつたときにはいつなつてこたはずだ。）

確かに棒読みのような感じで流すよつて母親へのお礼を伝えるようにオーキド博士言つていたはずだ）

親と何があつたんだと、マサムネは思つた。

「お父さんとお母さんは多分今はホウエンです」

「え、ホウエン？」

「お父さんはおじいさんの子供です。ホウエンのオダマキ博士の助手になりました」

「ミズホちゃんをおいて？」

「昔からですよ、そんな事

そう言つてミズホは何も言わなくななりシオンタウンのまへ歩いていつた。いつも「ひざはねだい」ともない。

（なんとなく聞いただけなのに……やつてしまつたな）

そつまつてマサムネはミズホに向かい走る。

國語

いぢ、温もりの少ないミスホちゃんを温めようとしたね。」「

マサムネはそう言つてミズホを強く抱きしめる。

「アーティストの心」

ほつはほ。じせ、行こうか

新編 一ノ山文庫

「あっ、あっ！　ずむこんですよ～！」ハチからすぬとせは向も

そう言ってミズホもマサムネを追いかける。
一人の旅はまだまだ続く！！

続くつたら続く！

第一回 壊 はい、温もつた！ ついでて筆も温もつた！（後書き）

ノリノリで書いていた。

じつは樂しく書かる。

第一二三壱・1 謎発見！（前書き）

感想は隨時募集中

第一二三壊・1 謎発見！

【シオンタウン】

「なんか暗いな……」

「ポケモンタワーがあるからじゃないですかね」

大きく聳え立つ塔。

ポケモンのお墓ポケモンタワーである。

「でかいなあ」

「ですよね」

顔をあげて見上げる一人。

「ほつほほ。ポケモンの供養にはまだものたりん位じや」とびぜんの声。

後ろを振り向くと一人の老人がいた。

「わしの名前はフジ。このポケモンハウスの理事じや」

後ろにある建物。

どうやらポケモンの孤児院のよつな物らしい。

「あれ？ あなたはおじいさんの知り合いの」

「おや？ ユキナリのお孫さんかの。大きくなつたの～」

ユキナリとはオーキド博士の名前だ。

ポケモンでフルネームがわかる人は珍しい。

「して、隣の男の子は誰じやの？」

「恋人です」

「まあ、そうです。はい」

「ほお。この頃の子供というのはのぉ~」

「この頃と云うのはどう云う事か。
まあそう言つ事なのだらう。」

「ガラガラ~」

「カラあ~」

近くで元氣よくガラガラとカラカラが遊んでいる。

「おお、あの二匹は親子での。父親は病氣で死んでしまつての。あ
のからからのかぶつとる骨は父親のものじや」

「ああ、カラカラは親の骨を被るといいますからね」

「成長してどうやつたらガラガラみたいになるかは分からないです
けど」

「まあ、それは学界でも謎のままじや」

「フジさんは博士だつたんですか?」

「む? い、いや、ユキナリから聞いたのじやよ」

少したじろぎながらしゃべるフジ。

否定の言葉を発するが肯定しているよつなものだ。

「でど。シオンタウンは特に何もする」とがないしなあ
「ならポケモンタワーの最上階にでも行かんか?」

フジが一人に話しかけてきた。

「最上階ですか？」

「ああ、不思議な石碑があつての」

「不思議な……」

マサムネは少しづわづわする。

「どうもだれにも動かすことができなくての。下に何かがありそうなのじやが」

「下の階から何もできないんですね」

「うむ。なんとも不思議での」

（不思議つてものじやないな。神秘だ……）

マサムネはその石碑にかなりの興味を感じた。

「行きましょう。最上階に！」

「おお、マサムネさんノリノリです！」

「や二まで興味が出るとはの。では今日は遅いから明日に行くとし

「ひが

そつ言つてフジは今日まつりに泊まるよつと書つた。
そして一人はそれに甘える」となり、宿を部屋に泊まらせてもらつた。

中編に続く

第一二三壊・2 謎一 いや、朝一さんでそれは謎一（前書き）

感想は隨時募集。

ランディング始めました。

第一二三壞・2 謎一 いや、朝はまだそれは謎一

【そして次の日】

「朝ですよ。朝ですよー。」

「わ、わかったから。揺りもないで……」

さすがに今回はフジがのぞきに来る可能性もあるので一緒にねで
いない。

同じ部屋だがペットは別だ。

「では、おはよのキスを」

「突然何を」

「私のマサムネさん成分が一緒に寝なかつたことで不足しているん
ですよー。」

ミズホはその場にぴょんぴょんとぶ。

ぶんぶん揺れてるがマサムネはなれてしまつた。
なれところのは恐ろしいものである。

「とつあえず着替えてくる」

「一緒に着替えましょうー。」

「成分不足してるから。いつもはしないの」「……

「ですからつ……ふえつー。」

マサムネはミズホをぎゅっと抱きしめる。

「成分補給。できたよな」

「へ、へうー」

ミズホは顔を赤くしてぐるぐる回つてゐる。

「んじゃ、着替えに行きますか

なれどこののはいつものだ。

「おはよう」「わこまく。フジさん」

「おお、おはよ。……おや? ミズホちやんはびひしたのじゅ

「ああ、もう少ししたら来ますよ」

「何かあつたかの? 何かあつたのかの?」

この老人。

昨日のいいからもわかるが
年を考えてほしいものである。

「別に何もないですよ。とりあえず」「飯にしまじょい

「もうかの。ならそりに用意があるので」

和食。

この世界で和食と言つのが正しこのかどうかわからないうが
和食が置いてある。

「おお、味噌汁に焼きジャケに納豆、海苔と……あれ、これパンじ
やないですか?」

「いいじゃろ、別にパンでも」

「いや、ふつうは」「飯でしょ」

「別にパンでも食えることは食える」

少しにらみ合つ一人。

「お、おはよ!」「やあ!」

「ミズホちゃん。起きたのか」

「はい」

そしてミズホはテーブルに着く。

「おこしあうですね。 いただきまし

パクパクと置かれていた食事を食べる。

「……まあ、いいか

「うむ。いいのじや

そう言つてマサムネも席に着き置かれた食事を食べる。

「さて、そろそろ行くかの

「は」

「レッジ」
「です」

そうして一行はポケモンタワーへと向かう。

後半に続く

第一二三壊・2 謎一 いや、朝」はんでそれは謎一（後書き）

元ネタを知る人は少なかろうで。

そもそも元ネタとはほど遠い内容だが。

といふで畠さんは「ミックボンボン購読されてましたか？
休刊するまで私は購読してました。

第一二三壊・3 暴走理由は和食にパン！（前書き）

感想は隨時募集です。

【ポケモンタワー】

「なんか予想よりも明るいですね」

「一応人が来る墓じやからのう。少しは明るくないとの

予想より明るいといつても少し薄暗い。

何かが出てきても不思議はない。

「ふふふ。なんだかお化けでも出できそうですね～」

「そうだね。怖い？」

「別にです。怖がらなくてもいつも抱きついてますから。怖がる必要ないです」

「……そうかい」

二人はいつも道理である。

そしてフジの後をついて歩く。

「人気がなくなってきたよ……」

「頂上に行くものは少ないからのオ」

上に行くたびに人がいなくなっている。

「う~ん。薄気味悪い感じですね」

「ゴスゴス」

「どうからか何か聞こえた。

「ん? 何か言いましたか?」

「いや、俺は何も」

「なら……」

「いや、わしでもない」

「ならこいつたい……」

ミズホがぐるっと振り向くと……

「『ゴースト!』

「うわあおつ!」

突然「ゴーストが現れた。

「つまつぱ……いきなり出でてくるから驚いて朝ごはんのパンとおかずが変に混ざつた味が口に広がったじゃないですか!…
「我慢してたんだ……」

朝ごはんを何も言わず食つていたがどうやら無理してこたよつだ。

「許すまじ、ゴースト!」

「ハ、ミズホちゃん?」

ミズホは暴走している。

「つまおおお! 出でこなトガミに、カハゴー!」

ボシウウン

「殺つてしまえ！」

「力、力メ！？」

「ピ、ピが？」

ミズホの突然の言葉に戸惑う一匹。

そしてそれを驚かしながら見ていたサムネ

「ゴース？」

ええい！ 私たちを見て笑っている！ しゃから速く殺せ！」

卷之三

マサムネは疑問が生まれた

ええい！トガミはみすのはやい！カミミは10まんホルト！」

一匹の技が融合し爆発的な力になりコーストに直撃する。

「ゴオオオオス！」

「まだ殺されてないですか！」

ミズ赤はかなり怒つている。

「ミズホちゃんが壊れた原因は朝一はんのせいですよ。フジさん、わ、わしのせいぢやなかうつー。ゴーストのせいぢやー。」

そして横では再び起る朝一はん論争。

「つかつかおーー むかつべでえええすー！」

ミズホさんの場にあるものを「コースト」に投げつけた。

「コーストーー。」

ポーション

「ほへへ。」

ミズホが投げたのはモンスター「ボールだ。怒っていたときに腰から一つ落ちたのだ。

「ほ、捕獲に成功しちゃたーー？」

「ありやまあつてやつだ……」

「ほんとこのつ……」

【最上階】

「くううう。しき使つてやるですーー。」

「こや、コーストはあまり悪くは……」

「むっ。考えてみれば頭に血が上つてかもしません……」

落ち着きを見せ始めるミズホ。

「せうせう。ちゃんと仲間として扱つてあげるべさだ」

「はー。やりますです」

「仲良き所すまんがの。ついたゞ

フジが話しかけてきた。

「どうやらフジの近くにあるのが例の石板のよつだ。
確かに動かせるよつになつていてるよつに見える。」

「これは動かせるか確かめたんですね?」
「前にも言つたが何をしても動かぬのじや」
「そうですか」

そう言って石板にそつと触れるマサムネ。

「ん?」
「どうしたですか?」
「いや……ん?」

石碑には文字が書かれている。
見たことのない文字だ。
事実読めない。
しかし見たことがある。

「この文字……ん? 石板に穴が」
「ああ、何かをはめるよつに見えるがの。はめるものが見つからん
のじや」

「……はめるものか。これとかだつたりして」

マサムネがとりだすのは父親から送られてきたドリル型の首飾り。

「あれ? ちよつよさげじゃないですか?」
「やう? なうまでみちやおつかなあ~」

そう言つて軽に気持ちではめるマサムネ。

力チツ

「あれ、はまつた

「でも何も起きませんね」

一
せりはり偶然はまつただけか上

そう言って穴から取り出そうとする。

「んっ？！抜けない！」
「ふえ？ て、手伝いますよ！！」

二人で一所懸命に取ろうとする。

グルツ

ドリルの部分が回転した。

「え、な、何？」

「うわああああああああああああああ！」

二人が光に包まれた。

そして光は收まるとそこに一人はいなかつた。

そしてそこには腰を抜かして驚くフジしか残つていなかつた。

続く

第一二三壞・3 暴走理由は和食にパン！（後書き）

わくわくします？

100円でテイルズオブディスティー買ったので
わくわくしますよ私は。
遣つたことないのシンフォニアも売つてたので490円で買いましたよ。

サモンナイト2とトゥルーラブストーリー2と
新スーパー口ボット大戦を買つて
全部込めて940円でした。
後電撃プレイステーションも買つて
1500円ぐらいしましたが。

これ後書きじやなくて近況報告じやね？

キャラクター紹介（第一部版 中盤）（前書き）

第一部（中盤時）でのキャラ紹介です

キャラクター紹介（第一部版 中盤）

流される男

マサムネ（15） CV：緑川光（仮） 出身：イッシュ

ご存じ主人公。

「ビにてミズホに告白されてから主導権を奪われている節がある。年上に対しても一部を除いて敬語で話す。

和食が好きでありパンが好きではない。

やる時はやる男であり、ギャルグーで鍛えた力でミズホの好感度を上げる。

戦いのときには感情を抑えることができなくなる。

そのためちょっととしたことで切れる。

相棒

シモン（モグリュー） CV：柿原徹也

マサムネの相棒と言つぱりアガミの相方と言ふよになつてきている。

一応はミズホのメンバーとも合わせ一番強い。

サユキ（チュリネ） CV：丹下 桜

マサムネ以外に気を許そうとしている。

しかしシモンには少し気を許しているようである

シャドウ（ギャラドス） CV：遊佐浩一（友人の直感で）

黒い体に赤い模様の、ギャラドス。

通常より凶悪性を増しているように見える。

オーキド博士によると珍しい突然変異体らしい。

自称健気な女の子

ミズホ（11） CV：桑島 法子 出身：カントー

身長144cm B85(H) W48 H80

マサムネに告白したのち妄想癖がさらに悪化した。
マサムネ絶対主義者となりマサムネのことを疑わない。
さらに何があつてもマサムネがすることは悪くないと思つている。
なお、怒るとマサムネ以上に手をつけられない。

相棒

トガミ（カメール） CV：阿部 敦

登場回数が多いが扱いがあまりにもよくない。
特にこれ以上書くこともない。

カミコ（ピカチュウ） CV：佐藤 利奈

かげぶんしんにでんじはの電気を込められるなど
普通のピカチュウではできないことができるらしい。
トガミは緊急時でもなれば顔を合わせるたびに電気を浴びせているようだ。

リュボ（ゴースト） CV：玄田哲章

ミズホの暴走により捕まえられた。

彼はただ驚かせてその反応を見たいだけであった。
バトル時以外は勝手に行動する。

かませ犬じゃない！

アサノブ（13） CV：ヤスヒロ 出身：不明

扱いがあまりにも使い捨てであつたが、
別に弱いわけでもない。

第一回 壱・1 本当なのか（前書き）

感想は募集してゐんですよ?
しますからね!

第一四壞・1 本当なのか

「う、うう……何だつたんだあの光は……」

「目が覚めたかい？」

「え？ だ、誰……」

突然誰かに話しかけられたマサムネ。

それはミズホでもフジでもない。

そして声の方向がした方を向いた。

「お袋？」

「お袋？ 私は娘はいるけど息子はないわよ」

その女性はマサムネの母親であるマークに似ていた。

「あ、人違ひのようですね……って、ここのは？」

「一緒にいた女の子なら横のペットよ」

隣のベッドでミズホがすやすやと眠っている。

「ふむ……で、俺たちはいったい……」

「倒れていたのよ。家の近くでね」

「気絶していた？ といつかここはシオンタウンで」

「確かにシオンタウンよ。記憶は確かのようね」

「それで俺たちはフジさんとポケモンタワーに……」

「フジさん？ それにポケモンタワーは現在立ち入り禁止よ」

「え？ そんな……俺は確かにポケモンハウスからフジさんと……」

「フジさんなんてシオンにはいないし、ポケモンハウスなんかないわよ」

「ない？」

マサムネは少し顔をしかめる。

「そう。ないの」

「まさか」「は……」

マサムネはこうこう状況になる状況を知つてゐる。
現実では起こりえないと思つていて出来事だ。

(過去……だとこうことか!)

その手のゲームはやりつくした感があるのでわかる。
しかしリアルだ。

ゲームじゃないリアル……

(リアル？ 現実？ 假想？ そうなると俺は……)

「う、うん……」

「ミズホちゃん！ 目が覚めたか
「はにゃ。マサムネひゃん……」

ミズホは寝ぼけている。

(ま、現状はミズホちゃんととの間だけの秘密にしておくべきだな…

…)

「二人で話がしたいので一入きりにしてもらえませんか？」
「ん？ いいわよ」

そう言つて女性は部屋を出て行つた。

後半に続く

第一回 壱・1 本当なのか（後書き）

本当なんて誰も知らない。

第一回 壱・2 本物の（前編）

感想は……募集はしてゐるよ？

第一回 壊・2 本当つて

「過去ですか？」

「そう過去」

「なるほど、過去ですか」

「予想道理にすんなり受け入れてる感じだね」

「はい。マサムネさんのいうことですから」

「そうこうと思つていた」

もはや一人に疑いというものはない。

「しかしじうすれば元の時間に戻れるんでしょう」

「そりやポケモンタワーの頂上の石碑に行けばいいんだ」

「ですね」

そうとわかれればさっそくと出発の準備を始めるミズホ。

「あ、そう言やあポケモンタワーは現在立ち入り禁止なんだっけか」

「ふえ？ それじゃあ戻れないのでは…？」

「そうだな……ふむ……」

「ンン」

「もういいかしら」

ドアの外から声が聞こえる。

「あ、はー」

ガチャ

「どう。今の状況については整理できたかしら」

「ええまあ」

「まあ～」

「ま？」

女性の声とほかに何かの声がする。

「ああ、私の娘よ。ヨーロッテの」

「ヨーロッテ？」

マサムネの母親と同じ名前だ。

「ええ、かわいいでしょ」

「ええ……そう言えばヨーロッテさんは何をしているんです？」

マサムネはここまで来て偶然じゃないと思つた。
気になつたのだ。

「え？ なんだらうね。初めて会つた子にさういふことはないかもし
れないけど、私はヨーロッテはいないの」

「え？」

「いないとさういふことはシングルマザーなのですね」

「いない。」

そう言えば母は父親を知らないと言つていた。

母の母、祖母も病氣で死んでいて会つたことがない。
イッシュには母親が死んでから引っ越したといつ。

(偶然で収まるのか?)

「この子の父親はね、イッショ地方に住んでるんだ」

「イッジ」

「それって、新の都合で和方にこだわる事で、おまかせした。」

「ふつ。彼とも引っ越ししてから連絡がつかなくなつたし、彼もこの

子の事は知らないわ」

普通人に言つことではないだらつことをマサムネに言つ女性。

「アーニー、彼はあんなに以てていいのか？」

「俺が似ている？」

「アヒム瓜」

マサムネの背筋が凍る。

マサムネの父親とマサムネは瓜二つ。

それは昔からよく言われていたことだ。

「あなたの……名前は？」

卷之三

「入口の整備が終わつてからかな。少しほ前に崩れてね」

「それまへいひじるへ。」

四田後位かな……そろそろは明日はタマシに元バートができる

「パレードですか。楽しそうですね」

「ああ、そうだな……行ってみようか」

「です」

マサムネ達は用意をしてタマムシに向かった。
女性にはお礼の言葉を述べ、シオンタウンを後にした。
今回の出来事がいや、出会いが何を意味したのか。

そんなもの誰がわかるかー
わかつてはたまるか！

答えなんて誰も知らない。

続く

ふ
ふ
ふ
…

番外編 そう言えばあの一人ってあの後どうなったん? (前書き)

感想は募集中だ

番外編 そう言えばあの一人つてあの後どうなったん?

「あのさあ……なんでジョウトに行くわけ?」

「ふふふ。知らない新天地! 知らないポケモン! それを求めるため!」

「ああ、そういうわけか……」

彼らはゴズエとトシカズ。

ハナダジムとニビジムの門下生である。

今は真の強さを求めるために旅に出ている。
いや、出ようとしている。

「サンタアンヌ号出発後にジョウト行きの定期船が出るらしいわ」「なんか軽い感じでカントーと当分お別れか。せつなくなるなー」「修行と言つのはそういうものなの。まあこのチケットを持つておきなさい!」

そう言つてゴズエはトシカズにチケットを渡す。

「定期船用乗車チケット……これ安売りじゃないか」

「いいじゃないの。行き分だけよ」

「帰りはどうすんだよ……」

「いいのよ別に! 向こうでチャンピョンにでもなりや!」

「修行に行くだけだろ……」

ゴズエのやる気にトシカズは答えられない。

タケシという存在がいたからこそそのあのキャラだが
ゴズエの前ではこんな少年なのである。

「あら、どうやら定期船がきたみたいね。行くわよー。」

「へいへい」

そう言って二人は船に乗り込む。

二人の旅は始まる……

行先はホウエンである定期船に乗つて。

本編に続く

番外編 そう言えればあの一人つてあの後どうなったん? (後書き)

なんかやつてほしい番外編があれば。

ただしガイトとゴウミの番外編は駄目です!」
「承ください。

第一五壱 三、ミズホちゃん？（前書き）

感想は募集中だぞ

第一五壊 ミ、ミズホちゃん？

【タマムシシティへの地下通路】

「パレード パレード」

「ははっ。嬉しそうだね」

「まあ、過去つていうわけですから現代のようなものは求めませんけどね」

ミズホはまくらべると回りながら出口へと向かつ。

「ははっ。ミズホちゃんは元気だなあ～」

いつも道理のミズホを見てマサムネはほほ笑む。

「早く行きましょう～」

そつまつてミズホに手をひかれる。

「うわい。ひつぱくななくても行くつじが～～」

いつも道理である。

「ははっ。ミズホちゃんは元気だなあ～」

いつも道理……

【タマムシシテイ】

「へえ。古い街並みだなあ」

「現代に比べればですけどね。今からすれば最新です」

はつきり言って現代のマサラよりは近代的である。

「そう言えばお金と力大丈夫なんですかね」

「安心しin。この時代も今と変わりないようだから」

そもそも五年単位で変わつていない。

「あつ。あつちで何かイベントやつてますよ」

「つまつと……」

マサムネは引きずりれてイベントが行われ方へ行つた。

「つて、ここはタマムシジム?」

「ほえ~タマムシジムでイベントですか~」

「その通り! 草タイプ専門ジム。タマムシジム」

突然男の声が響く。

「ここの俺がジムのジムリーダートラスケだ。よろしく頼むぜ
『そして同じくその娘のウリカです』

突如現れたのはジムリーダー親子であった。

「くくく。ここの俺と勝負して勝てれば豪華景品とパッチをプレゼントだぜ」

「お父様。もう少しへジムリーダーとしてちゃんとした言葉づかいを……」

「うつせえ！ 女ばかりの家系で唯一の男の俺が何したっていいだろ？」「うが！」

「屁理屈です！」

「じゃかしいわ！ お前らがくどくど言つから俺以外男がいねええんだろ？子のジムはあ！」

「だからと書いてお母様が違う娘が何人もいるところのはどうかと思いますが」「あ、人前でそんなことを……でもイリもそれについては認めていてだなあ……」

「そもそも妻公認の浮氣と言つのがおかしいのです！」

マサムネ達の前では大変なケンカが起こつていて。

あらわれて一人に説明をしようとしていただけなのに……

「あの、イベント……」「

「おおう！ なんか恥ずかしいことを……あ、今の内密にな」

「な、内密にですよ……」

ジムリーダー親は恥ずかしそうだ。

「公認浮氣とか言ってたような気がするですが……」

「内密にいい！ これあげるから！」「

「これ、ジムパツチですよ」

「いいからもつてけ！」「

「そして内密に！」「

そう言ってジムリーダー親子はジムに走つて帰つた。

「え？」「

「なんですか？」

「もうひとつ現代じゃ使えないんだよなあ……」

「ならジムに行きましょっ

「え？」

「何言つてるんです。こっちが上なんですから……ふふつ

「おおひ……」

ミズホの笑顔にマサムネは恐怖を覚えた……

続く

第一六壱 - 1 ミズホちゃん……（前書き）

感想は募集していますのです。
感想くれるいい人を後四人くらい募集中～
別に規定人数超えてもいいのですよ～

第一六壇・1 ミズホちゃん……

【タマムシジム】

「たのもすよお～」「いらっしゃ……ひいい！」

ミズホの笑い顔を見てウリカは怖くなり逃げた。

「ハ、ミズホちゃん？」
「なんでエスかあ～」
「いや、なんかいつもと違う感じが……」
「いつもどおりですよお～」

マサムネも少したじろぐ。

「ふふふ。さあて、ジムリーダーさんはあちらかなあ～」
「ハ、ミズホちゃん。お帰りくださいー！」

マサムネも壊れた。

「ウリカが走つて逃げてきましたが……誰ですかあなたは」「そういうあなたは何ですかア～」「私はそう。友人のエリノです」「なるほど、異母姉妹ですか」「のぉ。な、何を言つてるんですかお姉さん……」「ふふふ。やはり一桁の女の子は隠し事が苦手ですねえ～」

「うやうやしいミズホはマサムネや田上の人以外に対してはうのよつだ。」

「あなたのお父さんが多数の女と子供を作つてるとこうネタは上がつてゐんですよ。ふふふ。それでお父さんこいつがあるのです」「つ、つ……それで何が望みなんですか……わ、私たちの幸せを壊さないでください~」

エリノは泣き叫んでくる。

「ふふ。かわいい子ですねえ~」

「……とつあえずジムリーダーの所行こいつか。なんか話が大変な方向に進んでるような……」

「それもそうですね 早く行きましょうつか~」

マサムネが話しかけるといつもの様子に戻る。
そして、ジムの奥の部屋へと向かう……

「うわあああああああん!」

マサムネは後ろから聞こえる鳴き声がすじくくなっている。
これは完璧に自分たちは悪者だと。
とこりか齎すとこりとは悪だとこりのはあたりまえである。

「わあて、イベントまつぱり出してジムの奥にいるジムリーダーさん。出てきてださいですよ~」

ジムリーダーの部屋と書かれた扉をノックしながらしゃべるミズホ。

「なあ、ミズホちゃん。所でさ、何をするつもりなの? お金とか

困つてないよね……」「

「え、そつまえぜそうですね……ビーフしまじょうか?」

「え?」

「いや、なにかその、齧れないといけないかなあと迷つちまし
て……」

「//ズホちゃんー!」

マサムネはただ泣きやうな顔で叫ぶしかなかつた……

後半へ続く

第一六壱 - 2 なんかいいわ！（前書き）

感想は大人数の人募集中！

第一六壊・2 なんかいいわ！

「ヒザウわけでですねえー」のパッチはお返しあります

ヤツリズホが言つた

「ヤ、そんな。どうしても世間に公表する気なんですね……」

「いや～そうではなくですねえー」

「びええええええええー！」

ウリカは絶望した顔で。

エリノは泣き続けていた。

全く話を聞いていない

「まつたぐ。話を聞かない子たちですね……」

「誤解は深まるままだよミズホちゃん」

とりあえずパッチを返そうと思ったのだが
一向に父親であるトラスケは姿を現さない。

「どうすればいいんだ……」

「泣き声が聞こえると思えば何台あんたたち一人はー」

また女の子が走ってきた。

「なんですかア～また異母姉妹ですかア～めんぢくさいですウ～

「おつおつおおおおー!? な、なんでしつてるんだあー!/?」

「隠れうとする氣もないですねー」のおナリヤサ

そしてたじろぐ女の手。

「くふふ。とりあえずお父さん読んでもらえますかア～」

「ゆ、許してくれ！ 私がすべて背負つから～」

「……いや、君。その……ね？」

「わかった！ まだ 歳だけど別にこの……」

「それ以上は言わんでいい！ 言わんでいいのよー。」

マサムネは「んらんして」いる。

「せつせつと父親を呼べと言ひしむのですよおーー。」

ミズホのトラスケの呼び方が安定しない。

「許してくださいー！ 許してくださいー！」

「びええええええええええええええー！」

「あわ、あわわ……」

トラスケの娘3人は三者三様の表情をしている。

「何この状況……誰か説明してくれよーーー。」

そんなことを言つても誰も説明してくれない。

「ハアハア。お前ら、娘に何を……」

ジムリーダーの部屋からではなく、階段からじたばたと降りてきた
トラスケ。

「いや、本当ににも……」

「やめてえ！ 親父には何もしないでえ～」「ち、ちちうえおーじめえこやーいでえ～！」

「お、お父様！ 私たちビルにかづれ――」

お父様！ 稲がちでどうはがしれ……」

マサムネの叫びですべてが止まつた。

「ああ、なんだ。そういうことだったのか」「うーん、誤解しちまったじゃねえかよ」「そ、そうだったのですか」「わ、わたくしが怖がつたせいで……」

やつとの事で誤解が収まつた。

「まったく。勝手に誤解してくれちゃって困ったものです」「君が言う通り」

バシイツ！

マサムネはミヅホの頭を叩く。

「ありがとうございます。」

ミズホは凄いことを叫んだ。

1

バシイツ！

「ありがとう」「じゃまあまああります！」

「マサムネは気持ちよさそうだ。

「あ、あのぉ……」

「はっ！ と、と言つわけでこれお返しします。じゃ、これでえー！」

マサムネは部屋から走って去って行った。

「……あの一人が父上の事をしゃべらな」とは限らない。追跡します！」

「あたしもそうするー。」

そう言つてエリノと三人目の娘エカミはマサムネ達の後を追った。

「へえへえ……とりあえずシオンに戻る」

「ええ～！ パレードに何も参加しないですよ～」

「いいから帰るのー。」

ちなみにシオンからタマムシまでは往復で三日かかる。なので帰ればポケモンタワーに入れることはまずだ。

「と壱つわけで。帰るー。」

そう言つてミズホを背中に乗せてシオンタウンへ向かった。

「幸せですか？」

続く

裏第一六壇　「これから起つゝ向か（前書き）

活動報告にも書いたがショッキングな事が多すぎる……
すべてはあの日から始まつた……
スパロボのPV公開も中止になるし……
俺は何を楽しみにしながら小説を書けばいいのだあああー！

裏第一六壇　「ねから起」つむ向か

「あら、久しぶりね
「ええ、お久しぶりです……」

マサムネ達は再びあの女性に出会った。

「4・5日ぶりかしらね。どうだったパレード。楽しかった？」
「え、ええ。楽しかったで」
「でふ？ 何かあった？」
「い、いえいえいえ！ 何も何も何も！」

そんな反応すれば誰にでも何かあったところがもうばれである。

「どうりでですね～ポケモンタワーには入れるようになつたですか？」
「ええ、工事が終つて入れるようになつてるわよ」
「そうですか～ではマサムネさん。早速いくですーー！」

そう言つてマサムネの手をつかみポケモンタワーへミニズホは走つて行つた。

「なんでお墓に急いでるのかしら……」
「おっ。どうしたどうした？」
「あら兄さん」
「なんかあつたみてえだが……どうした？」
「ええ、男の子と女の子が急ぎよつてポケモンタワーへ」
「ほお……」

女性の兄は一ヤコと笑う。

「よし。お~い」

「ん? 僕を呼んだか? 父さん」

女性の兄は息子を呼んだ。

「ああ、すぐに旅支度をしろ。用意してある
がな」

「はあ? いきなりなんだ父さん」

息子は疑問そうな顔をして父親に問う。

「螺旋の導きつてやつだよ」

「螺旋の……父さん。それつて……」

息子は何かを理解した。

「へへひ。楽しくなつときやがつたぜ……まだ予測だがよ……」

「な、なになに? どういうことなの?」

女性のその言葉に兄はニヤリと笑う。

「へつ。俺たちは当分家をあけるぜ。親父とお袋の事はたのんだ」

「え? ど、どうこいつこと?」

「なに、親父たちに螺旋の導きが来たって伝えた。それで伝わる」

そつ言つと兄は急いで準備に取り掛かった。

「ポケモンタワーに急ぐ理由。それは最上階の石碑……へつ。死んだあいつにも見せたかつたぜ」

その言葉は女性には聞こえていなかつた。

【一方その頃】

「勢い余つてシオンタウンまで追いかけてしまいましました」「なんか食料が足りそうなんだけどなあ。もうそろそろやめない? タマムシから追いかけてきたトラスケの娘のヒリノとヒカリ。

「しかし、ここまで町がなかつたから言ふふうす」ともなかつたですが、ここは町なのですよ?」「でもよお……おや? なんか誰かと会話してゐるぞ?」「なんですか!」「つて。突然走つてどこかに行つたぞ」「追いかけましょ!」

そつと二人はポケモンタワーに向かつた。

続く

裏第一六壇　「れから起つて向か（後書き）

所でみんな、ジョウトとホウエンのどちらが好きですか？
いいか、二択ですよ？

お気に入りに登録している人たちは答えてくださいよ
……
何のための登録だあああああ！

第一十七壇 じゃ、せかわざれ。れつかねむかー（前編）

感想はまつておきよ。

にしてもこりいのな情報があつて
喜んだり悲しんだり辛いですね……

第一十七壇 じゃ、せかわざへる。あひておひかー

「や、最上階か……」

「やうですね～。やんと石碑もあつますね～」

「まポケモンタワー最上階。

「やんと六もある……でもこれって……」

「どうしましたか？ 今誰もこなこいつにひまついてしま
いまじゅう」

「あ、早くやひなこひつたひとせなこねだい……」

そんな時何か音が聞こえた。

マサムネ達はあくわくと周りを向くが何もない。

「早くやつましおみー。誰か来るこまかみ

「わかった。早くやひつ」

ミズホが少し焦ったように急かすので
マサムネは石碑にキー・ホルダーをすべり落としてしまった。

「じゅ、れあむ……」

「はー。こよこよですね。ワクワクです

そしてマサムネは鍵を落とした。

「隠れる場所少なすぎです……最上階の人があめつたに来ないとこりで何をしているのでしきう」

「覗くとばれるから隠れとけよ」

階段の壁の部分に隠れ、マサムネ達の会話を一人は盗み聞きしていった。

「さて、何を話しているのでしきう……」

「なになに？…………誰もいないうちに…………なにい！？」

「ば、ばれるかもだから落ち着いて。なにを言つてたんです？」

エカミは何も答えない。顔が赤いままだ。

「次は私が……わ、わしつ！？」

エリノも顔が赤くなる。

「早すぎますよ！…………なんですか、以上に出会あれを使って誘惑ですか！」

かなりの誤解が生じている。

無論どうなるように書いたのだ当たり前だらう。ね？

「これは突撃です！…………ばれるとかばれないじゃなく。道徳的に！

行きましょう」

「お、お、おう」

【男性親子組】

「なんだあ、あのガキ一人組は。10歳にもなつてねえんじやねえか？」

「父さんよお……」そのままじや導きの時に突撃するつてのは……」

エリノ達より少し下に隠れている一人。

「そうだなあ。導きのためにやるしかね。あいつらを氣絶させても……」

すると少し上から叫び声が聞こえる。

「あれ？ なんか叫んでるぞ」

「なんかあつたのかもな」

「あれ？ また叫んだぜ？」

「やはり何かあつたんだろう」

すると前の一人組は突撃を開始した。

「親父！」

「もしかしたらいよいよかもしけねえ！ 行くぜー！」

そう言つて一人も突撃する。

カチッ

「光る！ 光るぞー！」

「きましたね！」

石碑から光があふれる。

そして一人は光に包まれ……

「いや、にやんにやんですかこれええええ！」
「よくわかんないけど光だ！」

突撃したことにより巻き込まれる一人。

「父さん。これが！」

「そう。螺旋の導きだあ！」

そして意図して巻き込まれる一人。
そして光は消える。

そこには誰も残っていない。
それは前回と違う結果……

すべては運命の通りに……

続く

第一七壇 じゅ、せかわねんじ。せじておつかー（後醍醐）

ジョウトかホウノ。

ビハリがいいか選んでください。

間違つても

ホウエン・イッシュ・オーレ・フィオレ・アルミア・オブリジアなど
ジョウト・ホウノ以外の方がいいところのは
作者さん困っちゃうのでやめください。

第一八壇 めうじてんわなつたんだ！？（前書き）

前回の地方アンケートは随時募集中。
お気に入りに登録している人はどちらがいいかくらいは
感想に書いてくれると嬉しいです。

第一八壞 めうじてひなつたんだ！？

「う、あいてて……！」は……石碑の前……帰つてこれたのか？」「ほえええ～」
「だ、大丈夫かミズホちゃん」「ほへへえ～だいひょうぶでふ～」「よし。いつも通りだ！」

マサムネは安心した。

「さあ、早くタワーから降りて……おや？タワーの外から街がすぐ
に見える？」

「ほえ？ それってどうこいつ」となのですか？

「……過去の次は未来とか」

「え～なですかそれ～。帰るもとしたら未来とか。じゃあきっとあれですね、少年が激レアなカードダスを隠してたりするんですよね」「そんな、これは騎士物語の外伝の2じゃないからね……」

作者は一週間で攻略した。

「じゃじゃあ……あれですよ～。えええと……」「何か思いつづとして思いつかなかつたんだね？ よくあるよねえ～そういうことつけて」「はうううう～」「はうううう～」「はうううう～」

「はううう～」は本当に未来なのか……一度外に出てみよつ

やつはうう～一人は外に出でみるとこつた。

「あ、あれ？」

「ポケモンタワーがあつた場所になんか派手なものが

！」

「て言うかこの一階建ての建物がお墓なんですか？ 規模縮小すぎます！」

「何があつてこいつなつたのか……」

「おやおや？ 君たちはシオンタウンと言つかカントー地方に来るのは初めてかな？」

マサムネ達が話していると突然誰かが話しかけてきた。

「う～ん。もうあれは昔話になるから知らない子もいるかな～」

そうして男は数年前に起つた事件の事を話した。

「そんな事件があつたのか……」

「そう言つわけだよ～じゃ、用事があるのでこれで……」

そして話を教えてくれた人はそそくさと帰つた。
と思つたら戻つてきた。

「忘れてたよお～」れをあげるねえ～

「え、あ、ど～も」

「じゃあね～」

そう言つてそそくさと帰つて行つた。

「所で何なんですかそれ」

「ん？ なんだろうな……それよりももう一度石碑で俺たちの時代に帰らないと」

「ええ、じゃあもつ一度！」

そう言つて一人は石碑に向かつた。

「これでよかつたんですかねえ？」

「いいんじゃないかな。これで歴史はちゃんと動くと思つ」

「しかし。まあ、あなたの言うとおりにするだけですよ～」

「ふふ。これでちゃんとした未来に進むわ……ふふ……」

「と言つわけで今度こそ！」

「さつさとさしましよう！」

そして石碑にキー ホルダーをさしこみ、回した。
そして再び光が二人を包みこんだ。

「行つたようだな」
「そのようだね～」
「ふふ」
「笑つてますね～旦那様」
「気にするな」

この「人の正体は今は謎である。

続
く

第一八壇 もうじていつなつたんだ！？（後書き）

通常の感想も募集中。

第一九壊　日本文化ですよねー（前書き）

感想はまつてますよ。
待ってるんですよ？

第一九壇 日本文化ですよねー！

「…………」

「大丈夫か！」

「はつ！？」

マサムネは起き上がる。

田の前にいるのはフジ老人だ。

「突然消えたかと思うたらタワーの入り口付近で倒れておったが。
何があつたのじゃ？」

「何があつたか？ 僕にもわかりませんよ」

ホントの事を言つのは得策ではない。
と言つわけでタイムトラベルについては秘密にしておいた。

「そりかの……そり言えばミズホけやんはそこには寝てるでの。つい
ておいてあげるといい」

そう言つてフジ老人は部屋を後にした。

「今度こそ現代か……あれ？ 未来での出来事がよく思い出せない
…………」

何かをもじつたことは覚えている。

「せう言えば俺は何を……ん？ 箱？」

箱だ。

「あかない？」

開かない。

「なんなんだろつか。これは……」

わからぬ。

「う、ううう……」

その時、ミズホの目が覚めた！

「ミズホちゃん！」

「ふにゃ……あ、おひやむねひゃん……おぐよおいじれこみやす」

「寝ぼけているな」これは……

普通に会話でできていない。

「ひやこひょうぶでひゅよ」

「少し、田代がわめるまで会話を控えようか」

そう言つわけでも余韻は一時中断した。

「つまりは私は寝込みに襲われそうになつたんですねー」「なぜそうなる

ミズホのおかしな解釈にマサムネは突っ込んでくる。

「とりあえず前と同じでタイムスリップに関しては秘密。後この箱についてだけ……」

「あかないんですか?」

「ああ、あの女性にもらった箱。しかしあの女性はなんか特徴のある人だつたな」

「そうですね。言葉の語尾を伸ばすタイプで聞き取りやすいですが聞き取りにくい感じでしたね」

「ああ、以前あつたユウミナちゃんともタイプは違う……こいつ何者なんだ?」

現在は確實に不明である。

「もしかしたら、この先に出会うことになるかもだな……」

「未来からすれば過去。今からすれば未来ですか」

「そう。未来に」

そつとして今回のタイムトラベルについての話は終わつた。

今回のタイムトラベルでいろいろな事実も得た。

衝撃しかなかつたが。

「まあ、いい。とりあえず今は夜のよつだ。明日にでもタマムシに行こうか」

「タマムシですか~昔と今を見比べられたりして楽しそうですね

「実にその通りだ」

そう言つてフジ老人に今夜は寝ると伝え。

明日に備えることとした。

【次の日の朝】

「スクランブルエッグにソーセージにサラダにスープ……いかにも洋風ですね」

「つむ。昨日はいろいろ言われたからね」

「そしてパンじゃなくて」飯ですか

「」、今回はあわんとは言わさんだぞ！」

フジ老人叫ぶ！

「まあ、それもそうですね。別にいいと悪くありますよ」

「おや？ そうかの」

「米で食つば文化である」

日本文化バンザイ！

カレーライスバンザイ！

と、ヒカルの脣部脣が腫つていましたよ。

「マカラーネさんも早く食べるとこことですよ」

「おやおや、ミズホちゃん。そんなにがつてこじ食べるやつだ……」

やれやれとした顔でマカラーネも朝食をとりました。

続く

第一九壊　日本文化ですよねー（後書き）

第一部はいまだ中盤である。

果たして何話で第一部は終わるのであらうかー！

そして知らぬ間に11歳になつてせらりに枷の外れた
ミズホちゃんはどつ暴走するのかー！ こつこつ期待！

やっぱ昔の方がいいかな……

第三十壱 都会育ちのせだな……（前書き）

感想はまつてはこぬ。

これは感想が来るのを待つてゐる。と
感想を読むのにはまつていふ。
と書つたのである。

第二十壇 都会育ちつてのはだな……

「旅は道連れ
「世は情け～」
「ふう……さて。もうすぐタマムシだね
「ですね～」

現在はシオンからタマムシへとつながる地下通路。
過去の世界とは違い、何と動く歩道となつており
往復に四日もかかるなによつたになつていて。

「そもそも過去のタマムシは町の風景とジムしか思い出がないので
すが」「逃げるよつて帰つてきたからなあ……今のジムつてどうなつて
んだか」

「えつとですね……パンフレットによると今のジムリーダーは就任
したてのエリカと言う人らしいですよ」

「ふうん。あれが何年前かはよく分からぬけど、娘さんたちはも
う引退した後つて感じか

「あの一桁少女たちがどのようになつて成長したか見ものですよ

ミズホはニヤリと笑つてゐる。

「そうね。できれば遭いたくないかな」
「それもそうですかね。ふふふ……」「……」
「もつまにほ戻れないんだね。ミズホちゃん

マサラで久しぶりに会つたこのミズホを思い出し涙を浮かべるマ
サムネであった。

【タマムシシティ】

「やっぱり凄い都会ですねえ」

「まあ、俺が住んでたイッシュに比べればまだまさ」

「おお、都会の男は言うことが違いますねえー！」

「あんまり大声で言つことではない。して、ポケモンセンターは… あそこか」

ポケモンセンターを見つけるとマサムネはそちらへ向かい歩く。
ミズホもそのあとを追つていく。

「……」

そしてその光景をただじっと見つめる誰かがいた。

「見慣れた顔は……いないなあ」

「もう先に行つてたりするんじゃないですかね」

見慣れた顔は一人もいやしない。
別にいなくても不思議はないのだが。

「ガイトとかもいねえんだなあ」

「カナデちゃんとかもいませんよねえ」

「なんか悲しい感じだ」

「モグリュ」

「カメカメ」

さらりとシモンとトガミが登場。
考えればお久しぶりである。

「ま、それはさておきと。今日は泊つて明日にはジム戦だな」

「ですねえ」

「モグモグ……モグ？」

「どした？ シモン」

「モグ」

シモンは紙をさしだした。

「ん？ 誰かに見られた気がしただと？」

マサムネは周りを見渡す。

だがマサムネを見つめているものはいない。

「そんなやついないぞ？」

「モグリュ……」

「気のせいだつたんじゃないかな？」

「グリュ……」

シモンは考え込んだ様子になり何も言わなくなつた。

「…………とにかく今日はもう寝よう」

「そうしましょう」

そして二人は宿泊の手続きをとつた……
その後はいつも通りである。

続
く

第三十壱 都会育ちひつてのはだな……（後書き）

諸事情により4月中盤から忙しくなるので

中盤から後半までペースアップしていきたいと思います。

スバツと行くよズバツと。

世界で一番くらいに。

このネタわからない人多そうだよ〜

裏第三十壱 1järne1järne1järne1aauu! - (前書き)

見知った人たちの現状回

「せ、拙者は疲れたで「j」れるよ。……」

「贅沢言つなど言つてこなだらつ? 僕の言ひJとは絶対だ」

カナデとカナブ。

現在はクチバシティである。

「まつたぐ。ポケモンセンターはすぐそこだからね」「せ、拙者。ここまで辛い罰を受けるほど悪いJとは……」「言つたよね? 署に権限はないよ」「「j」れる……」

もはやカナブは何も言ひJとはなかつた。

【ポケモンセンター】

「とにかく。明田にはジム挑戦だよ」「「j」れる~」

カナブはもう何も聞こえていない。
倒れている。

「まつたぐ……ん?」

カナデは壁に貼られているポスターを見た。

「当分ジムは休業？ ジムリーダーが行方不明……臨時のジムリーダーのマチスが来るまでは休止か」

カナデは少しがっくりする。

「当分はここで足止めか……どこかに遊びに行ったりするかな」

そしてカナブと二人で遊んでいるところを想像する。

「……そ、そうだな。僕にも休暇を取れないとな。僕つていい奴だな」

そう自分に言いつけた。

カナデが正直になる日は遠い。

「うわあ～

カナブはどう思っているかは謎のまま……

続く

第三一 壊　えつー？（前書き）

本日の出来事である

なんとなくサンデーのポケモン漫画が気になるので見てみる。

バースト……融合ー？

なんてこいつた……俺の考えた名前とかどうしよう、

てかこの先の展開どうしよう、

ここまで言えばわからちゃうでしょー？

自分がこの先何をしようとしていたかは、

俺は泣くぜ……

第三一 壊 えつ！？

「朝です！」

「そうだね」

何事もなくいつも通りだ。

何、もはや言つことはない。

「と言つわけで。行こうか」

「はい。行きましょう」

一人の仲はAから進んではいない。

【ジム出入り口前】

「おや？ なんか爺さんがジムの中を覗いているぞ」

「女の子ばかりのジムですからねえー。覗きなんて最低ですね」

しかし覗いているじいさんには見覚えがあった。

「ん？ 気のせいかな……もしもし」

「んあ、なんじゃあ。このポイントはいい位置なのじゃからどかん

ぞ」

「なあ、爺さん。あなたもしかして……」

「何を言われてもわしはどかんぞ！ 覗きがわしの生きがいなのじ
や！」

「いや、まてよ。俺の思い道理ならあなたは…」

パタン

そんな時ジムの扉が開いた。

「お爺様！ またそんなところでジムを覗きになるなんて！ 部屋で寝てください！」

「何をするのじゃ！ わしはわしは餘くのが生きがいなのじゃあああ～！」

ジムから出てきた女性によりおじこさんはジムの中へと引きつけられて行つた。

「あれ？ 今の女性はジムリーダーのヒリカさんですよ」「つまり今覗いてたのはトラスケさんってこいつたな……」「あのですか？ なら別に覗かなくても中から……」「覗いてられるかばれないかがいいというのもあるかもだが……」

何か普通ではない感じがした。

【タマムシジム中】

「挑戦者さんですか……先程は失礼しました」

「さつきのつて先々代のジムリーダーですよね？ 何があつたんです？」

「祖父がジムリーダーであつたことをご存知ですか……」

するとエリカは少し悲しそうな顔をして理由を話し始めた。

「祖父は過去に娘……私の叔母に当たる方が行方不明になつてからああなられたそうです」

「行方不明？」

「ええ、何やらよく知らないのですが。とある一人組を追いかけて行つてから帰つてこなかつたそつなのです」

マサムネとミズホは顔を合わせる。

その二人組とは……

「そして今のように何があつてもジムを覗くよくなつてしまい……もう元には戻らないかもしません。母様も看病とジムリーダー業で病氣になり寝込んでいます……」

「……」

「お爺様も覗きなんてしていられる体ではないのですが……ああ、すいません。こんな話をしてしまつて……」

「あ、いや……」

マサムネは少し言葉に詰まる。

ミズホは喋ることすらできない。

「これではバトルなどできはしないですね……」さうを受け取ってくれださい」

「バ、バツチ！？ で、でも……」

「いいんですよ……私も就任したてですし……こんな話を聞かせてしまつたのですから……」

「あ、あ……う、受け取らせてくれます……」

「マ、マサムネさん……い、いいんですかね？」

「え、あ……」

一人分のパツチをマサムネは受け取った。

「し、失礼しました！」

そう言つてジムを後にした。
また逃げ出すことになった。
前回とは違う逃げ方だった……

「……お爺様。私は弱いのですか」

マサムネ達が去った後のジム。
そこには涙を流すエリカ。

ガチャ

「おや、戻つてこられ……あら。」

入ってきたのはマサムネではない。
男一人と女の子二人の集団だ。

「挑戦者さんですか？　あいにく今は……
いや、ここにトラスケさんっていうかな」

続く

第三一 壊 えつ！？（後書き）

まだ泣いてる自分です。

感想は募集中ですよ。

さて、スパロボでも見て寝ますかね。

第三一 壊・補足　トガニイはトガニイです（前書き）

ジムからマサムネ達が去った後何があったのかと言つお語。

第三一 壊・補足 トガミはトガミです

【ポケモンセンター個室】

「……なにかやりきれない感じだ」

「あの子たちが行方不明ですか……」

マサムネ達の雰囲気は何か暗い。

「でも、俺たちのせいってのが確定もしてないし」

「で、ですよね。私たちが誘拐などをしたわけでもないですからね」

ミズホはそう言つが場の雰囲気は良くならない。

「モグリュ！」

「カメエヌヌヌヌル！」

そこで突然叫ぶシモンとトガミ。

「モグモグモグリュ！」

「カメカメカメエエ！」

シモンが差し出す紙には

『兄貴！ 何暗くなつてやがるんだ！ そんなの兄貴じゃねえ！』

「シモン……ついでにトガミも……」

「力、カメメ？」

トガミの扱いはいつも通りである。

「ありがとうよ。なんか元氣出るわ」

「そうです。さすがはシモンです！」

「力、カメ、カメメメ！？」

「あ、トガミもどうもです」

「カメエー」

なにはともあれ、シモンとトガミにより一人はいつもの元氣を取り戻したのであった。

続く

第三一 壊・補足 トガミはトガミです（後書き）

バースト、バースト……ふふふ……

第二二 | 壊・1 一意專心—(前書き)

感想はまつてゐる……

第三二二 壊・1 一意専心！

「次はどうにに行くんですか？」

「セキチクかな……サイクリングロードを通るしか道がないようだ
見えるが……」

「が？」

「ここに裏道がある」

そう言つてマサムネは地図を取り出し指さす。

「裏道ですか？」

「そう。あまり知る人のいないルートだ」

「そんなのを知つているマサムネさんですがですー。」

「ふふふ。調べていたのさ」

タマムシの下、サイクリングロード横の森のけもの道
ここはめつたに人が寄り付かないらしいが
サイクリングロードを越えるより早くセキチクシティにつけるらしい。

「めつたに人が寄り付かないって言う所が気になりますが」

「気にしなくていいよ。うん」

「はい！ 気にしません！」

「よしー。」

問題は解決した。

「と言つわけで準備ができたら早速向かおう」

「はい」

【タマムシ近くの森・けもの道】

「人つ子ひとりいないな……」

「ええ、と言うかけもの道なんですからポケモンがいてもいいと思
うのですが……」

「ポケモンかあ……ん?」

田の前にぶんぶんと飛んでいるポケモンがいる。

「くラクロス？ カントーでは珍しい

「ここはあまり人が来ないそうですからねえ~」

「ゴス、ゴス

「おや、リコポ。お前なんで勝手に出てきてやがるですか?..」

「ゴスゴースト

「なんかむかつくです……」

「しかしあのヘラクロスはほしいなあ。よし。シャドウ。瀕死状態
にしてきちゃえ

「ギャラファアアアアア!」

ボールから出てきたシャドウは近くの木を倒す。

「ぐ、ヘラクロツ！？」

「ギャラファアアアアア！」

シャドウのかえんほりゅう
こうかばばつぐんだ！

「へ、へラクロッ！」

「はあ。シャドウが木にうつらなによろに集束してはなつたかえんほつしゃを食らっても倒れないとは……ナイス根性だ」

- > < !

ヘラクロスのとつしん。

シャトウにケリテイた川ヒット!!

九月三十日

「ギャラアアアアアア！」
「へ、へラつ……クロツ」
「体力付きかけだつたのにつしん。そしてまだ倒れない……いい
なあ……」

そう言ってマサムネが手にしたのはスピードボール。

「クラクロス……ゲットせてもいいぜ?」
「そう言ひて又カクネボーレを投げた。

ガシュイン

ヘラクロスはボールの中に納まる。
そして。

ポシュウン

「へラクロス。ゲットだな」

「流石ですマサムネさん!」

「ゴスゴースゴスト」

「てめえ。いつまでそこに……あれ？」なんで手にモンスターボー

ルる持つてるですか？」

「ゴスゴース」

「これ中にポケモンはいってるですね。ヘラクロスじやなさそうですが……」

開けてみる。

すると中に入っていたのは。

「！」、これはー！」

後半へ続く

第三二 壊・1 一意専心！（後書き）

モンスター・ボールは初めにボールのボタンを押したものを持ち主と認め
他の誰がそのボールで捕まえようとも
初めてボールのボタンを触つたもののポケモンとなる。
これがこの小説のモンスター・ボールだ！

第三二一壊・2

ラッキークッキー……いや、そりやねえわ……（前書き）

感想大募集。

第三二二 壊・2 ラッキークッキー……いや、そりやねえわ……

【少し前】

「ラキラキ」

「ゴスゴス」

勝手にボールから出てきたリュポは森の中に入ったラッキーとであった。

「ゴスゴスト」

「ラキラキ」

そんな時偶然にミズホが持ち主となつていてるボールを手にしていたリュポ

「ゴス」

軽い気持ちで投げてそして

カシュウン

「ゴスゴースト！」

と言つわけであつた。

「全くどうこいつわけなんですか！」

「俺にそんなこと聞かれて……」「

なぜラッシュキーを捕まえられているのか分からぬ。
そして掴まれて揺らされるマサムネ。

「うつやうつやうが捕まえてきたってことなんじゃないかな

スピードボールを拾いながらズボにそいつマサムネ。

「もういいとにかくせんね……少しは見直してやるとする
ですよ」「

ちなみにズボにシントレの要素は一切ない。
誤解なきよつと。

後ヤンデレの要素もないよ。

「まあ、ラッシュキーと叫うわけで」
「ラッシュキーですね」
「ゴスゴス」
「ギャラアアアアアアアア！」

シユールな光景だ。

【セキチクシティ近く】

「じゅやうセキチク近くに出れたようだ」「
なんかボロボロです。シャワーでも浴びたいです。マサムネさん
と一緒に」「

「……あ、もはや何も無いとなつた」

服に葉がつき汚れか付いてる。

「早いとこセキチクのポケモンセンターへ……」

「ちょい待ち」

「あ、ポケモントレーナー？」

田と田があつたらポケモンバトルの図だぜー

続く

第三二一壊・2 ラッキークッキー……いや、そりやねえわ……（後書き）

戦いたくない時だつてあると云ひついで……

第三三壇 何？（前書き）

感想は募集中。

第三三壊　……何？

「ほれ、バトルバトル」

「ああ……わかつたよ。行つて来いシモン！」

「モグウ！」

さつそりと壁場するシモン。

「ふふふ。じつやう頼りになる相棒のようだが。俺の相棒に勝てるかな？」

「モグウ！」

「今の言葉にシモンが意氣揚々となつてゐるぜ」

「おお。いいバトルになるかもしけねえな。よし、行けッナビフー！」

「ラーバ！」

出てきたのはビブラー・バだ。

「ビブラー・バか……なかなかの強敵つてやつだな」

「ふふん。わあ勝負だ！」

「ナビフ。いつもの通りだ！」

「ベベー..」

ビブラー・バことナビフはシモンの周りを高速で動く。

「モグリュー？」

シモンはその高速な動きにつっこいでない。

「シモンが反応できていない！？ シモンは高速に動くものもすぐ見分けて攻撃できるはず……」

「ナビフのパターンのない高速な動きには追いつかねえだろ

ナビフは自分の意思で高速移動している。
そこに一定のパターンはない。

「モグモグゥ！」

シモンはこうそくスピンで攻撃するが一定のパターンで動いているわけではないので
狙った所に攻撃しても当たらない。

「ナビフ。 じゅうのじぶきー！」

「ピラーバ！」

ナビフのつまづきにぶき。

「モグアー！」

「シモンー！」

ああうしじょにあたつた。

「モ、モモグ……」

シモンはマヒしている。

「ふふ。 よし。 ナビフ。 パターン2！」

「エラル

ナビフの高速の移動は終わる。

「ビブーラ！」

「モ、モグリュアー？」

シモンの足元が砂の流砂となる。

「すなじ」「！」

「悪いね。速攻で終わらせてもらひつよ」

「エラルアアアアバ！」

天候が良くなつていく……

「にほんばれつ！？」

ナビフの口元に光が集まる。

「まさか。草タイプ高威力技……」

「そう。ソーラービームだ！」

そして発射されるソーラービーム

「シモオオオオオオオオオン！」

プチッ

その攻撃はシモンに直撃した。

「ア、マサムネさん！ シ、シモンが」

「……」

「おやおや。ショックで黙つちやつたか」

「ハハ」

流砂の中にシモンの姿は消えていた。

「さて、俺の勝ちだな。さつさとモグリローを助けて……」

「負けてねえ……」

「何？」

「俺とシモンの『ハビ』がこんなにひどく……負けるわけないだろ？
があああ！」

「マサムネや……キー ホルダーが光ってる？」

そつ。マサムネのキー ホルダーが光っている。

「俺が信じるシモンが負けるはずねえ……そしてシモンも俺がシモンを信じていてることを信じていて……」

「な、なにを戯言を……」

ズシャ

「あん？」

砂の中からシモンの手が現れる。

「どうやら今まで言つぽいの底力はあるようだ……ナビフー！」

「ハハ」

再びナビフの口元が光……

「ペッ...」

「何?」

ナビツは地面に落ちてこる。

「.....モグリコ」

「え? 何があつて.....え?」

そして戦いは終わった。

「何があつたのか全く分からなかつたが.....負けたよ.....」

「そうか。 そうだな」

「まあいい。 今度は負けない。 我の名前はアサノブ。 覚えておいてくれよ。 ジヤ あなた

そつとアサノブはサイクリングロードへと向かつた。

「あの、 マサムネさん。 なにが.....」

「.....ヤマブキか.....」

「マサムネさん?」

「ん、 ああ、 何?」

「いえ、 今は.....」

「ん、 ああ、 気にしなくていいよ」

「え、 あ.....あ.....はい.....」

ミズホは納得していない。
ミズホが納得しないことはよくある事である。

「とにかくセキチクシティに行こう

そう行ってマサムネはセキチクシティに向かう。
その後ろにまだまだと付いていくシモンの姿もあった。

「こいつ何なんでしょうか……

続く

第三三壞 ……何？（後書き）

http://www.nicovideo.jp/watch/sm13906582

こちらよければ聞いてください。

しかし、アサノブのポケモンとビブラー・バの名前を考えるのに2時間もかかつてしまつた……

裏第三三壇 親父（前書き）

感想は大募集中。

後、ヘラクロスとラッキーの名前も募集。

【セキチクシティ・ポケモンセンター 宿泊個室14】

「と雪うわけで、今日はもう寝て明日はジム戦だよ」「はい。今回もダブルバトルのよつです。頑張りましょ」

いつも通りの光景がそこには広がっていた……

「じゃあ寝よつ。ねやすみ

「あ、はい」

だが少しだけ違つた。

そう感じたミズホであつた。

387

「……」

隣のベッドでミズホが寝ててゐる。
マサムネは考へていた。

(あの時何があつたんだ? いや、何があつてああなつたのか……)

あの時は何かが起つてああなつた。
何があつたのかは分からない。

(キーホルダーが光つて……その時に……)

それが何なのかは分からぬ。

（だが胸の奥からこみ上げてきたあの力。シモンと一つになつたような……）

そしてその時にキー・ホルダーが光つていた。

（親父なら何か知つてゐるかもな……）

そもそもいろいろなものを送つてきたのは父親だ。

（セキチク・グレンに行つた後ぐらでヤマブキのゲートの工事は終わる）

マサムネはヤマブキに行くことを決めた。
力の真相を知るために。

（所で工事の間ヤマブキの人はどうして……）

それはきっと永遠の謎である…………

続く

第三四壇・1 親子愛……そしていりのなか……

【ポケモンセンター】

「と詰つわけで。わしそくセキチクジムに行こう」
「ハイナツ サーです」

マサムネは寝る前の決心によりいつも通りに戻っていた。
それを感じたのかミズホもいつも通りに戻っていた。

「と詰つわけでレッスンゴーです！」
「いつも通り引かず、やられるのねーー。」

いつも通りである。

【セキチクジム】

「ファファファ。挑戦者か」
「こんな奴ら簡単に倒しちゃいましょう」父上
「アンズよお前もまだ未熟。そんなことを言ふる立場ではないぞ」
「申し訳ありません父上」

目の前で繰り広げられる親子劇。
もはや何ともいわれぬ何か。

「……っ」「
『ミズホちゃん……』

それを見て顔を少ししかめるミズホ。

親子愛と言つものを見ていると少しイライラするよつだ。

「ミズホちゃん。大丈夫か」

「大丈夫ですよ……マサムネさんがいてくれますから……ええ」

どうもイライラが抑え切れていない様子。

「やつちやえはスッキリすると思つよ。ミズホちゃん」

「やつちやえはいいんですねマサムネさん。フフフ

マサムネは人前では抱きしめるという行為が恥ずかしいのできないため

倒すといつ選択肢を選んだ。

どの道倒すわけだが。

「ファファファ。すまぬな、ダブルバトルといいつ。娘には私のポケモンを使わせる」

「残念ですがあなた方に勝ち目はありませんよ」

「はたしてそうかな……」

「私たちにはかないません」

そして戦いが始まる。

後編に続く

第二回壊 - 2 もつやもつなるよ～（前書き）

感想募集中。

第二四壇・2 そりゃ そつなるよー

「行けッ！ ベトベトン」

「行つてくるのだ！ マタドガス」

キョウ親子はお得意のどくポケモンを繰り出してきた。

「やつてこご。 シモン」

「やつてくるですよ。 トガミー。」

そしてマサムネ達はベストコンビを繰り出した。

「カメー！」

「グリュー！」

「では、試合開始！」

審判の宣言とともに試合は開始した！

「シモン！ つるぎのまこ！」
「モグウ～」

シモンはつるぎのまこを舞う。

「隙あり！ ベトベトンのしかかり！」

「させないです！ ロケットずつき！」

「カメムヒヘル！」

シモンにしがからうとしたベトベトンをトガミが口ケットずつきで押しのける。

「ベトオー！」

シモンへのしかかりは止められたがやわらかい体ゆえダメージは少ない。

「マ タドガアース」

「カメカ！」

マタドガスのたいあたりをトガミはよけた。

「モグリュー！」

マタドガスに向かいシモンは走る。

「ベート～」

近くにいたベトベトンはシモンに再びのしかかりつくる。

「モグフー！」

シモンは軽く投げる。

そして

「モグフー！」

「カメツー！」

シモンはトガミを担ぐ。

そして……

「モオオオオオグリュ！」

力いっぱいトガミを上に投げる。

「一体何を……」

「今だシモン！ じしんだ！」

「モオオオオオグリュ！」

空高くにいるトガミとふわふわのマタドガスには当たらない。
だが

「ベトオオオオオオオオ！」

ベトベトンにはいかはばつぐんだ。

「ベトベトン戦闘不能！」

「ち、父上のベトベトンがあーー！」

そしてフィールドの地形が荒れ地に代わる。

「カアアアアメー！」

落下してきたトガミがマタドガスにずつきー

「ドガツ」

紙一重の所でよけられる。

斜めに落ちていきマタドガスからは離れる。

「モグ……！」

つめどきをしながらトガミがいる方向へ走るシモン。

「マタドガア～」

トガミは当分は起き上がりえないだらうと思
シモンめがけて襲いかかるマタドガス。

「モグ」

シモンは突然止まる。
そして逆転する。

「ドガツ？」

怪しいと思いマタドガスは少し離れる。

「モグモグモグー！」

マタドガスに向かいシモンが走る。

「ドガツ」

少し上にふり下の攻撃をよけよつとする。

「モオグ」

そんなシモンの後ろから走るトガミがいた。

「カアアアアアアアメ！」

トガミの口ケツトずつき。
その先にいるのはシモンだ。

「カアアアアアメつ！」

「モオオオグリュ！」

その勢いでシモンはマタドガスめがけて飛ぶ。

「ドガア！」

その勢いにのまれたかいや、速さもなかなかのその攻撃をマタドガスはよけれない。
そしてそのまま攻撃を食らう！

「ド、ドガアアアアア」

シモンの攻撃を食らいマタドガスは墜落して行く。

「マタドガス。戦闘不能。この勝負、挑戦者の勝ち！」

「モオグ！」

「カア……メ？」

勝利が確定したときトガミの体が光りだした。
そして

「カメエエエクス！」

トガミはカメックスに進化した。

「勝てたですよーざまあみやがれエです~」

「よかつたねえ」

「力、カメツ」

勝利の喜びの方がトガミが進化したことより勝つたようだ。

「力、カメクウウウスー！」

「モグリュ」

最後の進化だと言うのにトガミの扱いは変わらない……

その後バッヂを受け取り泣いているアンズを見て

笑顔のミズホと困り顔のマサムネはジムを後にした……

続く

第三回 壱・2 そつやそつなるよへ（後書き）

Bハートビニかで出そうかな
いや。

面白こじ樂しそうだが出すのはどうかな

「カメカメカメ」

落ち込んでいるトガミを励ますシモン。
だが以前のように肩に手は届かない。

「モグリュ。モグーリュ！」

「モードグリュ」

手を使いトガミとの大きさを比較するシモン。

「カメエエエクス」

モグリエ

そして手をつかみ握手する一匹。

友情は姿が変わつてもなくなる」とはない。
そういうことである。

【ポケモンセンター】

マサムネ達はシモンたちの横で荷物の整理をしていた。

11

「マサムネさん？」

「何か考え方ですか？」

「いや、別に」

「そう、ですか……」

そういうことミズホは荷物の整理を始めた。

「シモンはなぜ……」

マサムネはそうつぶやいた。

続く

第二五壱　ふたりじめやうかく.....ひにゅーねえよー（前書き）

感想はまつてこる。

第三五壊 ふたごじまでラフラフ……むりじゃねえよー

「グレンタウンですか？」
「ヤマブキはまだゲートの工事中だ。と言つてグレンに行く
「どうやって行くのです？」
「これだ」

マサムネが出したパンフレットをミズホは見る。

「ふたごじま経由グレン島行きの船……ですか」「
と言つたれしか船がないよつだ」「
グレンタウンって田舎の田舎なんですね」「
観光地なんだけどね。まあ一定の季節以外は人が限りなくいない
よつだ」

そう行つてマサムネはパンフレットをなおす。

「と言つわけで、出発の用意をしようか」「
はいです」

そして二人は出発の準備を始めた。

【セキチクシティ・浜辺】

「さあ、出発ですよ。出発」「
俺たち以外に乗る人がいないよつだけね」「
毎日一便ですよね。他に乗るトレーナーも見えないです」

キヨロキヨロと周りをミズホ。

その視線の先にはママサムネと船しかない。

「ま、船長さんがいるからふ一人きりではないが」

「……ちつ

「ああ。何も聞かなかつたなあ俺」

そうこうことで一人は船に乗つた。

「出発~」

「ふふつ」

ミズホは子供らしくてこれは子供だなとママサムネは少し笑つた。

【数時間後】

「ふた~じまだよお~」

「到着か」

「ここで乗り換えなんですよね」

「そういうがなぐなつたよ」

突然船長がしゃべりだした。

「ここに島の入り口からもう一つの島の出口に行ってくれんかな

「もう一つの出口?」

「諸事情でなあ。これのせいで船で渡る人も少なくなつちまつたあ

「」

そう言つてタバコを吸いながら船長さんは船に戻つていいく。

「向こう側の出口に弟の船が来る予定だからそれに乗るといえよ」

そう行つて船長さんは船に乗りセキチクへと帰つて行つた。

「……これで一人きりですよ」

「そうだけど。しかしこれで人が乗らなくなつたか……」

そう言つてマサムネは洞窟の入り口を見る。

「強いポケモンでも出るのか？」

「強いポケモンなんてのは私たちの力があればなんともないです」

「私たちの力ねえ」

「はい。ラブラブパワーです」

「なんかどこかの何でもカレーかける女の子みたいなセリフね」

「たぶん誰もわからないですよそれ。女しか乗れないロボットに乗る男が主人公の話とか言つても」

そんな今なら別物の作品に間違えられるような話をしながら
マサムネ達はふたごじまの洞窟に入つて行つた。

続く

第三五壞 ふたりじまやラフラー……ハリジヤネエヨー（後書き）

そろそろ終盤なのがもしかれない。

ところで皆さんは好きなものは先に食べる派? 後に食べる派?
自分は後に食べる派です。

第三六壇 まあ、いりこりのやこいな（前書き）

感想はまつてこる。

第三六壊 まあ、いりこいつのもいいな

「薄暗いな……」

「ああ。もしも誰かでたら大変です」

「たぶんないよ。そんなこと」

抱きつくるではなく背中にひりつく状態となつてゐる。

「つこに抱きつくるを超えてしまったね」

「まあ歩きにくいので常時できないというのが難点です」

そう言つてマサムネから離れいつも通りに抱きつくる。

「しかしまあ。ポケモンが元気で泳いでるねえ」

パウワウやジユゴンなどが水の中を泳いでいる。

「襲つてくる気配とかはないけども」「のどかですねえ~」

ガチャヤ

「ん? ガチャヤ?」

「あの、足元……」

「足元?」

足元の氷にひびが入つている。

「ははは。通りで寒いわけだ」

「私は、いつまでも一緒にいですから」

「ああ、現実を教えないで……」

パ
リ
ン

「あ、あああああああああー」

「落ちます、うう、つづく、ううう——」

「んあ？ うむ。助かつたか……」
「んにゃ～マサムネさん～もつと～」
「何言つてゐんだこの子は……しかし。落ちたところが見えない……」

マサムネは上を見上げるが暗くて何も見えない。

「上にあがれそなと」ひは……穴のある場所が分かれればシャドウに乗つて上に行くんだが……」

ある場所がよくわからない！

「少し歩いて探すしかないな……」

そう言ってマサムネは腰を下げる。倒れているミズホの頬を叩く。

「ミズホちゃん。起きて」

ペシペシ

「起きて」

ペシペシ

「起きてくれ」

ペシペシ

「まだ起きない……ん？」

よく見ると皿をつぶしているが幸せそうな顔をしている。

「……………しかたない。置いてこい。//ミズホちゃん……いやオーキドミズホ。ここでお別れだ」

そつまつてマサムネは//ミズホから離れて……

ガシッ

「…………やあ…………」

泣き声が聞こえる。

「おいでいがないでぐだぐだマサムネさんがないどこぞでいな
ません~！」

この世の終わりが来たといつよつた表情でマサムネにミズホは話しかける。

「じゃあもう、たぬき寝入りとかしない」と。わかった?」

「ふえ……おひこせんか、ひかるへ

「じや、まこ

やつまひひ半々あこだす。

「…………あいがとひゃく二番やー。」

そして二つの抱きつぶ状態となる。

「じゅうけいわか

「まこ

そつまひひサムネ達は上に上がれる場所を探して歩きました。

続
く

第三六壇 補足 助けは来るのか 助けはないのか（前書き）

後半は文字数稼ぎ的でごめんなさいです！

第三六壊 補足 助けは来るのか 助けはないのか

「もすもす。おお、ジロウ。何？迎えの船の日時？今日だといつだっぺ」

「いや、船は当分は出れねえんだっぺ」

船業者の一人の会話。

どうやら連絡の相違があつたようだ。

「なんだ、あのお客さんどうなるんだ？」

「ポケモントレーナーなんだからどうでもなるべ」

「なんだ」

勝手に大丈夫と結論づけた。

そして一人に助けは来ないことが確定したのだつた。

【一方その頃 クチバシティ】

「マチスが明日に来るらしいよ」

「い、いよいよで」や……いや、それより子の荷物重いで」やる…

…

「テーマパークのお土産なんだ。実家まで送るのを頼むまでなんだ

から我慢しなよ」

「でも10時間待ちで」やるよ…？」

「いいから！」

遊びに行つたはいいが結局は連れまわして荷物持ちにする。
そんな運命であった。

続く

第三十七壇 ただボキャブラリーがないだけだよー（前書き）

感想は本当にほっこりです。

たくせんあると作者がいつもよつと目に働きます。

第三七壊 ただボキャブラーがないだけだよ！

「こんな時にちょい合ってよかつたですね。長いマフラー」「親父の贈り物の一つなわけだが……ファッションモデルとかがつけるような長い奴送つてくるとかどうなんだか」「私たちにとっては都合がよかつたんですよ」

笑顔で笑うミズホ。

それを見てマサムネもただ笑うだけだった。

「と。歩いては見るものの上が見えない……」「ここで死ぬまで一人きりなんですかね」「それはいろいろ困るがな……と」

前には大きな湖が広がっている。

「端についてないのに後ろに戻るもどりだかな……」リリは……

とリリとでこいつやの時に使つた簡易型ポートを用意するマサムネ。

そして動力は……

「カメ……」

トガミである。

「さて、奥には何があるのか」「なにもなかつたりしたりしますかね」「それはそれで戻るのが面倒だけね」

そして奥へと少しずつ進んでいく。

「なんかどんどん寒くなつてくるなあ……」

「こうこうとときに温まる方法は、ひと……」

「ん? 何か見える……」

マサムネは何かを見つけたようだ。
ミズホは残念そうな顔をしているが……

「降りれる場所がある。降りよう

そして二人は船から降り、何かに向かって歩く。

「これは……扉?」

「なんで人工物があるんですかね」

「この先に誰かいる? 物好きな人もいるもんだ」

そう言つてマサムネは扉を叩いてみると。

「ひーひー

「少し凍つて冷たい……」

「かわいそうなマサムネさん……」

そんなことを言つていると。

「どなたですか?」

扉の奥から声がした。

「遭難者です
です」

ガチャ

「それは大変ですね。どうぞ中へ……あらっ。」

中から出てきた女性はマサムネを見て不思議そうな顔をした。

「? なにか?」

「いえ、とりあえずどいつか」

そしてマサムネ達は部屋の中へと入った。

「フリー・ザーですか?」

「はい。私の家系は代々このドフリー・ザーの守護をしてきたのです」「へえ……」

「まあ、ある特定の時期のみ来るだけですが。今はいません」

そうついつて彼女はお茶を一人に差し出す。

「そう言えば名前をまだ行つていませんでしたね。私の名前はツララです」

「俺の名前はマサムネ」

「私はミズホです」

軽い挨拶をし。

マサムネはもう一つの出口に近い方法を聞いたとしたその時。

「あの、あなたはその胸のものをどうぞ?」

「ん? このキー ホルダーの事?..」

「ええ。どちらで?..」

「これは親父からの贈り物さ。これについて何か知つてゐるのか?..」

マサムネはキー ホルダーについて何か知つてゐるのか凄くに気になつた。

「いえ、お爺様がよく見せてくれたものと似ていて……」

「お爺様? そのお爺様はどこに?..」

「たしかオーレ地方に療養に行かれているはずです」

「遠すぎるなそれは……」

「ですねえ

「ですねえ

(やはり親父に訊きに行くのが一番早いか……)

「……」

「何か?..」

「いえ、何でもないです

「所で地上に出るにはどうすればいいのです?..」

「出口はひからいの扉ですよ」

「おお。早く出ましよ!..」

「あ、お茶ありがと!」
「あ、お茶ありがとうございました」

カチヤ。パタン

「忙しい人達……でもあのキー ホルダー……」

再びしまった扉を見てツララはまだ呟くだけであった。

続く

第三七壱　ただボキャブラーがないだけだよー（後書き）

後書きは何も書いてありませんでした。
何か書いてあつたのを見た人は忘れてください。

第三八壞 なんとなくですか……（前書き）

感想お待ちしております。

第三八壇 なんとなくですか……

「外の光だ」

もう一つの出口に到着したマサムネ達。

「でも船は見えませんけどね」

「ならここはこの簡易ポートで行くしかないか」

「んじゃ動力でも出しますかね」

ミズホがモンスター・ボールを取り出しつとしたとき。

「あの、少しよろしいですか?」

「おや、シリラウさん?」

「あのこれ……」

「なん……なん?」

シリラウが手渡してきたものがマサムネは気になつた。

「このプレート……俺に?」

「はー。あなたに」

カード一枚ぐらいの大きさのプレート。
それをマサムネは受け取る。

「しかしながら……」

「それは……」

「あなた……マサムネさんプレゼントなんかしてどうこうおつもりです?」

恐ろしい形相をしたミズホがツラツを見つめている。

「いえいえ。そう言つのではないのですよ。私にも故郷に彼がいますから」

「おや、そなんですか」

ミズホはこつもどおりに戻る。

「一年ほど会つていませんが。まあ交代の人気が来てくださるまで仕方があります」
「さみしい話ですね」
「務めですか」
「あの、それで結局……」

一人の会話が終わるのを待つていたマサムネは再び質問する。

「……渡した方がいいと思つたからです」
「思つた？」
「ええ、なんとなく」
「これは大事なものじゃないんですか？」
「5つあるうちの一つです。お爺様は一枚残るなら渡してもよいとも言われています」
「大事なものだと思うんだけどなあ」

そう言いながらもマサムネはカバンにプレートをしまつ。

「では、私はこれで……」

そう言つてツラツは洞窟へと戻つて行った。

「大事なものをなぜ……」

「マサムネさん。ボートと動力準備できましたよ」

「カメ……」

「ん、そうか。よし。グレンタウンに向かおう」

「はい」

そしてマサムネ達はグレンタウンへ向かつた……

続く

第三九壇　おつかとせねと一年か（前書き）

感想ないと小説が止まるかもしません。
感想つていうのは燃料みたいなものです。

第三十九壱 おつかとほねと一年か

「見えてきたなあ」

「グレンタウン見えてきましたねえ～」

ボートがふたじまから出発して約一日。

動力はとまることなくグレンタウンへ向かっていた。

「お、足が着けるところまで来ましたよ」

「よし。おりよう」

そう言つて一人はグレンタウンに足をつけた。
同時に動力の活動が停止した。

「力……」

もはや動く気配がない。

おつかれさまでした。

【ポケモンセンターに泊まった次の日】

「ジムリーダーが用事で出かけていて明日まで帰らない？」

「ええ。少しどきりとの方に用があると先月から。帰ってくるのが
明日の今日に訪ねて來てくれた君たちは運がいいよ。明日のこれに
書かれた時間にまた來てくれ」

そう言つて時間が書かれた紙をジムの事務員が渡してくれた。

「はあ。じゃあ明日……」

そう言つてマサムネ達はジムから離れる。

「明日か……」の島に今の時期に暇をつぶせるとひなんてあるのかな」

「パンフレットが……化石研究所？」

「化石？ そう言えばおつきみやまで手に入れた化石が一つあったな」

「ああ、あの大金を手に入れたところですね」

「懐かしい話……そういうやハナダでなんか手に入れてたような……」

マサムネは何か思い出すとしているが思い出せない。

「あ、マサムネさん。研究所はポケモンセンターからすぐ近くいらっしゃいます。行きましょう!」

「ん、ああ」

ミズホに手をひかれマサムネは研究所へ向かう

(まあ、今思つ出せなくともいいかな……)

そしてマサムネは考えるのをやめた。

「これは珍しい化石をお持ちですねえ！」

「め、珍しいすか……」

「モ、モグ……」

研究員に化石を見せるとすぐリアクションをされたのでマサムネとシモンは少しひいてしまった。

ちなみにシモンは化石の発見者としてボールから出した。

「アール博士が喜ぶぞ、これは！」

「アール？」

「この研究所の所長だよ。いらっしゃに来てくれ

そう言つて研究員はマサムネの手をとり無理やり引きずり行つた。
シモンとハズホはその後を追いかけた。

「うう、この部屋の中だよ！」

「は、はあ……」

ガチャ

「博士えええええええ！ パターン青です！」

「青。青と言つたでアールか！」

「青ですよ博士えー！」

研究員と博士でよくわからないがすべく盛り上がりしている。

「なんなんですかねこの状況」

「知つてたら啞然とはしないよ」

「モオオグリュ」

「マサムネ達ですか！」の展開にはついていけない。

「では現品を見せてほしいのでアール」

「ええと。これです」

そしてマサムネは化石を出す。

「おおおおおおおおお！　はねのカセキでアール！　カントーで見つけたであるか？」

「おつきみやまで……」

「ほおおおお……おつと。叫んではかりもいられないでアール。これを少しあずからせてもらえないでアールか」

「え？」

突然預けてくれと言われてただ驚く。

「！」の復元装置を試してみたいのでアール！

「復元……と言つと化石をポケモンに？」

「その通りでアール！」

「え～と。シモン。どうする？」

「モグリュ」

紙をせじだしてきた。

そこには『いいよ、兄貴』と書いてある。

「発見者の許可も出たのでお願ひします」

「うむ。明日にでも来るとコロシ

「明日」「？」

「予定通りなら明日の晩には復元できるでアール」

そう言つてアール博士はマサムネの手から化石をとつ装置に化石をセットする。

「では。明日に出来るのをじに期待くださいなのでアール！」

そつ言つて部屋を出されてしまった。

「明日の暁……かあ……ジム戦の受付つていつぐりー？」

「えーと……10時くらいですね」

「暁つてどれくらいからが暁なんだか……」

「とりあえずジム戦を先にすると言つのがいいんぢやないでしきうか

「まあ、そうだな。10時は朝に分類されるかな」

そう言いながら一人はポケモンセンターへ向かつた。

【ポケモンセンター】

「おや？ 君たちはあの時の」

「たしか……えーと……」

「アサノブだよアサノブ」

セキチク近くで対決をしたアサノブであった。

「偶然だね。俺はここの出身でね。帰郷していたんだ」

「ああ、そうなんだ。へえ」

「なんかす」「へ興味なさそうだね

「ないね」

「……あ、そりゃう。俺たシンオウに行くことになつたんだ」

「シンオウ?」

「君も聞いているだろ? ポケモンリーグの延期を」

マサムネとミズホの表情は固まる。

「おや……まさかカントーリジョウのポケモンリーグが一年延期になるということを知らなかつたのかい?」

「し、知らんよ……俺そんなの知らんよおおおおおお!」

「俺たちがセキチクであつて一日後位に発表されたが……」

そのときはふたごじまで遭難をしていたためそんなことは知らない。

「シンオウとホウエンは変更なし。そしてホウエンはもうすぐ開催」と言つわけで開催の遅いシンオウに行くことにしたところとて、「それって、イッシュとかは……」

「きみはポケモンリーグについては詳しくないようだね。イッシュは開催の年が一年ずれてるのさ」

「つまりは今回はカントーリジョウの大会が同じ年に開かれるということか」

「しかも同じ月にね」

つまりは

毎年同じ月にカントーリジョウは同じ月に大会を開いており
それから一ヶ月後にホウエン。それから数ヶ月後にシンオウとなつ
ている。

イッシュは一年後だ。

その他の地方は遠いので情報が入ってきていない。

「と言うわけで。俺は明日にはシンオウへ行くのさ。ここに船が来る手はずになつていい」

「……俺のジム戦攻略の意味つて」

「いやパツチはちゃんと延期した分も有効だよ。明日バトルしても損はない」

「そ、そつか……しかし長い期間が開いてしまうな」

「他の地方にでも修行に行けばいいんじゃないかな。俺はすぐに戦いたいんからシンオウに行くんだがね」

そう言って笑いながらアサノブはマサムネ達に別れを告げ自分の家に帰つて行つた。

「一年……かあ……」

「つまりはマサムネさんと旅できる期間が増えたといつじですよ。いいことです」

「ははっ。そうかもね」

「モグリュ」

そして明日のジム戦に備えマサムネ達は宿泊し睡眠をとることとした。

続く

第三九壊　おつかとほねと一年か（後書き）

アール博士とかいつぶりに小説で使つたかな……
3年前くらいに凍結した小説以来かな。

と言つわけでそろそろ第一部が終わりに近づいてきた。
次回からは終盤でしょう。

終盤と言つても新キャラもそれほどでいでしょうし
序盤・中盤より話数は少ないと思いますがご了承ください。

第四十壱　せつめいつじゅういちやだめないじゆせんのだよ（前輪也）

感想募集中！

第四十壱 はつせり言ひあひだめな」とあるんだよ

【次の日】

「さあ、ジム戦ですよジム戦！」

「そうだねえ、ジム戦だねー」

マサムネはジムに向かつて歩いている。

「しかし、|田あつたこと|でビトガミが復活してよかつたですね
「ああ、よかつたね……」

一瞬ミズホが「ど」と言いかけたがマサムネは聞かなかつたことにした。

「さて、ジムに着いたか……」

「入りましょう」

そして一人はジムの中に入る。

「む。よく来たな……ダブルバトルの挑戦者か」

「あなたがジムリーダーの……っ」

「……またその反応か。まあいい。バトルを開始しよう」

カツラは何か残念そうな顔をしてバトルの準備を始めた。
そしてミズホとマサムネはカツラに聞こえないようこ小声で話し始めた。

「力、カツラなのに普通にハゲですよマサムネさん」
「い、言ひなよ……ふ、ふふくつ……」

そんなこんなで戦いの準備を始めた。

「いですよ、ウインディー！ ギヤロップ！」
「行くですよトガミ！」
「やつてここシモン！」

そしてフィールドに4体のポケモンがそろいつ。

「圧倒的にこちら有利じゃないですか？」
「タイプで戦いは決まらないぞ」
「試合開始！」

一人の会話を遮るように審判の声が響く。

「ウインディー！ ギヤロップ！ パターンズィス！」
「ウイイイ！」
「ギャロオオオオ！」

突然として一匹の動きが変わる。

動きが変わっただけで攻撃が当たらないわけでもない。

「モオオグ！」
「モグ？」
「カメ？」

「カメヌヌクス！」

シモンはトガミを土台にして飛ぶ。トガミはハイドロポンプを放つ。

「ギャロオオオ」

「モグフ！？」

ギャロップがとびはねる。

「ウイイイイ」

「カメクツ！？」

ハイドロポンプを放とつとしたときワインディは後ろにいた。
しんそくだ！

「ギャアアロ！」

「ティイー！」

一匹の攻撃がシモンとトガミを襲つ。

「モオ！？」

「クウス！？」

シモンは下に落ち、トガミは逆向きに倒れる。

「予想外の出来事が起きたな」

「そ、そんなに冷静にしていいんですか！？」

「……」

(以前のような現象が起ると思つたが)

「どうも起るようには見えない。

負ける状況になれば起きるのでと静観していたが
「のままではやばいであろう……」

（まあ、「のままではやばいだろうが……同じパターンが続いてくるはずはない……）

「シモン。－ＫＮだ！」

「モ、モグッ！？ モ、モグ……」

「ためらうな！」

「モ、モオオオグ」

シモンは転がってジタバタしているトガリを
小柄な体で持ち上げる。

「モオオオオオグ！」

「カ、カメエエエエエエエエ～！」

そして投げ飛ばした。

「ギャロオ！」

「ウイイイ」

そんなもの軽くよけられる……が

「カメカメカメカメ～！」

突如としてトガリは「つそくスピンし始める。

「ディー！？」

ワインデイは突然の事にトガミの攻撃を避けられない。
そしてその場に倒れる。

「ギャロー！」

トガミに向かいとつしんをするギャロップ。

「ローロー」

「モグウ！」

突如下からシモンが飛び出す。
あなをほる攻撃だ。

「ギャロオー？」

突如として現れたシモンにギャロップは対応できない。

「カメエクス」
「モグリュー！」

そしてワインデイは体勢を崩している。

「力、メエエエエー！」

先ほどとは逆にトガミがシモンを投げる。

「モオオオグリュ！」

シモンのきりさく攻撃！

「ティイイイイイイイ！」

スチャツ

「モグツ モグ……」

シモンの決め台詞とともにワインディングとギャロップは倒れ動きが止まる。

「ギャロップ、ワインディング戦闘不能！ 挑戦者の勝ちー！」

「クリムゾンパッチも手に入れたし。あとは研究所に行くだけか」「はいです」

二人はジムを後にして研究所へと向かう。

「どんなポケモンが復活してるんですかね。楽しみですね」「そうだな」

そしてマサムネ達は研究所へと向かった。

続く

第四十壞 はつきり言つちやだめな」ともあるんだよ（後編）

「この小説では
カツラの扱いが悪いように見えるが
そんなことはないですからね。」

第四一 壊　にじつ　なんて使い勝手のー（前書き）

感想と言つが今までの質問の答えも待つてます。

第四一 壊 こじつ！ なんて使い勝手の－

「遅いでアール！ とっくに復元はできているのでアール！」
「成功したんですか」

「御覧の通りでアール。この君のボールに入っているでアール」

そう言つてアール博士が差し出すボールを受け取る。

「おつと。ここでは出さないでほしいでアール。暴れられても困る
でアールからな」

「まあ、それもそつか……」

そう言つてマサムネはボールをなおす。

「博士。そろそろ出発ですよ」
「む。そうでアールか」
「出発？」
「シンオウに行くのでアール」
「少し用事がありましてね。あなた達が来るまで待っていたのです
よ」

そう言つて荷物を持つ助手とアール博士は研究所を後にした。
なお、助手の他にもお多くの研究者がいるので研究所にはまだたく
さん的人はある。

【ポケモンセンター】

「さて、新入りを出してみると……」

「やあやあ、君達。確かヤマブキに行きたかったらしいね」

「アサノブか。いきなりなんだ……」

ボールをあけようとしたら突然アサノブが話しかけてきた。

「いや、今日来てくれる船がねクチバの港にも一度寄ると云つんだ。君たちも乗つて行かないかい？」

「おっ。いいのか？ どうやって行こつかと思つていたんだ」

アサノブの言葉にマサムネは喜ぶ。

戦闘で動力も疲れているし一日は二三回だと感じるところになると想つていたからだ。

「いいんだ、いいんだ。俺の友達も別にいいと云つてくれていいよ

「そうか！ で、出発は？」

「今すぐだよ

「え？」

「さあ、行こう」

そう云つてアサノブはポケモンセンターの出口へ向かつた。

「荷物をとつてこなこと……」

「荷物はここに全部ありますよ

「ん？」

ミズホが既に部屋に置いてあつた荷物をすべて持つてきていた。

「私はこいつのをすぐに済ませるタイプですよ」

「手際がいいね……」

そしてマサムネ達は荷物を持ちポケモンセンターを後にした。

「おや。準備に少しさかること思つていたが。早かったね」

「マサムネさんには私がいますからね」

「おやおや、いい彼女がいるんだね。まあ年齢的には早い気もするけど」

そう言つてニヤニヤしながらアサノブはしおりを見ていた。

「さて、この船が俺の友達の船さ」

その船はでかい。
個人所有のものにしてはでかい。

「お前つて金持なのか?」

「ん? 一応グレンで一番大きな旅館の息子かな」

そう言つて船に乗り込むアサノブ。

「……ま、こいつ付き合つても必要よね

「そうですね」

そして一人も船に乗り込んだ。

続く

第四一 壊 じこつ！ なんて使い勝手のー（後書き）

ヘラクロス・ラッキー・そして化石より復元されたポケモン
これらは第一部では登場はない予定です。

キャラクター紹介（第一部版 終盤）

流れに乗る（事しか許されない）冒険者

マサムネ（15） CV：緑川光（仮） 出身：イッシュ

中盤から突如シリアスシーンが追加され始めたため
いろいろと悩むことが多くなってしまっている。
そしてミズホのマサムネ絶対上主義には何も言えない。
すこしSに目覚めているかもしれない。

相棒

シモン（モグリュー） CV：柿原徹也

未だにモグリューである。

マサムネの手持ちのエースと言つか

シモン以外に中盤で戦闘した手持ちがない。

突然変異

シャドウ（ギャラードス） CV：遊佐浩一（友人の直感で）

中盤での出番はヘラクロス捕獲時のみ。
名前はたびたび登場していた。

ヘラクロス・サユキ

たぶんもつ第一部に出番はない。

マサムネ絶対主義

ミズホ（一） CV：鷹島 法子 出身：カントー

身長144cm B85(H) W48 H80

もはや何も言うことはないマサムネ絶対主義
マサムネに対しても だがマサムネ以外にはSである。
親子愛と血のものをかなり毛嫌いしている。

相棒

トガミ（カメール） CV：阿部 敦

使い勝手のいいポケモンである。

笑い上戸

リュボ（ゴースト） CV：玄田哲章

勝手にボールから出で勝手にラッキーを捕獲した。
勢いで捕獲することにしたため出番が少ない。

不思議な奴

カミコ（ピカチュウ） CV：佐藤 利奈

序盤は活躍していたが中盤から極端に出番がなくなった。

実は金持ち？

アサノブ（13） CV：ヤスヒロ 出身：カントー

実にいい奴であり。グレン一の宿泊施設の息子。
ちなみにその宿泊施設は火山で土地が沈没しそうとも
水中に浮き稼働可能らしい。

第四|壊 結論はそれでいいかな（前書き）

感想はお待ちしておりますよ。

第四| 壊 結論はそれでいいかな

「と言つわけでクチバに到着だよ」

「あつとこう間だつたな……」

クチバの港に足をつけたマサムネ達。

「いや、ありがとなアサノブ。助かつたぜ」「いやいや、ついでだつたんだ。構わないよ」

マサムネのお礼にはずがしがるアサノブ。

初めての出会いは悪い印象だつたが今となつては全く真逆の好印象である。

「」の恩はいつか返すぜ
「ははっ。こやいや俺は多々の仲介役さ」「ならこの船の持ち主さんに恩を返さなきやか」「持ち主と言つてもこの船には乗つてないけどね」「そう言えば運転手さんだけだつたな……」「彼女はあまりシンオウから出でこようとしないから……」

そう言つて少し明後日の方角を見るアサノブ。

「なんだ。アサノブの好きな女か」「それは違うよ……実際の持ち主は彼女の母親……あ「なるほど」「あ～～～……もう一ほら、彼女が荷物を全部降ろして向こうで待つてるよ……」

そう言いながらアサノブはマサムネの背中を押す。

そしてマサムネも何も言わずミズホのいる方へ歩き出した。

「やつぱり一歳でも子供は子供か

15歳と言ひ子供とも大人ともいえない年齢のマサムネはそう呟いた。

「マサムネをあ～ん。早く行きましょうー」「はいはい」

一人は後ろで出発する船を見ながらヤマブキへのゲートへ向かう。

「お、工事が終わってるなあ」

「結構な期間工事してましたがヤマブキの人たちばかりやつて生活してたんでしょう?」

「空輸じゃないかな。さて、早く行こうか

そう言ってゲートに入る一人。

「このゲートは通るには申請カードが

「はここれ

「あ、確認しました。どうぞ」

そう言って一人はゲートの中に入る。

【ヤマブキシティ】

「それで、ジムかなんですか？」マサムネさんのお父さんの所に行
くんですか？

「家にも帰らざりと泊まり込みで開発をしてることであります
かわからんしなあ～」

「ならとつあえずジムにでも行きましょ」

「ジムか」

それもいーな、と思いつつあえずはポケモンセンターに向かった……

続く

第四二 壊 結論はそれでいいかな（後書き）

主人公以外のキャラが幸せにならないのって大嫌いです。なのでこの小説は名前ありのオリキャラはほぼ確実にカップルです。あくまでほぼです。

第四三壱・1 ジョウトウナ話（前書き）

感想はこつでもお待ち中です。

第四三壞・1 ジョウウトうな話

「ジムリーダーがいない?」

「ええ、だいぶ前にジョウトに行くと行つて留守なんです」

ヤマブキジムに来たマサムネ達だが、ジムリーダーのナツメは不在。ジョウトに出かけ帰つてこないといつ。

「となるとここは当分後回しか……」

「あ、君そのバッヂケースを見るところトキワジムも攻略していいね。トキワも今はジムリーダーは不在だよ」

「え?」

「どうやら代理の手続きもしていないようでね。手続きがないと代理も後任もできないからね」

ちなみにキイガはすでに後任との交代の手続きはしてあつた。
そのため少し早めることになつたのである。

「そんな……」

「まあ、大会も一年延期になつたわけだしそもそも急ぐ」とはないよ

そう言つとヤマブキジムの門下生はジムの中へと帰つて行つた。

「なんかすることが突然無くなっちゃいましたね……」

「しかしジョウトか……」

「どうしましたか?」

「ん? いや……」

ジョウトに行った。

その言葉だけがマサムネの心に残った。

「じゃあ、行くかな。ポケアイテム株式会社に
「シルフカンパニーに比べたら小さな会社ですよね」
「しかし有名度は違う。モンスター・ボール類の開発ではシルフよりも勝る」

と語つことと並べたの胸の中で思つておくれ」とひと言ださ。

各地方に支店もある。

本社はここである。

「そして開発部の一番偉いのが親父ってわけだ

「すごいですねえ！」

「とにかく行つては見るが余るかは別だな……」

そう言いながらマサムネ達はポケアイテム株式会社へと向かった。

「え？ すぐこ来る？」

「ロウイチさんは有詔をとりひき過ぎて困るよ。やること終わるまで辞めないんだ」

「ちゅうど息子さんも来ててくれて助かるよ。これで無理やつ休まさる」

「あらじがでやる」

(あの親父は……ね袋と俺をほつておこして……俺たちをイッシュから呼び寄せた理由はそれとは……)

まあ、すぐに帰れるといふに家があつてほしかったからといつて

である。

ちなみに、アラタコノマサムネの父とコウイチの部下たちが去った。

「と言ひわざで。もつじじしたらへるか」「待つてくださいねえ～」

「しかし……によく……か」「あの。ですか？　あの事を聞くんですね……」「ん？」「アサノブさんとの戦いとそして過去の……」「ああ、あれな……」

本題は謎の力の事だ。

(しかし、あの事も聞くのか？　確實になつた……)

そつぽうとマサムネの心は少し悩み始めていた。

中編に続く

第四三壞・1 ジョウトうな話（後書き）

そろそろ第一部完結。

第四二二壱・2 答えなんか短いなあやよかつたんだ……（前書き）

感想は答えますよ答えてられるものは

第四三壊・2 答えなんか知らなきゃよかつたんだ……

「おひおひ。マサムネ……なんかしらねえが俺に会こに来たのか」

マサムネの父親の「ウイチがマサムネ達の前に現れた。

「へ。とつあえず俺用の個室がある。そこで話そう

そう言つてコウイチはマサムネ達を個室に連れていく。

「それで? なんだ話つてのは

「それは、これの事を」

そう言つてマサムネはキー・ホルダーを見せる。

「なんだ。俺はてつきじミズホちゃんとの交際発表かと思ったがな
「交際はしますですよー?」

「ミズホちゃん静かに。今、それは重要な事じゃない

「重要で……いえ、すいません」

ミズホは黙る。

「そのキー・ホルダーは昔から一族に伝わるものだ。穴があつたから紐を通しただけだ

「一族?」

「そう、俺たちは螺旋族と言つ一族だ……

「螺旋族……それは一体……」

「んなもん詳しく述べしらねえよ。もう廃れちまって俺たち以外は血をひくものもいねえって話だ。井、その話をしてくれた俺の親もいねえしな」

それを聞いて少し考えるマサムネ。

これだと結局力の事はよくわからない。

「ま、お前が旅に出るからそれを送つたってわけだ」「そう……所で親父も旅に出てたんだよな」「あ？ あたりまえじゃねえか。子供の頃は旅しまくりでなあ。というか30代の頃も旅をしていてだな」「それでこのキー ホルダーも持つて行つて？」
「ああ、親父に持たされたからな」「その時に……何か不思議な事が起こらなかつたか？」

そう聞くマサムネの顔は真剣だ。

「いや、別に何もなかつたぜ」「そうか……」

なぜ自分だけ……なぜ自分だけ……
いや、一つだけ考えがある。
しかしそれはいや……

「親父さ。お袋とは結構年はなれてるよね」「ん、ああ。今時そつ言つのもよくあるだろ」「今時じゃない時に結婚してるよな親父」「なんだあ。何がききてえつてんだ？」「じゃあさ、親父さ」

そして聞く一言

「カナつて名前のお袋にそつくりな女人の人知らない?」

「! ? も、おめえ……それをどこで……」

その反応は答えた。

「つまりは親父……お袋は……」

それから出る答えは。

「親父の娘なんだろ?」

次回に続く……

第四二二壊・2 答えなんか知らなきゃよかつたんだ……（後書き）

過去のシオントウンの話すでにわかつてていた方もいると思いますが
いつまでも」となんです。

第四四壇 愛は絶対！ 信じた道を突き進むー（前書き）

感想お待ちしております！

第四四壱 愛は絶対！ 信じた道を突き進む！

「なんでそこまで知つてゐのかはしらねえがよ……その通りだ……
だがあいはは知らねえ……」

過去の話となる。

マサムネの父であるコウイチはイッシュに住むただの少年だった。

そして旅に出た。

そんな時自分についてきたのがカナだ。

幼馴染であり仲の良かつた二人はずつと一緒だった。

そして旅を終え二人は故郷に帰った。

そして結ばれたのだが……カナの親が突然カントーに行くことになつた。

旅をしていたのだから別にカナはここに残つてもいいだろつと言つたが

カナの親はそれを無視しカントーに連れて行つた。

無論コウイチも追おうとしたが親に止められてしまつた。

そもそもカントーに行くにもお金がない。

旅をしていた時はトレーナーのためポケモン教会からお金が出ていた。

だから旅をできていたのだ。

しかしこの時すでにマサムネ20歳。

協会からお金が出ない年齢となつっていた。

それから十数年がたつたのち。

コウイチは発明によりお金がたまつた。

コウイチの発想はかなりの人に認められた。

そしてその金を元にカントーへと旅たつた。

そしてカントーを旅するもカナはいなかつた……だか

そこで出会つたのがヨーコである。

カナに似ていたこともありコウイチはひかれ始めた。

そして一緒に旅することになつた。

どうやらヨーコの親は病氣で死んだらしい。

写真などは実家に置いてきてしまつていた。

ドジだなと笑い一緒に旅をする一人はそのうち恋仲へと発展した。

年が離れていることを始めは気にしていたがそれも知らぬ間に流れ
た。

その後とある事件が起つた。

ヨーコの実家の祖父が危篤状態だという一報が入つた。

そして二人はシオンタウンへ向かう。

そしてそこで見たものはカナの父親であつた。

そこで自分はヨーコはカナの娘なのかと思った。

つまりは自分以外の男と……しかし……

コウイチは自分の年齢とヨーコの年齢を考える。

そこで一つの結論が出た……

そしてそれから数日後にカナの祖父は死んだ。

そしてヨーコはカナの娘だつた。

そしてヨーコは父親を知らないらしい。

カナはヨーロに父親は行方不明と伝えたらしい。

「これは自分も答えがわかる。」

「そう。これは……」

しかしその時…… ロウイチに悪魔のせやきが聞こえる

「そう。認知していいことだ。」

認知していなければヨーロは娘として登録されていなし。

そう。結婚しても法律上問題ないし、それを駄目だといつものまゝ
「うの世にはいない。」

そして……

「今に至るってことが……」

「そうだ…… しかしお前は……」

「いや、いいんだよ親父。一人の愛に間違いはなかった

「マサムネさん……」

「俺は俺だ。親父も悪魔のせやきだろ？ 何だらうと決め手は變
なんだ！」

マサムネは叫ぶ。

「親父は違っちゃいねえ！ 結論はそれだ！」

そう言つてマサムネは荷物を持ち部屋を後にしてしまう。

「俺はオーレ地方に行く！」

一つの疑問は解決した。

そしてもう一つの疑問である力の秘密を知る人がいると言つオーレ地方へ。

「行くぞミズホ！」

「よ、呼び捨て……うれしいです！」

そう言つてミズホもその後をつけた。

「マサムネ」

そう言つてコウイチがマサムネにあるものを投げる。

パシッ

「これは？」

「オーレに行つたら開け。お前はお前の信じる道を進め

そういう言われたマサムネは笑顔になつた。
そしてマサムネはポケアイテム会社を後にした。

「ミズホ。かなり遠いところになるけどいいんだな
「もちろんですとも！ マサムネさんの行く所に私あります！」

そつと二人はクチバヘと向かう。
新たなる旅へ向かうために……

第一部 完！！

第四四壱 愛は絶対！ 信じた道を突き進む！（後書き）

と言つわけで第一部終わりました。
長かったです。

と言つわけで次回から第一部がスタートです。
お楽しみください。

第1策　ただ目的のために（前書き）

第一部 ホウエン地方の物語の始まり！

第1策　ただ目的のために

とある少年が幼稚園に通っていた。彼は周りからは避けられていた。

『普通ではない』と言われた。

子供の親たちは彼から自分の子供を引き離した。

彼は兄弟もない。

彼を助けるはずの親は父が死んで働き詰めのため助けることができなかつた。

彼は孤独だった……そして彼はみんなに愛される英雄になりたいと思つた。

誰もが憧れる英雄へと……

【ミシロタウン】

夜空の下。

空を見ながら決意表明する少年がいた。

「私は英雄になるのだ！　そして人々の頼られるものへとなる」

少年の名前はトウガ。

年齢は11歳。

「しかし、昨年旅に出られなかつたのは痛い」

彼は昨年『謎の事故』により旅に出ることができなかつたのだ。

「今まま行くと私は10歳で旅に出れなかつた臆病者と言つ」と

になつてしまひ……」

彼が目指す英雄のためにはそういう風評を持たれるのも嫌だつた。

「ああ、使えるたびの中のでもいればいいのだが」

そんな時流れ星が見えた。

「流れ星か…… 非科学的だが今は猫の手も借りたいところだ。神頬みもいいだろ?」

そして彼は流れ星に願う。

「下僕がほしい、下僕がほしい、下僕がほしい！」

そんな時流れ星がこちらに落ちてくるように感じた。

「危険ではないか！」
星が「あら」と、む?

トウガは逃げようとするが避けられない。

「アーティストのおおおおー?」

「う、うつむ……なんだ？」

「わざわざ、うるさいだ……」

トウガの体の上には小さな女の子が一人いたのだ。

「……なるほど。下僕か」

そう言ってトウガは女の子一人を抱ぎ家に帰ることにした。

「願つてみるもんだな」

トウガはそう呟いた。

その後トウガは母親に倒れていた女の子を拾ったと言い
親が見つかるまで家で暮らしてもらうことになった。
トウガはそのうちに下僕として育てようと思った。
そしてその女の子たちが目覚めた。

「う……ここは？」

「い、いて、どこだここ？」

「ここは私の家だ」

母親は内職をしているため対応はトウガ一人だ。

「あなたの家ですか」

「そうだ。とこりでお前たちの名前は、出身地は、年齢は？」

「そんないつぺんに聞かれてもなあ」

そう言って女の子たちは言葉を止めると黙る。

「あれ？ あたしたちの名前つて……」
「私の名前……思い出せません……」
「なに？」

二人は自分たちの名前を思い出せないという。

「「出身地……も」」
「覚えていないか……」
「あ、でも年齢は覚えています。6歳ですよ」
「あたしも6歳」

こいつ言つう子供は進んでいるものだ。

「どうも6歳には見えんのだが……まあいい。母さんが搜索願いが
出でないか調べてくれるらしい」

そう言つてトウガは一人に用意された寝床を教えて自分の部屋に帰
つた。

それから数日がたつたが二人の搜索願いは一切なかつた。
そしてトウガは一人が自分のために授けられた下僕だと確信してしまつた。

その後二人はトウガにより名前を付けられた。

泣き虫でおとなしい方の子をナギサ。
男勝りだが隠れの方の子をヤヨイ。

そう名付けられ、さらにはトウガの下僕とすべく教育が始まった。

そしてそれから4年の月日が流れた……

【四年後 ミシロタウン出口】

「くくく。いよいよ私の英雄へとなるべき旅立ちの日が来たのだー！」

「さすがでお兄様」

「兄貴は本気で英雄目指す気なのな……」

一人は養子としてトウガの家族になつたため妹となつていた。

「そうだ。私は英雄となり人々の象徴となるー！」

「流石の高い目標です！」

「ま、兄貴にならなれるかもな」

教育の成果も出ていたようだ。

「ふふふ……では行くぞー！」

「ベイー！」

トウガの後ろを歩くのはタツベイのレジ。

「待つてくださいよお兄様～」「

「チャモ～」

ナギサの後ろに続くのはアチャモのレン。

「たつく……待てよ兄貴～」「

「キヤモ」

ヤヨイの後ろにはキモツのクロウ。

かくして三人と二匹の旅が始まる。

To Be Continued

第1策　ただ目的のために（後書き）

なぜホウエン地方か。
いぜんとつた質問の結果です。

キャラクター紹介（第一部版 序盤）

主人公

トウガ（15）妄想CV：福山潤 出身：ホウエン

英雄になるということに固執している。

それは過去に人から避けられたということが原因でありますから頼られる象徴となるために英雄を目指している。過去の出来事から正義や悪と言つ言葉が嫌いである。義妹達には下僕として扱つてはいるが自分を慕つてくれているため、この世で一番大事な存在となつていて

見た目は黒髪の短髪でサングラスをしている。

身長は平均より少し上程度。

顔を見たら10人中8人は振り返る男前。サングラスはそれを隠すためにしている。

相棒

レジ（タツベイ）妄想CV：中村悠一

凶暴性は全くなく冷静沈着な性格。

トウガの言うことを確實にする。

なお達成できない場合は自分自身に罰を下される。

相方

ミコト（ラルトス） 妄想CV：半場 友恵

純粋な心の持ち主であるトウガにひかれ仲間になった。
結構なレベルではあるが進化をすることなく今に至っている。
体に精神がひかれているらしい。

義理の妹？

ナギサ（10） 妄想CV：中原 麻衣 出身：不明

身長145cm B70(C) W45 H81

トウガが願った時空から落ちてきた女の子の一人。
礼儀正しい性格で少し泣きやすい性格。
トウガの教育により少しはましになつてている。
トウガの事を大好きな兄として見ており
トウガの夢である英雄になることの手助けならば
なんでもする。

見た目は黒髪ロングでメガネをしている。

相棒

レン（アチャモ） 妄想CV：三瓶 由布子

元気いっぱいだが別に猪突猛進であるわけではない。

ナギサのことをにはむちゃんと従う。

義理の妹？

ヤヨイ（10）妄想CV：小清水 亜美 出身：不明

身長145cm B72(C) W49 H70

トウガが願つた時空から落ちてきた女の子の一人。
少し男勝りなところがあるがトウガの怒つている時の命令には逆ら
えない。

Mの素質はトウガの教育の影響により生まれたものである。
ヤヨイもナギサと同じくトウガの事を大事な兄として見ており
同じようにトウガを英雄にするためなら何でもする。

見た目は黒髪でサイドボニー

相棒

クロウ（キモリ） 妄想CV：うえだゆうじ

冷静沈着を装つてはいるが実は熱血漢。

第2策 思いの思ひがけ（前書き）

感想お待ちしております。

第2策 思いの思つまみ

ミシロタウンを出発しコトキタウンを回す御一行。

「……弱いな

レジが近寄つてくるケムツソにジグザグマをヒビヒビ倒している。

「お兄様の指示が完璧ですから」

「まあ、それもあんただろうけど。レジも強いつてもあるんじゃない？」

「ふ、私の頼れる相棒が弱いわけなかろつ」

『ふつ』と笑いながらウガはコトキタウンに向けて歩く。

「あつ、待てよ兄貴～」

「待つてくださいお兄様～」

【コトキタウン】

「おや？ トウガ君じゃないか
「オダマキ博士か

フィールドワークに出かけていてミシロタウンに帰ろうとしていた
オダマキ博士がいた。

「こなんにちは

「どうも」

後ろにはオダマキ博士の助手になりにカントーから来たという二人がいる。

「いやあ、この二人がいてくれるおかげでいろいろ楽になつてね。

少し遠出をしてしまつたよ」

「以前よりまして酷くなつてしまつたか」

やれやれといった顔でオダマキ博士を見るトウガ。

「しかし女子の人たちは仲がいいですね」

「私たちは夫婦なのよ」

ナギサの言葉に助手の一人が答える。

「へえ~」

そう言いながらトウガの方をナギサは見ている。

トウガはその視線の意味をわかってはいるが何も言わない。

「それで、お一人お子さんはいなんですか?」

すると助手二人は顔が悪くなり黙る。

「なぜ黙っているのだ彼らは」

「いや、ちょっとといいかな」

オダマキ博士がトウガを連れて少し離れたところでしゃべと話す。

「彼らね、子供さんと仲が良くないらしいんだよ。どうも子供さんと仲良くする方法がわからないらしくてね」

「なに？」

「そもそも彼らの子供さんは彼の実家に預けられていてね、どうも子供がいると研究がはからないからと言つて預けたらしい」

「それは確實に親子間の産みができるのではないのですか？」

「そう思つんだけどね……彼らが彼らで解決するのを待つてているんだが……」

オダマキ博士も一人娘がいるので助手一人には子どもと仲良くなつてほしいと思つてゐるらしい。

「まあ。そのためには研究と言つもの捨てねばならぬのでしょうが」

「そうでもないけど思つけどねえ。彼の父親のあの人は一人の娘さんとはうまくいっているようだし」

「ふむ？」

（それはつまり父親が研究者と言つとか。しかしこの親……）

トウガは自分の母親と比べた。

どうもこの夫婦は自分の子供の事などどうでもいいらしい。自分たちの研究が優先と言つたところのようだ。

（まつたくの肩だな。母さんと比べるのも失礼なレベルだ）

トウガはあの助手夫婦の事を肩と認定したようだ。

(まつたく……ぐだらない……)

(お兄様……どうもあのご夫婦が気に入らない様子)

(兄貴はああいうの大嫌いだからなー)

「では、博士。私は失礼する」

「む、そうか。君にはあの関係は気持ちよく思えなかつたか」

「私の過去は知つてゐるでしょ?」

「あの時は私も忙しく助けられずに……」

「いいんですよ。博士は博士なりに助けてくれましたから」

そう言つてトウガはコトキタウンのポケモンセンターへ向かつた。

「……」
「……」
「……」
「……」

トウガはまさに不機嫌ですと言つ顔をしながらポケモンセンターの個室にいる。

「あのお兄様?」

「なんだ」

「お兄様には私がいますよ」

「そうね?。あたしもいるよ」

そう言つてトウガの両脇に座る一人。

「それも、そうだな……私も敏感すぎるのか知れんな……」

そう言ってトウガは少し笑つた。

続く

第2策 思いの思つままに（後書き）

もはや何も言つことはないですが
あの夫婦は子供付き合いが悪いです。
結果なんて見えていたようなものです。

第3策 考えの考へるまま

トウカシティへと向かうトウガ一行。

「少し離れてはくれないか?」

「離れたら寂しくなりませんか?」

「寂しくなる時もないとは言わないが、常時これでは困る」

ナギサはトウガにべつたりである。

ヤヨイはそれをうりやましそうに見ている。

「とにかく離れてくれないか。歩きにくい」

セツコはひらひらとナギサを無理やりはがす。

「やうですか。寂しくなくてよかったです……」

「どうもナギサがさみしいようだ。

(やれやれ、やはり10歳は10歳だ……)

トウガはこれから旅が少し不安になった。

【トウカシティ】

「シティとタウンの境界って何なんでしょうね」

「私に聞かれても困るがな。そんなもの目的のためには必要のない

知識だ」

そう言ってトウガはポケモンセンターへと向かつた。

【ポケモンセンター・個室C】

「しかしまあよくこんな部屋に泊まれるお金がありますね」「まあ、すべてはあいつの資金提供のおかげだがな」「ああ、確かジョウトの」

（そう。奴とは事故の後に病院で会つてから何か感じるものがあつた……それからというものの意氣投合しかれこれ通信でしか話をしていないが5年の付き合いだ……しかし少し前旅に出でから連絡はない……奴なら大丈夫だとは思うが……）

トウガは悩んだが悩むだけ無駄と判断した。

「しかし奴の発明品は役にたつた。母さんの仕事の負担が3分の1になり目的への資金もたまつた」

「ふふふ。そうですね」

三人は少し笑顔になる。

「でもさ、された相手の命の事を考えないのってどうなんだ?」

「ふふふ……そんなものばれなければいい。そんなことをする人間などいないのだからな……事故として見られるだけだ」

そう言ってトウガは荷物の中にあるものを見る。

「まあ、使う」とのないのが一番いいのかもしれぬがな」

「ふふふ。悪と見られているものを倒せば倒したものは正義と言つやつですね」

「下らんがな」

（正義だの悪だの。そんなものはそれぞれがする」との理由に納得するためだけの言葉だ）

正義の反対は正義。

それはそうだ。

そして悪の反対は悪。

それも正しいといつゝことになる。

そして英雄はそれとは違うものだ

英雄とは象徴だ、人々の視線をすべて一つに集める。

英雄は悪でも正義でもない。

「つまりはどうちうでもあると言つゝ」と……

「まあ、それはそれとしてよ、兄貴」

話の腰を折つてヤヨイが話しかけてきた。

「今からが“こと”ころだったのだが……なんだ」

「こここのジムの事なんだけどよ」

そう言いながらヤヨイはパンフレットをトウガに見せる。

「そろそろ戻るつていう爺さんなんだけどよ」

「ご老人か。で、それがどうした」

「ダブルバトルしか受けてくれねえらしいんだわ」

「そりゃ。しかしルールは知っているだろ？」「

トウガがそう言ひとナギサがルールブックを取り出した。

「今回の大会はカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・イッシ
ュの5地域のチャンピョンを決める大会」

「そして参加はシングルバトルでダブルバトルは4人一組でないと
ならない。でしたね」

「まあそうだ。4人目はのちに来てもらえる話になつてている」

そう言つてトウガは立ち上がる。

「メンバー登録さえしていれば一人で戦い勝つても二人目もバッチ
がもらえる」

「あ、そうだつたつけ？ あたしそこらの事はすっかり忘れてたよ
『ヤヨイは抜けてるところは抜けてますねえ』」

ナギサがヤヨイを見ながらくすくすと笑う。

「はいはい。あたしは頭がよくないですよ……」

そう言つて個室にあるペットに潜るヤヨイ。

「不貞寝ですか。なら私はお兄様と寝ちゃいますよ」

「私はまだ眠くないのだが」

「いいじゃないですかあ～」

「しかしながら、お前だけと寝ると次の日はヤヨイが不機嫌なのが…

「それはそれで気持ちいいっていいますかね。なんともいえません

！」

ナギサは凄く笑顔だ。

「 そりか……」

そして結局ナギサと寝ることになった。

続く

第3策 考えの考えるままに（後書き）

後半が少しおかしくなってしまったた……
いろいろあつたためですごめんなさい。
なんかもつと物語の後半で書こうとしたことを書いてしまった気が
するが……

あと、このルールですがもちろんオリジナル設定。
実はカントーの方にはジムリーダーにしか伝わっていない。
キイガが一度マサムネ達に説明しようとしていたが
聞かないでそのまま進んでいるのでカントーメンバーはこの話を知
らない。

第4策 - 1 戦いの戦い

「ジムリーダーが不在？」

「ええ、明日には帰つてくると思つんですけど……」

トウカジムを訪ねたがジムリーダーは不在のようだ。

「残念な話ですねえ」

「また一日滞在しなきゃだなあ～」

やつ面つてヤヨイはトウガの肩に顔を近づけながら囁く。

「で、どうやって時間をつぶしますか？」

「ふむ……ここはそれほど人がいる町でもない……」

トウガが悩んでいる。

そんな時。

「てめえなめてんのかあ！」

「む？ なんだ？」

トウガ達の前方で何か騒ぎ事が起つていた。

「お前こんな弱さでジムリーダーに挑戦する気かあ？」

「うう……別にいいじゃないか！」

「よくねえんだよお～！」

一人の少年を一人の少年がいじめている。
いじめている少年の周りには取り巻きがいる。

「なんだ、弱い者いじめか」

「大した騒ぎでもなさそうですね」

「つまらんな。解決しても何の得にもなる」

やれやれという顔でポケモンセンターに戻りついた
その時である。

「ああん？ 聞こえたぞてめえ」

「面倒な話だ……」

トウガは顔をしかめる。

「てめえ、よそのポケモントレーナーだなあ？」

「だとすればどうする」

トウガはやれやれといった感じだ。

「ジムリーダーに挑戦する気だなあ？」

「だとすればどうする」

トウガは少し笑つた。

「同じことばっかり言いやがつてよおー なめてんのかあ？」

「ふ。わかっていることを言つ必要はないな。ナギサ、ヤヨイ。行
くぞ」

やつとトウガはその場を後にしよつとした。

「まてよおー 僕たちと戦いやがれ！」

「ほう。3対3の変則バトルと言つてしか？」

「そのとおりだあ！」

「ふむ。ナギサ、ヤヨイ。やるぞ」

そういつてトウガはいじめていた奴らと戦つこととした。

「ちょっと兄貴。なんでこんな奴らと……」

「いい練習合だ。私たちのな」

「なるほど。流石はお兄様」

「ふふ。井の中の蛙大海を知らずといつものだ」

そして戦いが始まる……

後半に続く

第4策 - 2 井戸の蛙（前書き）

感想募集。

第4策 - 2 井戸の蛙

「いくぜー！」

3人組は全員がジグザグマを出してきた。

「全員同じか。チームワークが優れているのかいないのか……」「でもこの街でいいところがこれだとジムも知れていますよ」「引退寸前の爺さんだもんな」
「お前達。そういうことを言つとこの街のものから嫌われるぞ……」

どうやらもう一度始動しなおさなければいけないと
やれやれといった表情をトウガはしている。

「では、行って来い、レジ！」
「遊んであげなさい、レン！」
「やつてこいや！ クロウ！」

ポシュウン！

「ベイ」
「チャモ！」
「キヤモ」

そして3対3のバトルの準備が整う。

「へつ。珍しいポケモンでもつええとは限らねえんだよオー！」
「同じポケモンでもチームワークがいいかはわからんがな……」

そして戦いが始まる。

「囮んで一匹ずつつぶしてやれエー！」

ジグザグマはレジを囮む。

「馬鹿だね。レジを囮むなんて」

「ふふ。レンとクロウの出番はありませんね」

「そうかもしけんな。レジ！」

不敵に笑う一人。

そして叫ぶトウガ。

「ベイ……」

「ジグザー！」

「ベエエエイ！」

「ジグツ！？」

レジに突撃していった三匹が

レジから発せられる

りゅうのはどうにより跳ね飛び倒れる。

「なんだとオ！？」

「私の相棒は凶暴だ。ただの集まりには勝てぬよ

「まだ終わってねエー！」

「グザアー！」

倒れていたうちの一匹のジグザグマがレジに襲いかかる。

「グザツ！？」

「キャアモ」

突然現れたクロウのおいつちによりそのジグザグマも倒れる。

「グザグザー！」
「ジグザグー！」

他に倒れていた二匹が起き上がりたいあたりをしかける。

「ほう。体力だけはあつたようだ」
「でもあんまり意味ないですよね」

その言葉通りだった。

「キヤアモ」
「グ、グサツ！」
「タツベツ！」
「ジグツ！？」

レンのつじきりと、レジのずつきにより

残りのジグザグマも戦闘不能となつた。

「これで弱い者いじめなどやめるのだな。身をもつて思い知つただ
らう」

「弱い者をいじめるのは屑のやることですよ」「そゆこと。そしてそう言うかわいそうな子は兄貴が助けてくれる
つてことね」

三人は一コ一コしながらその場を去つて行つた。

「かつこいいなあの人！」

「弱い者いじめを見逃せないなんてす”」！」

ざわざわとちじ馬達が騒ぎ出す。

それはまるで漫画やアニメのヒーローを見たよつた感じだ。

「ちくしょうか……」

「お、親分……」

「ま、まぐれですよ……」

「まぐれだア？ んなわけあるかよオー！」

彼は負けたのは初めてだ。

初めての敗北を思い知った。

「ちくしょオ！ 僕は……僕は、僕はアー！」

「お、親分？」

「俺は強くなくちゃいけねえんだよオー！」

彼の叫びは子分たち以外はだれも聞いていなかつた。
そしてやじ馬がヒーローとあがめるトウガ達は
彼を自分たちの目的の道具として使つただけであつた……

続く

第5策 強いのをもつ（前書き）

感想は募集している。

第5策 強いのきもち

「しかし、つまらぬものだつたな……」「へつへへ。あたしたちに勝てると踏んだ大いつらがおかしいのさ」「その通りですね」

三人組は近くの草むらに来ていた。
いいポケモンがいたら捕獲するためだ。

「しかしこの近くに珍しいポケモンはいないようだな」「やつぱりそうそういないんだよ」「ですね」

目的にあつたポケモンはいないようだ。

「もう少し良く……」「お前ら……」「む?」「よくも親分をあんな目にあわせてくれたな!」「何も話さなくなつちまつたのはお前らのせいだ!」

先程の三人組の子分一人がやつてきた。

「頭が落ち込んでそれへのお礼……と言ひことか」「くだらないです」「くだらないねえ」「んだとてめえええ!」

三人が子分たちを馬鹿にすると子分の一人が殴りかかってきた。

「ポケモンバトルで勝てないとわかると力づくか。弱いな」「んだとお！」

ドガツ

「んがつ！」

「女のあたしたちは弱いとも思つた？」

ヤヨイが子分の一人を回し蹴りで倒す。

ビリッショ

「かよわくても強いんですよ」

腕装着型スタンガンでトウガが手をつかんでいた奴を氣絶させる。

「違ひのわからない奴らだ……」

『面白い人達……』

「む？」

どこからか声がするが誰もいない。

「お前たちではないな……」

「え、何がですか？」

「なんかあつたのか？」

「聞こえていなかつたということはテレパシーの一種か

『そう言つことになるかもね……』

再び頭に声が聞こえる。

「ビーブルだ。ビーブル」

《ヒーヒー》

「兄貴！　頭の上…」

「上？　む？…」

頭の上には一匹のポケモンがいた。

《ふふ。私が声の正体。ラルトスよ》

そここいたのはさきもちポケモンのラルトスだった。

続く

第5策 強いのきもち（後書き）

この頃他の人が書いた小説を読む時間が増え
自分の小説を書く時間が短くなつてきた。

やばいな、昔のようになつてしまひ……

第6策 思いの如前（前書き）

感想はいつでも待つていろ。

第6策 思いの名前

【ポケモンセンター個室・N】

「で、何なんだお前は」

『何なんだとは失礼な。私はラルトスよ』

「それは種族名ではないのか？」

『だって名前はないもの』

トウガの頭の上には未だにラルトスが乗っている。

「兄貴～会話してる感じだけどあたしらには何も聞こえないよ～」

「お兄様だけが会話できる……素晴らしいじゃありませんか！」

「どうもほか一人にはラルトスの声が聞こえていない。」

「なぜ私にだけお前の声が……」

『ふふ。あなたは純粋よ』

「純粋？」

『そう……だからこそ面白い……』

「面白い？ 私の考えていることは面白いとは思えんがな」

『純粋よ。きっとあなたといれば私は進化できる』

「一緒にいたいというと私に何か利点はあるのか？」

『私これでも強いわよ』

ラルトスは腕をあげながらトウガの頭の上でジタバタしている。

「ならこのボールに入るがいい」

『ええ、よろしくねご主人』

そう言ってモンスター・ボールの中にラルトスは入って行った。

「と言うわけで新たな手駒だ」

「どういう流れかはわかりませんが新入りさんですね」「使いもんになるといいねえ~」

そう言ってボールからラルトスを出す。

「と言うわけでお前に名前を付けてやる」

『いい名前を頼むわよ』主人

『いい名前か……ふむ……』

トウガは少し悩む。

(いい名前はすぐに思いつかぬものだ……いい名前、いい名前……)

「よし。お前の仲間が決まつたぞ」

『決まつたの？ ジやあ私の名前は？』

『お前の名前はミコトだ』

『ふうん。ミコトね。ミコトかあ～』

するとミコトは再びトウガの頭の上に上った。

『私の名前はミコトよおー!』

「……やはり見た目通りだ」

ミコトは大人になりたい子供のようだった。

続く

第7策・1 夢の欲

「頭が痛い」

『あら？ 大丈夫？』

「お前のせいだが……」

朝起きると頭の上にまくろトドが乗っていた。

「おはよう」わこまく。お兄様」

「兄貴、おはよー」

ナギサとヤヨイも起きる。

「とりあえずは今日JJセジムに挑戦するぞ」

『私の初陣よ』

「そうだな。そうしよう」

「なんだか二人しか分からぬ会話なんてしてずるいです」

「そうだな」

『あら、嫉妬かしらね。怖いわ』主人』

「……」

(計画に支障が出なければいいが……)

トウガには不安しか残らなかつた。

【トウカジム】

「私がこのジムのジムリーダーのノマルだ」
「あなたが……」

「昨日はうちの孫が世話をかけたようじやの」「昨日? ああ、あの勘違いをしていた奴か」

昨日の集団の親分の事であろう。

「奴は私のために強くならなきやいけないと云つて何もきかんでの

……

「なるほど」

(祖父がためのあの行動か。欲に忠実だ)

トウガはあの少年に共感を覚えた。

「まあいい。では戦つていただこう」「ダブルバトルだが……どちらが相棒だ?」「今回は私です!」

そう言つとナギサがトウガの横に歩いてきた。

「私とこのナギサの一人でだ」「そうか。では戦おう」

後半に続く

第7策 - 2 本郷の本郷（前書き）

感想お待ちしております。

第7策 - 2 本当の本当

「では、初陣と行」つか
『私の初陣は華やかな勝利で終わらせてあげるわ』
「レンもやってやりなさい！」
「チャモ！」

フィールドの中央に「コトヒレン」がたつ。

「行くがいい。『ニニニニニ、ハネ』」
「ネ～」
「ニニニニニ～！」

ノマルは「ハネ」と繰り出した。

「試合開始！」

そして戦いは始まった。

「ニニニニニオオオオオ！」

「ニニニニニがわわぎ出した。

『るつさいわねえ……』

「チャモチャモ～」

『あなた、それ本気で言つてるの？』

「チャモ」

『まあいいわ、乗つてあげる』

「チャモ！」

テレパシーで会話しているためさわぎの意味はない。
しかし頭に響く大声によりダメージは受ける。

「ネー！」

エネコはエネコも叫びだした。

「ネコのてか。意味があるよつには見ないが……」

（そもそもポケモンのレベルが低い……用事というのが何か関係があるのか？）

「ミコトはレンの案道理に動くところ」ことだが。あの案ならつまくいくだらう。

「一|三~」

「ネ~」

少しずつ叫びが小さくなつてきた。

「ネ？」

「一|三~？」

とまりかけた時にエネコとミコトは周りを見る。
戦っていた一匹の姿がない。
ダメージは食らっていたはずだが。

『はい落下』

「ネ?」

「一|三、一|三ー?」

上から眠っているレンが落ちてくる。

「ネエー?」

『氣づく』ことができなかつたエネ^イはレンにのしかかれてしまつ。

「チャ……チャモ!」

『ちゃんと起きたわね……起きなかつたら失敗だつたわよ

「チャモオ!」

『まあ、短い付き合いだしね』

少し二人は言い争いをしてくる。

「一|三ー|三モオ……一|三?」

隙を突いてした^イ一|三ー|三は空に舞う。

『まあ、騒がなくちや別に何ともないわね』

サイコキネシスによりゴーー^イ一|三ー|三の動きは封じられ
さらには締め付けられ苦しめられる。

『そんじょそこらのサイコキネシスと一緒にしないでね。私は結構
強いのよ?』

「一|三……一|三オオオ」

『「」の縛りから逃げようとしている？ 根性だけはあるのね……で
も』

タツタツタツ

「チャアアアアモオ！」

「一ヨオオオオ！」

『これはタツグバトルなのよね』

レンのつじగりにより戦いは終わった。

「私の負けだな……」

「……何があったのかは知らないがあなたは本当の力の少しも出せていないようだ」

「そうかな……しかし負けは負けだバツチを持つていくがいい」

そう言つて渡されたバツチをトウガは受け取る。

「まあいい。私の勝ちは勝ちだ……あなたが本氣を出した時もう一度戦おう……」

そう言つてトウガは出口へと向かつた。

「流石はお兄様です」

「兄貴はかつければなあ～」

そう言つて一人も付いていく。

『私は強いのよ』

「頭の上で動くな……」

ミコトはやはりトウガの頭の上で踊っていた。

「本気か……私ももう長くはない…………」

三人の後姿を見てノマルはそう呟いた。

続く

裏第7策 少年は性格は正直

「俺はあ……俺はあ……」

あの三人組のリーダー。

ジムリーダーの孫は悩んでいた。

「強くならねえと……強くならねえと……」

少年は唸る。

彼は強くなりたかった。

「俺はジムリーダーの息子なんだあ……あのー、

彼は今のジムリーダーの孫だ。

息子などではない。

「強くならねえンだあ……強くよオ……」

彼は唸る。

うなり続ける。

「親父のよオに俺はア強くなる

彼は唸りながら荷物の整理をしてくる。

「行くぜ……相棒よお」「ジグ」

そう言つて彼は家を後にして旅に出まつた。

「旅に……でるのか?」

ノマルが家を出よつとある少年に話しかけてきた。

「とめんなよオ、ジジイ!」

「とめぬさ……奴とお前はそつて似てある

ノマルは何かを懐かしむような顔をしている。

「俺が返つてくるまでにジジイは死んでるかもしけんナア」

「そしたらお主の帰つてくる場所はないぞ」

「場所……か。いづれは帰つてくるさ。このジムにな

「私の保険金はちゃんとお前を受取人にしとるので」

「へつ。俺が家を持つのはこのジムのジムリーダーになった時。そ

の時だ

そつと少年はその場を去る。

「親に子は似るものだな。私も奴がジムリーダーになるのを見てみたかったわ……」

ノマルは少年を見ながらそつとく。

「あのトウガとそつ少年がすべての始まりとなつた

ノマルはそつとく。ポケモンセンターを見る。

「あの少年があやつを動かし、今を進めよつとしておる

空を見上げる。

「欲に忠実は【人間のさが】と言つものじゅ」

歩いて行く少年を見る。

「頑張るのだぞ。レイタよ」

ノマルは旅ゆく少年レイタをただ見つめ続けるだけであった。

続く

第8策・1 思いの森の

「目的は達成されたようには思えぬが次の町へ行くことになる
「カナズミシティか~」
「都会つて感じの所らしいですね」

三人は荷物の整理をしながらいつまでも語り合っている。

「もう、そこに行くには森を通る必要がある」
『いやね、虫が多そうで』
「虫が多くうと何からうと突き進むのみだ」「別にそんなの気にしねえし」
「そもそもポケモンは虫とかできませんから」

演出上出さないといわれていたがこの頃は元から存在しないと言わ
れ始めた

だとすればアニメなどでみんなが食べている海の幸とは……

「まあそんなことはどうでもいい。あそこはケムツソ以外のむしポ
ケモンはあまり生息していないようだ」
「森なのにですかア~」
「別にどうでもいいけどな。レンがいれば楽勝じゃん」「火に弱い奴らばかりでしょ~し」「ナマケロもいるのだがな」

そんなこんなで一行はトウカのもりに向かった。

「なんかむついな」
「ああ、むつい」
「むついです~」

むついとは何だと思うだろうが以前マガジンで見た記憶のある単語だ。

なんとか町内会という作品だったはず。

「助けてくれえええ！」

助けを呼ぶ声が前から聞こえてくる。

「面倒な声が聞こえますよ」
「たしかに。こう言つ所で人を助けるのは正義馬鹿だけだ」
「そつそつ。ただの偽善者です」

そつ言つて声が聞こえる方から離れて先に進むトウガ達。

【トウカのもり・カナヅミ側出口付近】

「出口です~」
「面倒事に巻き込まれなくてよかつたな」
「その通りだ。目的通りに進まぬなどいっこはない」

そつ言つて一行はカナヅミへと向かつた。

後編に続く

第8策 - 1 思いの森の（後書き）

短くて「めぐなせ」！
忙しくて……

第8策 - 2 設置の不備（前書き）

感想お待ちしてらんですかうね！

【カナズミシティ】

「リリがカナズミか」

「確かにミシロタウンに比べれば都会ですね～」

ナギサは周りをきょろきょろと見る。

「やめようやんなに周り見るの。田舎もんだと思われるだろ」

「そうだ。私の目的の妨げとなるかもしれん」

「あ、いや、すみません。昔見た所より田舎に見えて……あれ？」

その言葉を聞くとトウガは疑問の表情になる。

「昔？　お前たちは4年間はミシロヒトトキ以外には行っていないはずだが」

「え？　あ、そうですね……あれ？」

「そういえばあたしたちって記憶喪失だつけ」

「そうでしたね。なぜ忘れて……」

そもそも一人はなぜ空から降ってきて記憶喪失だったのか。
それはいまだ謎。

「……」

(記憶か……)

「そんなことはどうでもいい。早くポケモンセンターに部屋を取り

に行くぞ」

そう言つてトウガは一人ポケモンセンターへ向かつた。

「あ、お兄様～」

「ま、待ってくれよ兄貴～！」

そして一人も後についていくように走つた。

【ポケモンセンター】

「なに？ 部屋がないだと？」

「はい。今日に限つて泊まりに来るトレーナーが多く……」

「ぐつ。他に泊まれるといふはないのか」

トウガは受付の机を叩きジョーイに問い合わせる。

「あ、そうですね……あ、そうそう。あそこなら貸してくれるかも」「あそこ？ それはどこだ」

「少しカナズミから離れますが。サン・トウカといふ花屋のすぐ横にある宿屋です」

「宿屋？」

そんなものがあつただろうか。
トウガは少し思い出そうとする。

「あんまり目立たないんですけど。三姉妹が経営しているんです」

「三姉妹？」

「ええ、親に先立たれた三姉妹なんですけどね。あなたと近い年の
女の子たちですよ」
「ほう……」

(親を亡くして働く姉妹か……面白い)

「ならば行くぞ。そのペンションに」
「え、森の近くにもどんの?」
「そんなこと言つてないで。戻るらしいですから戻りましょ」

そう言つて一行はトウカのもりの方向へ戻ることとなつた。

続く

第8策 - 2 設置の不備（後書き）

感想を待つてゐる小説には感想を書いてゐるが
その人たちつて自分の小説は読んでくれてないのかな。

ところでホウエンのサン・トウカの三姉妹の名前つてなんでしたっ
け。

裏第8策 双方は通行（前書き）

感想募集。

裏第8策 双方は通行

【トウカのもり】

「あの野郎はもう先に行きやがった見てえだなあ～」

トウカのもりをうろつくレイタ。

あの野郎ことトウガを超える男になるために。一日ほどトウカのもりを寝ずに散策していた。

「あいつより強くなる前にあいつに会つひとつのもなあ～」

もう一日散策するかとトウカ方面近くに戻りうとしたその時。

「助けてくれええ！」

「な、なんだあ？」

前から突然男が走ってきた。

「助けてくれえ！」

「スバメの群れだあ！？」

突如スバメの群れに襲われている男がレイタめがけて走つてくる。

「なんでこっちにきやがんだあ！」

「助けてくださいいい！」

レイタの言葉も聞かずに男はレイタめがけて走つてくる。

「めんべくせえ！ アクセラー！」

「マッス！」

レイタが呼ぶアクセラとほあのジグザグマが進化したものだ。彼らは別に弱いわけではなくもつすぐ出進化するレベルだったのだ。

「やつちまええ！」

「マッサアアアス！」

突然あたりに波が現れスバメたちは波にのまれ行く。

「くつ。 なみのりにのまれて死にな雑魚があ！」

ちなみに祖父の友人にもらつた秘伝マシンで覚えたのだ。

「たつぐ。 閉じこもりきりもいいがそろそろポケセンにいかねえとなあ……」

そう言つて仕方なくカナズミの方へと向かう。

ガシツ

「助けてくれてありがとうね」

「んあ？ そう言えばそうだつたなあ～」

助けを求めていた男がお礼を言つてきたが
レイタはそのことをすっかり忘れていた。

「いやあ、私の名前はシツといつんだ」

「そうか、じゃあな」

話を無視してカナズミに向かおうとするレイタ。

「いや、ちょっと話を聞いてくれよ」

「いや、俺は急いでるからあ～」

そして無視して先に進もうとする。

ガシツ

「私はね、ポケモン解放会という会の副会長でね。会員は10人なんだけどさ」

「あーはいはい。わかつたわかつたあ～」

ブゥン！

「行くぞアクセラ！」

シツを振り払いレイタはカナズミ方面へとアクセラとともに駆けて行つた。

「まだお礼もしていないのに……あ、カイナへの定期船に乗らないと！」

そう言つてシツはトウカ方面へかけた。

続く

裏第8策 双方は通行（後書き）

カイナへの定期船とはハギ老人が運営する定期船である。

第9策 殺意の揺れ（前書き）

あ、みなさん。
スラマッパギー

待つていてくれた読者の皆様お久しぶりです。
始めてみてくれる方

第一部から見てください。

今日はじめてみて第一部の一壞この話まで見続けた人
お疲れ様です。

この話を見て一から見るか考えた人
第一部とは毛色が違いますよ。

そしてこの挨拶は後付けなのでこれ以下と
かみ合わない感じですのごめんなさい！

ではみなさんスラマンマラム。
ん？ スラマンラマムだっけ？

修理に出したパソコンが返ってきた。
初期化してデータが全部消えていた。
バックアップしていなかつたのでもはや言つことはなかつた。

修理に出している間は仕方なく昔使っていたノートパソコンを使っていた

4月の28日に出た宇宙が舞台のシミュレーションゲームをしていた。

とある国を攻めていたらグロいことになった。

というわけで次は北から攻め西に攻めてクリアした。

気が付いたら一週目は50ターン削減でクリアした。

だがノーマルEDしか見てない。

なんか通常とは違つ

編とかってきた。

吐き気を催し夜寝れなくなつた。

酒も飲める歳になろうというに……

ということで気晴らしにスパロボをやってたらもう六週目か……

あれ、これ前書きだつたつけ……

第9策 殺意の揺れ

「リリがペンションですか」

見上げるほどでもない大きさのペンションを見ながらナギサはいつ
言つ。

「何か小さくなあ」

ヤヨイは正直な感想を言つ。

「隣の花屋のつこでとこつ感じの建物だせ?」

ヤヨイとナギサがペンションについて話している。

「そんなことはないでもこ。とにかく入るわ」

トウガは一人の間に争いを抑えペンションに向かった。

「う~」

「なあ、兄貴。あれ……」

受付の所で小さい女の子がよだれを倒しながら寝ている。

「みょうたべられにやいによ~」

「しかも典型的ですよお兄様」

ナギサはトウガの腕を掴んで少し揺りしながりながら囁く。

「私たち位の少女たちが運営していると言つていたからな
「親にも先立たれてたんでしたね……」
「……」

その言葉を聞くとトウガは少し顔をしかめた。

「まあいい。どこかへあの受付を起します」

そう言つてトウガ達は受付の近くへ向むく。

「おー。起きる」

トウガは受付の女の子の肩をつかみ揺らす。

「ん」「やー」「やんですか、お姉ちゃん……なつー?」

「どうやら現実を見たようですね」

「夢を見てたのに現実を見せられるって厳しいねえ」

現実は夢を壊すのだらうか。

「おー、お密さんですか! お、お姉ええちやああああん!」

どたどたと受付の女の子はカウンターの向こうにあった扉から奥へ向かっていった。

「どうやら隣の花屋とつながつてゐるようだな
「どうかあまりお密さんが来ないみたいですよ」
「こんな大丈夫なのか?」

「意外と大丈夫な場合が多い」と思つがな

「も、もひしきれありませんでした」
「いや、気にせんよ」

トウガと同じ年ぐらの女の子を引き連れて受付の女の子は帰つてきた。

「わ、私がこのペニションのオーナーをしていますノリコです」
「う、受付のナオです！」
「ペニションのほうにお客さんが来る」とはめつたになかったので
……」

女の子たちはあたふたとしている。

「む～……」
「ん～……」
「む？ どうしたお前たち」
「いや、ねえ……」
「なんでもないです……」

ナギサヒヤコイは不機嫌だ。

「揺れますよ、あの尼」
「死ねばいいんだよ……」
「お前たち……」

ノリコに殺意を向ける一人を見ながらトウガはやれやれといつ表情

をした。

続
く

第9策 殺意の揺れ（後書き）

感想はお待ちしております。

そういう前書きのゲームの発売会社からいよいよあのシリーズの続編が出るようですね。

どれだけ戦国を周回プレイして待つたことか……

しかし公式のキャラ紹介……

これは……ちやんと娘なんだよな？

いやだよ他の人のとか……

あと付いてくるのとほかに勝手に来る人もいるようだ……

しかし確実に来るであろう再世編……

そして再び落ちるバイトの面接……

そして来週の日曜のバイト面接……

とにかく頑張るつきやないのか！

そういうの頃、ポケモンはアニメのCM以外見てねえやー！

第10策 もはやの相部屋（前書き）

後40分早く書き始めればよかつた。
なんかいろいろあつて書くのに一週間かかつた。
もう何もすることないかな……

そういうや友人が真剣恋貸してくれるってさ。
また当分更新しないかな……

第10策 もはやの相部屋

「 じゅうらが今日お泊りになつていただく部屋になります」

ノリコの案内により止まる部屋に案内された。

「 つて二人部屋じゃないか！」

「 二人しか寝られない部屋つて」とですよねー」

ヤヨイとナギサは突然叫ぶ。

「 もはや何も言つ」とはないが……」

セツ言つてトウガは部屋を後にしようとする。

「 ちょっとまつてくださいー！」

「 こには私とナギサのどちらかと……」

「 もはや何も言つことは……ない」

そう言つてトウガは普通の人には見えない速さで首を軽くたたく。

「 ふにっー」

「 くなっー」

そう言つて一人は倒れた。

「 もはや定番すぎる流れなのだが……」

『定番も何も確實に……』

「 もはや何も言つな……」

もはや何も書くことはない。

「お姉ちやーん！」

ドタドタとナオコが走ってきた。

「もう一人泊まりたいという人が来ちゃったよ～！」
「もう一人？」
「もう止まれるようにしてあるお部屋なによ～？」
「二入部屋が一つだしね」
「もはや言つ」ともないだらうが……私と相部屋でいいのではない
かな」

その言葉を聞くとナオコが笑顔になる。

「よろしいんですか？」

ノリコがトウガに少し笑顔を聞く。

「もはや何も言わないが……笑顔で聞くものではないと思うが」「あつ。す、すいません！」

ノリコはあわてた顔をして頭を下げる。

「いや、いい……とにかく相部屋の件はOKだ
「はい。では相部屋になることをおつたいしてきます
「きまぐ～」

そう言つて二人はドタバタと受付に向かつて走つて行つた。

「「」のペンションは親の遺志を継ぐために経営しているにすぎない
ようだな」

『維持費や生活費の稼ぎは花屋つて所のようね』

「親か……そう言えば私は死んだ父親の顔も覚えていないな……」

『私だけて覚えてないわよ。知らないうちにいなくなっちゃたんだ
もの』

「ふむ」

『だつて捕まえられちゃつたもの』

「そうか」

『幸せかどうかはわからないけど。私みたいにあう人と出会えたの
かは分からぬけどね』

そう言つとトウガとミコトは黙つた。

「おまたせしました~」

『どうやら相部屋の人人が来たようよ』

「そのようだ……む?」

「ああ?」

ノリコとナオコが連れてきた相部屋の相手は見覚えのある人物だつ
た……

続く

第10策 もはやの相部屋（後書き）

もはや何も言つことはないけれど。
感想とか募集中。

追記

予約掲載したためこの小説が完成したのは0：38分
そのため40分早く書き終わつてればなど言つてるわけですね。

第1-1策 その答え（前書き）

バトルなんて起きないけど。

彼らには欲がある。

それを今戦つても埋められるとはないから。

第1-1策 その答え

「んでお前が『ここ』いんだあ？ もうカナヅミにつけてても『ここ』
るだろ『よお』」

「それには理由がある。しかし貴様もやはり旅に出ていたのだな
『やはりだあ？』

トウガのやはりといつ言葉にレイタは疑問を感じた。

「弱者だからな……私もお前もだ」

「弱者だあ？」

「そうだ。私もお前も弱者にすぎない。だから欲がある
『欲ねえ……』

レイタにも思い当たる節はある。

トウガに負けた時に強くならなくてはならないといつ欲に駆られた。

「弱者は弱者だからこそ欲につられる。【人間のさが】と言つもの
だ」

「なんか文学的なこと言われても俺には分からぬえ～」

「ふ、人類すべてが弱者なのかもしれぬがな」

「だからわからぬえよ……たくよお」

レイタは呆れる。

自分を倒した男はこんな男だったのかと。
文学的で意味不明なことを言つ奴なのかと。

「意味不明な奴だぜえ」

ただレイタの頭がよくないだけかもしれない。

「あの～ そりそりお部屋に」¹案内しても？」

ノリ「が恐る恐ると一人に尋ねる。

「む、私は構わないぞ」
「別に俺もいいぜえ～」
「で、では」

そう言つてノリは一人部屋に一人を連れていった。

「一段ベットかよ……」
「別に私はどちらでも構わんのだが」
「なら上に行かさせてもら「うぜえ」

そう言つてレイタは上のベットに乗る。

「ふむ。なるほどな」
「何がなるほどなんだあ？」
「いや、なんでもない。とくに話すことそもそもつないだらう。時間も
遅い、今日は眠ることじょつ」

そう言つてトウガもベットにはすり眠りに就いた。

「……俺あこの男に勝つために強くなりてえんだよなあ……」

レイタは小さく呟いた。

「お兄様と眠ることができない夜は寂しそうでした」
「兄貴がいないと寝た気がしないんだよなあ」

次の日の朝のナギサとヤヨイの会話である。

「お前たちとこいつものは……」

「ちつ」

レイタが舌打ちをしている。

もはや何も言つことはないだろ？

「朝食をいただいてカナズミへ向かつぞ」

「はい」

「おひ」

トウガの言葉につなずく一人。

「……」

そして何事もないよつに黙りながらテーブルに座るレイタ。

「お前も向かうのだね？」

「ああ？」

「一緒に行かないか？」

トウガは少し笑つたような顔でレイタに答えを問う。

「んでてめえと行かなきゃなんねえんだよお」

「行き先が同じだからだ」

「別にいい。俺はあトウカの森に戻るからよお」

「そりか……」

そう言つて一人の会話は終わる。

『恥ずかしいのかしらね彼』

「優しさを知らないのかも知れんがな……だからこそその求めか」

トウガはまだそつ恋きナギサヒヤヨイとともにペンションを後にした。

続く

第1-1策 その答え（後書き）

てな訳で感想募集中ですよ。

「三姉妹の次女が出てこつへんやんけ！」

といふ人がいるでしょうがまあまだペンション出ただけだから。

てな訳で待て、次回！

ちなみに貸してもらえるのは今日の午後に延長となった。

素で持ってくるのを忘れたようだ。

出会つて数カ月ではこんなものか……

裏第1-1策・1 僕は俺（前書き）

もうこの頃いろいろ大変ですね。
活動報告にも書いてるけど。
あ、感想もらえると嬉しいのでよろしくです。

裏第11策・1 僕は僕

「あん野郎はカナズミに帰りやがったかあ」

レイタはトウガ達が見えなくなつたので自分もペンションを後にし
めりとした。

「なら、あいつはあいたくもねえし……トウカのもりにでも
戻るかねえ」

そつと荷物を持てトウカのもりへ向かう支度をした。

「んあ？」

ペンションを出た途端隣の建物が少し騒がしかつた。

「なんかもめ事かよ。めんどくせえ」

レイタは気にせずその場を後にしつとした。

「お前の店で買つた花すぐに枯れだじやねえかよ！」

「い、言いがかりです！ あなたの管理が悪いからですよー！」

「ああ？」

花屋で店番をしていたレイタはクレーマーに文句を言われていた。
リピーターなどではなくこの間一度来ただけの客だ。

「まつたくよ。これならカナズミの高級花屋で買つたほうがよかつたぜ」

「つ！ まさかあなたは！」

「あ？ 何なんですか？ お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ？」

「つ！ あなたはつ！」

こじで反抗してもレイコはまだ子供だ。大人のそしてさうに男である相手を殴つてもあまり意味はないだろう。

『ガヤガヤ……』

周りの客もどうしていいのか分からぬような状況だ。常連の客というのも少し歳の行つた人たちばかりだ。どうするといつともできない。

「おひ、買つた金返せ！ 後俺の心を痛めた分の慰謝料もなあ～！」
「く……つ……」

そつと黙つて男はレイコの服の首元を持ち上に持ち上げる。

「こいの……くつ……」

「まあ店の責任者はまあてめえじやないようだな。責任者が来るまでこいのままかなあ～」

ノリコとナオはペンションにて後片付けをしているためにこいとはいない。

そのため今のこの状況を知らない。

「なんでも周囲のやつらはよおー。こんな店で買った花なんですが
にダメになつちまつぜえ？」

偶然花を買ひに来た若者などはないの男が行動に出てからすぐには逃げ
ている。

常連客もただ見ているだけしかできない。

もはや助けようとする者はだれもいはしない。

「んなこたあねえ」

「あ？」

「駄目になつちまつのはおめえだあー！」

レイタは男がしていた光景を見ていた。

(クレーマーつてやつか。かかわりたくねえなあ……)

そう言つてレイタはその場を去ろうとしたが
男とレイタのある会話がレイタの耳に入った。

「まつたくよ。これならカナヅミの高級花屋で買つたほうがよかつ
たぜ」

「つーまさかあなたはー！」

「あ？ 何なんですか？ お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ

？」

「つーあなたはー！」

その会話を聞いた時レイタの心に何かが響いた。

(弱い奴をつぶすつやつかあ……)

そんなとき少し前の自分を思い出す。

トウカジムの挑戦者である弱い奴らをつぶしていた。
最強であるトウカに雑魚が挑むなど許せなかつたからだ。
でもそれはただ弱いものをつぶして楽しんでいるだけだった。

(他人の視点から見てやつとわかるかよ……)

自分はあの男と回じだ。

弱いものを潰し、最強を守るとこつゝとに固執していた。

(……そしてこの街のやつも)

その時レイタの心に何かが生まれたようだ。

(しかたねえ。やつてやるひじきやねえか!)

そう思つた時にすでにレイタの体は男のまへへに向かい腕をつかんでいた。

「んなこたあねえ」

「あ?」

「駄目になつちまつのはおめえだあー」

後半へ続く

裏第11策・1 僕は俺（後書き）

この小説を何度も見返すと誤字が見つかることがあるが
とりあえず報告があるまで無視している。
まあ、別にそれでいいならいいかなって
……

裏第1-1策・2 無知はお前（前書き）

この頃諸事情で忙しいんですがね。

少し時間が空いても手が動かないんですね。

すでに第三部の構想が思い付き始めたというの。

そこまでが書けないとは……

裏第1-1策・2 無知はお前

「誰だお前?」

「隣のペンシヨンのお姉ついやつだあ」

「その姫がなんだあ?ヒーローのつもつかよ」

その言葉を聞いてレイタはにせつと笑う。

「違つなあ~ペニシヨンド朝食といにも隣がつねんへて仕方ねえんだよお!」

「ふつ。まつまつせせ~! 隣の貧乏宿に泊まるせじ落ちぶれたやつがこるとはなあ

「う、ついのペニシヨンまそんなひ~.」

「てめえは黙つてろ!~.」

『ドカツ』

「がはつ」

「……落ちぶれてんなあてめえまよ~」

「んだとお?」

「肩は肩だつて言つてんだよお~.」

「てめえ!~ 毛めやがつて~.」

そして男は腰のボールに手を当てる。

「ポケモンバトルだ!~」

「いいぜえ!~ のじてやるよお~. いの俺がよお!~.」

「行きやがれポチエナあ！」

「チナア！」

男はポチエナを繰り出した。

「へつ」

「何を笑つていやがるー！」

「即潰しだ！ 行きやがれアクセリフー！」

レイタはボールを投げる。

「マッースグー！」

「なんだ、弱そうなポケモンじゃねえかよ」

男はマッスグマを見てそう言つた。

「無知つてやつは恐ろしいもんだあ」

「どういふことだてめえー！」

「へ、教える必要すらねえよお」

「なんだと！ とりあえずバトルだー！」

男はそつとポチエナに命令をし始めた。

「ポチエナー！ たいあたりだー！」

「エナアー！」

「よけるアクセラあー！」

「マース」

アクセラはよける。

「ちゅこまかどー！ かみつくだー！」

「ヒナアー！」

「よけろアクセラ！ あー！」

「マース」

再びアクセラはよける。

「ちゅこまかどー！ ちゅこまかどー！ とにかくやつてしまえー！」

「ヒナアー！」

「戦法も何にもあつたもんじゃねえな……とにかくよけておりなく

つとけえー！」

「マース！」

そしてアクセラはポチエナ攻撃を「じび」とくよけまくる。

「あーいー！ 逃げまくるだけしか能がないのかよその雑魚ポケモンはー！」

「……はあ。無知つてのはおつそらしげねえ」

「雑魚がいきりやがつて！」

「はつ……終わらしてやれ。アクセラ！」

レイタが鼻で笑い、アクセラにさう命令したとわ。

「ヒナアーー？」

そこには倒れたポチヒナと勝ち誇った顔をしたアクセラしかいなかつた。

「そ、そんなバカなあーー？」

「俺の勝ちだ。さつさと土下座して帰れ
く、く、こんな認めねえ！」

そう言つて男はレイタに殴りかかった。
が。

『パシッ』

「無知は無知なんですかあ～？ 格下くんよお～」

「ひつ！ ひいいいいい！」

そして男は倒れていたポチエナを抱えてその場から逃げだした。

「はつ……めんどくせえ戦いだつたぜ」
「あ、あの」
「あん？」
「助けてくれて……」
「はつ！ 朝食ともに隣がつるやくて仕方なかつただけだあ」
そつまつてレイタはその場を去ろうとする。

「お礼を！ 何かお礼を！」
「ふつ。ならよ。当分あのペンションを拠点としてポケモンの修行
をする。だから飯の値段を少しまけろお」
「あ、少しつて……」
「10円位安くすればいいだけだあ」
「え？」
「さて飯にすつかあ」

そう言ってレイタはペンションに戻つて行つた。

「はあああ……」

レイコはただじつとレイタを見つめているだけだった。

「あれ？なんか騒いでたみたいだけど何があつたのかな？」

「あら？　レイコどうしたの？　ぼーっとして……お~い？」

今来た二人は何が何だか分からなかつた。

続く

裏第1-1策・2 無知はお前（後書き）

感想お待ちしております。

そしてこの頃自分の小説を読むといつことをして
昔のと比べると書き方がだいぶ変わりすぎていた……

名前「」

つて書き方だつたんだよなあ昔。

そんなの小説じゃねえとかわんざん言われて変えたんだよなあ。

懐かしいなあ……

成長できてるのかなあ……

第1-2策 何かの事件（前書き）

サブタイトルそのまんまやないか！

後感想大募集……

この頃忙しいせ……

第1-2策 何かの事件

【カナズミシイ】

「お兄様。いよいよジムに挑戦ですね」

「いよいよって言つけどさ。結局のところここに戻つてくるのに時間かかつちまつたぜ?」

「まだ午後3時だ。誰かが挑戦していようとそろそろ終わるころだ
らう」

ペンションからカナズミへと戻つてきた三人。

「とりあえずジムに行きましょうか」

「ジムはあつちに……」

『ガゴツー!』

「む? 今爆発音のようなものが聞こえたようだが……」

「何があつたんですかね?」

『ワーオー』

「逃げまどう住民たちですね。これはチャンス」

「ふ、何があつたかは知らないが私が英雄になるために利用させて
もらおう」

そう言つてトウガ達は騒ぎのぼつへと向かつて行つた。

「お父様っ！　お父様っ！」

女の子が倒れている男性のそばに座りこみ泣いている。

「さて、騒ぎの現場はここか……」

「何があつたんですかね」

何があつたのかは知らないが倒れている男のそばにいる女の子にて
ウガ達は近寄る。

他のヤジ馬は女の子にも近づいてもしていないので容易に話すこ
とができた。

「何があつたのかな？」

「お……お父様が……お父様が……」

「お父様がどうしたんだよ」

「何者かに何かをされてそれで！」

「何者かにか……」

「それでその男は？」

「あつちに行つて……追いたいけど……お父様がつー」

そつまつて女の子は街の上方向を指さした。

「あつちか……よし、行くぞ」

「あいあいせー」

「ア解」

そつまつてトウガ達は指の差されたまづへと向かった。

『さわ・・わわ・・』

「おー、セツキのヤツが……」

「犯人を追つて行ったんじゃね……？」

『さわ・・わわ・・』

「危険じゃないか……？」

「この街交番ないか?」

『さわ・・わわ・・』

「そもそも、なんで交番ないんだ……」

「デボンも頼るほどの大警備会社がいるからだな……」

『さわ・・わわ・・』

「ならその警備会社は何をしているんだ……」

「そういうや、なせ……」

『さわ・・わわ・・』

『ザツ』

「ソーリーで何が起つたんだ?つか……」

続く

第1-2策 何かの事件（後書き）

アニメで確認したんだ。・・はちゃんと2つが正解っ！
そのはずっ！ アニメの一二期しか見てないけど確実につ！

第1-3策・1 無口の男（前書き）

なんかコラボに参加する」とになりました。
詳しくは活動報告で。

第1-3策・1 無口の男

【カナズミシティ 北】

「……」

男が一人段差の上に立っていた。

「……」

その男は何もしゃべらずその場に立っているだけだった。

「……」

『タツタツタツ』

「ふむ。すでにじゅうせこのたきにまで付いていふと思つていたが

「……」

トウガはサングラスに手を当てながら馬を見る。

「どうやら私が速かつただけのようだな」

トウガの後にはナギサ達の姿はない。

「さて、ここまで来たからには逃げられんぞ……観念して私の名前
の糧となるがいい」

「……」

男は腰のモンスター・ボールに手を当てる。

「逃げられぬとわかつたらバトルか……」

そう言いながらトウガも腰にボールを当てる。

「いいだろう、受けてやろう。行くがいいレジー！」

「タazz」

そして男もボールを投げる。

「……」

「コイールコイール」

男が繰り出したのはコイルだ。

「ふ、コイルか……」

「……」

「何もしゃべらぬか……」

何も言わず男は手を擧げる。

「コイール！」

そしてコイルが動く。

「戦いの開始か！」

そして戦いの幕が開ける。

後半に続く

第1-3策・1 無口の男（後書き）

トウガ君のすさまじい運動能力の一部が出ました。
男がいたところとカナヅミは結構離れています。
運動能力の高いナギサ達ですらかなり時間のかかる距離です。

第13策・2 無言の男（前書き）

ポケモンはお久しぶりです

他の小説更新してましたね

あとポケモントレーナーの名前募集中です

後コラボとかしてくれる人も募集中です

第1-3策・2 無言の男

「……」

「コイール！」

男は何も言わないのにコイールはたいあたりを仕掛けてくる。

「無言で命令指示？　あの男……」

「ベイツー！」

そしてレジはたいあたりをよける。

「……レジ。ひのこだ」

「ツウーベイー！」

そしてコイールの背後からひのこをまく。

「……」

「コイール！」

そしてコイールもよける。

「またしても無言で指示を……」

男が何も言わないでもコイールは的確に攻撃を仕掛けてくる。

「これでは雑魚ならすぐ元へやらされているだらう……」

トウガは頭に手を当てやつてしまつ。

「コイール！」

そしてコイルはソニックブームを飛ばしていく。

「ベイツー！」

「その程度ならば……」

レジはソニックブームを食らつがそれほどのダメージは受けない。

「レジ。 つめとぎだ！」

「ベイツー！」

そう言いながらレジはつめとぎをする。

「……」

「コイール！」

その時コイルはレジをロッカオンする。

「これは……レジワ！」

「ベイツー！」

その瞬間。

「コイール！」

コイルからでんじほうが発射される！

『ガギ』「オーグウスギイー』

その攻撃はレジに命中した。

「……」

「ロード」「ロード」……「ロード？」

勝利を確信して飛びまわつてくるロードは何かに気がついた。

「……馬鹿め。 もとよつぞーランにでんきは聞こえてへ。 やして」「ベイシ！」「

「まもるをしていたレジにはダメージは皆無だ……そして……」「ベヒヒヒヒイ！」

おのれおとこしてこのロードにレジはかわらわづをくらわせる。-

《やめうしょにあたつた いつかはばつぐんだ》

「ハ、ロード……」

そしてロードは戦闘不能となつた……

「……」

「無言で去りうつとしてもだめだ」「

男が逃げようとしたが既にトウガは背後にいた。

「『ひやつて言葉も発さずに命令を出していたかは知らないが……

どうやら始末には失敗したようだな

「……」

『ブンツ』

男は無言で殴りかかってくる。

『ガシツ』

「最後は自分でか……む？ この感触……」「……」

『ガキヤツ』

音がした途端にトウガが掴んでいた男の腕は外れた。

「義手か！」

そのまま男は走り去っていくが……

「追いつけないとでも思っていたか！」

しかし英雄トウガからは逃げられない。

「貴様は私の糧に……」

『力チャカチャカチツ！』

「む？」

『ブシウウウウウー』

「ぬおつー」

その時男の首は空に向かつて飛んで行った。
そしてその場には男の体だけが残った。

「サイ……ボーグか……」

「お兄様〜」

「兄貴〜」

「む、今来たか……」

男が飛んで行つたあとに一人が走つてやつてきた。

「事件はこのように解決したぞ……このようにな……」

「うわっ！ 首なし！」

「こんなの持つて帰つたら英雄どじがじやないですよ……」

「いや……これは……」

慌てて混乱する一人を見て何も言えなくなるトウガだつた。

続く

第1-3策・2 無言の男（後書き）

キャラが少し違うような気がしますねトウガ君。
彼だってまだ10代ですよ……

さて……

第14策 ジョウトの男（前書き）

連日投稿つて言つかかなり短いですけど。

第14策 ジョウトの男

「と言つわけで、これが今回の犯人……の残骸だ」

いろいろあつたがトウガは犯人の体を持つて事件の現場に戻つてきた。

「く、く、首が！」

「こいつは人間ではないようだ……」

首の方を向け人間ではないことを見せる。

「き、機械の人間……」

「き、機械人間とかすごいテクノロジーだ……」

《ざわ・・ざわ・・》

(あいつに連絡が取れればこいつのことがよくわかるかも知れんが
……)

トウガはとある一人の男を思い浮かべる。

「お兄様。ホトラヤさんに連絡は取れないんですか？」
「旅に出た時から定期的に連絡はしているのだが……」

覚は頭をかく。

「ホトラヤってあれだよな？ あのいけすかないジョウト詫りの…

…」

「ヤヨイ。ホトトガシは私達の資金提供者ですよ……」

ヤヨイの言葉にナギサは少し怒ったようになり。

「いや、セレまで怒る」とは……でもそれあたりのことにはなんとか……」

「いけすかない奴だとまづのはわかりきったことだ。だがここには話のわかる男はある

「もう言つてトウガはボケナビを取り出す。

「ボケギアにもボケナビで電話がつながるなんて不思議だなあ～」

「ヤヨイ……あなたって人は……」

ナギサはヤヨイの頭の悪さに頭を抱えた。

《ユーモラス》

「む、つながるとほな

「繋がるとほなやないで、トウチヤン」

「私はお前の父親ではない……それにお前の方が年上だ」

「相変わらずノリ悪いのよ～トウガ～」

「まあ、ここ……なぜ今まで連絡がつながらなかつた

「こりこりあつてん。機械との戦いとかな」

その言葉に少し顔をしかめる。

「機械との戦いだと？」

「あ、その言ひよう。そつちこも出たん？」

「その通りだ。こつたい何なんだ……」

「まあ、よつわからんつて所やな。じつもじつちでこうこうせい
いからまた連絡取られへんようになると思つわ」

「やうか……」

「まつたぐ。わいとわいの大切な」との一人旅の邪魔でなあ～」

「一人旅……そうか、例の娘だな？」

「ひつどい言いようや……まあ、大事な娘やよ】

「ふ、ロリコンと言つほど年は離れているがそれ以上だからな貴様
は」

「くつくつへ……まあそれもそや……おつとやうひやうきるで……」

「ああ、またな」

《ピッ》

「ビッでしたか？」

「いや、調べるのは無理だな……」

「無理？ なんでよ。あいつなら……」

「いや、無理だ。あちらにも同じものが出ていたらしー」

「「あつちにま?」」

一人は驚く。

「まあ、でてきたら今度は捕まえるぞ……出でくればな……」

トウガはそう言つてポケモンセンターへと向かつた。

続く

第14策 ジョウトの男（後書き）

ホトラヤといつ名前には無理があつたか……
いや、あの名前の記事に来てくれた人の名前を見ながら
考えて組み合わせた結果なんんですけどね。

第15策 これから「これから」(前書き)

待たせたのだろうか……

実は待っている人なんていなかつたんじゃないだろうか……

第15策 これからこれから

【ポケモンセンター】

「今日襲われた男性はこの街のジムリーダーだつただと?」

「ええ、結構なお歳のようでした。そもそも娘さんとリーダーを変わると云つ話が」

「娘……あの女か……」

人だからの中で男性を抱きかかえお父様と言いながら泣き叫んでいた少女を思い出す。

「実力があれば年齢は関係ないといつ」とか……しかしそれだとジムには挑戦できんな」

「ええ、リーダー交代の手続きも少しかかるとのことです」「けつ。迷惑だなあ今回の犯人も」

ナギサの言葉を聞きヤヨイが少し怒ったよつと言つ。

「……犯人を捕まえてきたといつ」と少しは知名度が上がったようだ」

「いい意味でですけど……でも謎も増えましたね……」

「ホトトラヤも使えねえつづうんだから謎は謎のままだな」

ヤヨイは地団駄を踏む。

「今日のヤヨイは少し不機嫌だな……」

「私もですけど朝はお兄様と一緒に起きられませんでしたし。それ

「この事件です」

「いやなこと続きで気が滅入つてゐるところとか」

トウガは頭に手を当てる。

「でも今日は部屋が取れてよかったです」

「今日の事件のせいでこの街から離れていったものも多かっただ…」

…

主にジムに挑戦に来たトレーナーや観光客などだ。

昨日まで満員が普通だったポケモンセンターにも簡単に空き部屋ができる。

「それで……どうしまじょうか」

「次の目的地か…」

次のジムへ向かうにはカナシダトンネルを超えてキンセツに向かうのが一番いい。

「しかしトンネルは落盤事故により通れない

「となると…」

「りゅうせこのたきをこえ回り道になるがキンセツに行くの?」

「ちょっと待ってください。フーンに先に行つた方がいいのでは?」

姉妹が別々の目的地を言いだした。

「フーンにはロープウェイを使えば簡単に行けますよ

「キンセツの方がいいじゃねえか! 都会なんだぞ!」

『あやん! あやん!』

「お前達……」

目の前の惨状にトウガは頭を抱える。

「……とにかくハジッゲタウンに向かつ。話はそれからだ……」

そして時は過ぎてこく……

続く

第1-5策 これからこれから（後書き）

短すぎると……

この文書くのにどれだけかかったか……

私ってやつは……

ディスガイア2（PSP版）面白いくよおおおおおお！

積みゲーたまりすぎやあああああ！

小説書く気力が出えへんのはこのせいやあああああ！

神の風終わったしトウのアナザーも終わってまだ積があるなんて

……

第1-6策 上つの下つ（前書き）

9月……いや、休みなつたし別に何もないか……
そんなことよりラインバレルの漫画版はアニメ版にはない
かなりの面白さがあるなあ～

第16策 上りの下り

【じゅうせいのたき】

「はあ～疲れるよなあ～段差を登るってのはさ」

「ヤヨイは体力バカなのにつるさることを言っていますね」

「ああにい～？」

「馬鹿をやつているな。先に進むぞ」

姉妹喧嘩を素通りして先に進むトウガ。

「ちょ、兄貴～」

「お兄様。くつ。この愚妹のせいで」

「なつ。ナギサが愚妹だよ！」

二人はどうやらが愚妹か言い争う。

二人は記憶喪失でありどちらが姉で妹かは覚えてはいない。
どちらが妹かは分からぬ……

「……」

トウガは無言で先に進む。

「兄貴黙つちやつた」

「なんか寂しいですね」

静かなのが嫌い。

二人はまだ10歳だ。

「あつひー。
「ひやんー。
「うわわー。
「ひやんー。
「むー。

『ドガシギッー。』

進んで……

「…」「…」「…」

進んでこべ。

「…」「…」「…」

進む

「…」「…」「…」

何も言わず先に進む。

「…」「…」「…」

誰かにぶつかってしまった。

「はわわ……こんなところに他に人がいるなんて……」

「く、前方不注意だつたか」

「無言だからだよ」

「ですね」

他に誰かがいると「う」と考へずに進んでいたため通行人とぶつかり倒れてしまった。

「あう。痛い……あなた達は大丈夫ですか？」

「問題ない。そちらは？」

「あ、僕は大丈夫です」

立ち上がりたトウガは倒れていた相手に手を差し出す。

「おうとっと……ありがとうございます」
「つーかあんた女一人でこんなところで何してんの？」

ヤヨイは指をさしながらそう言つ。

「お、女っ！？ 僕は男です！」

その言葉に少年は怒鳴りつける！

「あ、あっ……ごめんなさい……」
「ふ、軽率な発言をするから」

「ぬ、ぬう！」

ナギサの言葉に何も言い返せなく

ヤヨイはむくれてしまつた。

「僕はですね。あ、まずは名前を言こましょつ。僕の名前はコウつて言ひます」

「私はトウガ。」の一人はナギサとヤヨイだ

「どうもよろしく

「よろしくね~」

全員の紹介が終わりユウが目的を話し始める。

「僕はですね、ポケモンと人間との間に生まれたといつ子供を探しているのです!」

「ポケモンと」

「人間の間に!?」

トウガはそれほど反応なく。

ナギサとヤヨイは驚く。

「まあ、伝説みたいな感じの噂ですけどね」

「でももそれで子供ができるってことは誰かが獣……」

『ボカアーン!』

「ヤヨイ」

「『めんなさい……』

「しかし、お前はなぜそんな噂を……」

「いえ、双子の兄を探していましてですね。その兄が『こいつこいつ噂にすぐ流されるたちで……』

「「」のう噂をたどれば兄が見つかると?」

「ええ、兄はこの言うの大好きで、この言ひありもしないのが一番好きですから」

コウは頭をかきながら苦笑いをする。

「まあとにかく。神秘的などこのこりぬかもと言ひ」とで、一応ここにも来たと言つわけで」

「ふむ」

「ど、ただぶつかつただけなのに話が長くなってしましましたね」

「気にしなくていい」

「いえいえ。旅の邪魔をしてしまって」

そう言つとコウは力ナズミ方面へと歩き出した。

「では、僕は兄探しの旅に戻りますので」

「見つかるといいな。お前の兄が

「ありがとうございます。では……」

そう言つてコウはその場を去つて行つた。

「なんかよくわからない人でしたね」

「なんかあたしが殴られたり叩かれたりしただけだったような……」

「そうですね。楽しかつたです」

「楽しんでたのか!？」

コウがいなくなると再び姉妹の争いが始まった。

「ふつ。「」こつらにも互いを心配すると言ひ心があるのか……」

そう言つてトウガは再びハジツケ方面へと向かつて行つた。

「あ、待つてください！」

「お、置いてかないでくれ！」

そして後ろから一人はそれを追うのであつた。

続く

第1-6策 上つの下つ（後書き）

なんか1回ずつ話を聞いたことがあったので。
と言つわけでこんな話を思いついたと言つわけです。
さて、まあともかくにもいろいろありました
が感想があると加速しますよ。

小説更新。

第17策 ポツクスの姉（前書き）

いろいろ時間がかかりましたが活動報告の方のいろんな人の言葉でここまで書けたって感じです。
これからも頑張ります。

第1-7策 ポックスクスの姉

【1-1-4 ばんざい】

「あれ？ こんなところに研究所的な建物が……」

ヤヨイが建物を見つけて指をさす。

「ポケモンボックス研究所……転送システムのことですね」「しかし私たちの目的には関係がない。次へむか……」

『ドギヤーン!』

「あ、あの……爆音が」

「どう見てもあの研究所から煙が……」

研究所からは煙が出ている。

「ここでの研究所のものと接点を作れると云つのは……ふむ……」「行きますか？」

「すでにヤヨイが先行しているがな」

一人が話しているうちにヤヨイは研究所に走つていっていた。

「またですか……」「しかしこけて倒れているな……」

研究所近くで倒れているヤヨイを指さしてウガは言つ。

「いてて……靴ひもが……」

「まったく……手入れを怠るからですよ」

フツ……と笑いながらこけているヤヨイを見るナギサ。

「ナギサア！」

「ふふつ。何を怒ってるの？　とにかく研究所に行きまよ」

「お前……ふんつ！」

そう言つて二人は研究所へ向かつた。

「やれやれだな……」

そう言いながらトウガも研究所に向かつて行つた。

「いてて……あ～任されたのにこんな惨状で……」

一人の女性が崩れた機材の中で呟いていた。

「すいませーん。なにがあつた……おつええええーー？」

「すゞい煙ですね……」

「え、なに、お密さん？」

『ガラカツ』

煙を噴く機材から女性は身を乗り出した。

「お密ではない……ただこの研究所から煙が出ていたのでな」

「あ、いやあ……面白い。妹からまかせられたっていつの」「……」

頭をかきながら女性は笑つ。

「あ、私の名前はアズサ。本当は別のところの管理人なんだけどさ」「他のところの?」

「いや、当分妹が帰つてこないから代わりに管理ようしつけてや」

ケラケラと笑いながらアズサは話す。

「しかしこの惨状は大丈夫なんですか?」

「え、えへつへつへ……」

「なんだその変な笑い声は……」

笑いながらもアズサを山の方へ向かい機材を調べる。

「……あり?」

「どうしたの?」

「いや、その……パーツが壊れちゃってるんだよねえ~」

ニヤハハと笑いながら頭をかくアズサ。

「それはまずいのではないか?」

「あ、あはは……どうしよう?」

「いや、どうしようって……」

そう言いながら壊れたパーツを置いてこちらを見るアズサ。

「これも何かの縁……パーツ買ってきてくれないかなあ~」

「なんであたしらが!」

「お兄様。どうしますか？」

叫ぶヤヨイを横田にナギサはトウガに問う。

「……いいだろ？ 買つてきてやる！」

「なんと… ありがとう… パーツはフエンの漢方薬屋の隣で売つ
てるから…」

「あ、目的地決定ですね」

「困難で敗北したあ～！」

倒れながら床を叩くヤヨイ。

それを見ながら勝ち誇るナギサ。

「お前達……」

そしてこいつものよつに呆れるトウガであつた……

「てな訳でこのパートだからね。よろしく

「ああ……」

トウガはアズサから手紙を受け取る。

「じゃあよろしくね。私いろいろやうなきやだから、戻るね

『ギイ、バナン！』

アズサは急いで研究所に帰つて行つた。

「さて、行くか……」

「……」

「ふふーん」

「……行くか！」

そうつ嗣つてトウガはは知つて研究所を後にした。

「ちょ、お兄様！」

「……」

ナギサは追いかけるがヤヨイは動いてなかつた。

「……ほへ？ あ、ままま、まつてー！」

そしてかなり離れた後に気がついたヤヨイは急いで追いかけた。

続く

第17策 ポックスクの姉（後書き）

この頃いろいろゲームやってんですねけどね。

二口二口に実況あげたり。

専門学校で単位落としそうだつたり……

人生厳しいな……

誰か1から見たとか途中まで見たでもいいから感想くれると嬉しいです。

生きる糧になります。

書くためのエネルギーじゃなくて、生きる糧に。

第1-8策 姉妹の喧嘩（前書き）

タイトルままの上に短すぎます。
誠に申し訳ありません。

浅門达斗さんアザトクさん sato takumiさん 靈劍荒鷹さん 松上
さん

のみなさんとリレー小説を書くことになりました
そちらに集中しておりました。
こちらを楽しみにしていただいた方には申し訳ありません。

第1-8策 姉妹の喧嘩

【ハジシゲタウン】

「はあ、はあ……」

息を荒げて泣き声。

「何がつらおかしい女なのか分からないです」

「つらおかしい女なんだよあたしは！」

息を荒げていたのはヤヨイであった。

「なんで先に行くかな……しかもあたし靴の紐切れてるって言ったよね！」

「すべてはお兄様の御心のままに……」

「あ、兄貴～」

ただ、ただヤヨイは泣くだけだった。

「……ただ走ると思つたから走つただけだ」

「それだけであたしをおこしてきぼりにー？」

「……それだけだ」

「あ、兄貴～！」

ヤヨイはただ、ただ泣くだけしかできなかつた。

「とにかく今日はポケモンセンターで休むぞ」

「はー。お兄様」

「ああうわあ、う……」「

ヤヨイはなぜかすり泣いていた……

【ポケモンセンター個室 24】

「これでよしと」

「その靴ひもは先ほどのと同じですけど丈夫なんですかね？」

靴の紐を新しいものとかえにせかにしていたヤヨイにナギサは突つ込む。

「新しいのは丈夫なの」

「そうですか、そうですか」

「気に障る言い方だなあ……」

ヤヨイはふてくされながらベットに転がる。

「なんであたしつこんなに運が悪いんだろ」

「そんな星の下にでも生まれてきたんじゃないですかね」

「そんなことあつてたまるか！」

ヤヨイとナギサは殴り合戦を始めた。

「何姉妹でじやれあつていい」

「じゃああつてなんかない（あつません）ー」

一人は息ぴつたりとトウガの言葉に否定する。

「それをじゅれあつてゐると言つのだ……」

トウガはやれやれと言つた感じで首を振つた。

「明日にはえんとつやま経由でフロンに向かつのだ。山に登る準備
でもするのだな」

そう言つてトウガは山登り用の道具の用意を始めた。

「うげ！？ あたし登山用の道具とか用意してないや！？」

「まったく……だから前の街で用意しておけと……」

「いや、いやなんだともー！」

そして再びじゅれあいが始まつた。

「やれやれ……」

トウガはそのまま準備を続けた

続く

第1-8策 姉妹の喧嘩（後書き）

はあ……風邪がひじくて頭がいたいや……
明日パワポケ14発売か……
お金がないや……

クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録（前書き）

どういつの戦闘記録だ？ とかそこいらは気にせんで。
特にクリスマス臭はありません。
私の好き勝手に書くだけです。
久々に長い話ですよ~

クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録

「クリスマスですよーー！」

「クリスマスだなーー！」

クリスマスだと叫ぶマサムネとミズホ。

「と言ふか久々の登場ですねえ」

「メタなことを言わなくともさあ

「そんなこと言つたって作者さんが『トウガ達一行は扱いにくいつてことで私たちが……』

「そんな話の進まない一番の理由言つちやだめーー！」

そつまつてマサムネはミズホの言葉をたたきかる。

「モグモーグモググモーー」

「そうそうシモンが紙に書いたよつて設定上はオーレに行つてる途中なんだよ？」

「設定上とか行つてますよ……」

「あ、う…………気にするなよ……」

マサムネはしどろもどろとなる。

「と言づかっこ船の上ですよね～」

「船上でクリスマスパーティー中だなあ

「モグモグモーグ…………船上って言づかあの状況は戦場だよ兄貴……

……『』

そう言いながら……いや、書きながら田の前の状況を見る。

「ああ、トレーナーたちが戦っている……」

「トレーナーは田があつたらこうなりますからねえ~」

そう言いながら離れた場所からその惨状を見ている一人。

「クリスマスくら~い一人でゆっくりしたいよなあ~」

「元ふふ……ぐへへ~」

「……いつもの妄想状態に入ってしまった……」

額に手を当てながらマサムネは首を振った。

「おい、そこのお前! バトルしようぜ!~」

「ウハ~イ! 何のためにここにいたのか……」

「とにかくバトルを……」

「あなた……」

「「ん?」「

戦いを挑んできた青年とマサムネは声の方向を向く。

「私たち一人の幸せタイムを潰してくれてんじゃねええええ~!」

「え? な、何?~」

「私と勝負だ! 地獄を見せてや~りあ~」

「ああ……やはり壊れてしまつた……」

マサムネはその惨状を見ているしか他なかつた……

「行きなさい！ トガミー カミゴー。」

「ガメエークウス」

「ピカー！」

ミズホはトガミとカミゴの「ンビ」を繰り出した。

「そつそつ。オーレ地方に近いんだからオーレの戦い方に合わせて
基本はダブルバトルと」

そう言つて青年もボールを投げる。

「コア コア コア」

「プルリリリ」

青年はキングラーとスターミーを繰り出した。

「水タイプですか？ なめくさつてますか？」

「戦いは戦法だ。行くぞ！」

そう言つとスターミーは高速で一匹の周りを飛び回る。

「ガメエー？」

「ピカアー？」

「コア コア コア」

『ブンツ』

一匹がスターミーに気が取られているすきにキングラーが攻撃をする。

「ピカツ！？」

「ガメエックス！」

カミコをトガミが背中の甲羅で守る。

「ガメエツ！」

『ドカアー』

「ニアニアー」

キングラーはトガミの反撃により倒れる。

「後はスターミーだけです」

「しかしこのスピードについてこられるかな？」

「くつくつく……トガミー カミコー あれをやりますよー」

モウソウとトガミとカミコは準備を始める。

「ピィイイカアアアア」

カミコの手の前にでんじほうが現れる。

「カメカメカメカメ」

トガミはいそくスピンを始める。

「ピカツ！」

「ガメツ！」

そしてカミコはでんじほうを放つそして
トガミは高速スピンドルからのロケットずつき
そのロケットずつきでカミコを飛ばす！

「ピィイイイイカアアアアア！」

そして放ったでんじほうの電気を体におびボルテッカーを決行する！

「超高速で移動のボルテッカーだと！？」

「トガミの高速性を維持しながらのボルテッカー！ でんじほうの
高威力電気も帶びている！ これぞ必殺！ 超電磁砲【レールガン】
！」

そしてその攻撃は高速で動くスター＝のスピードをこえスター＝
ーに直撃する。

「プルリリリー！？」

そして戦闘不能となるスター＝。

「ざまあみろです」

「か、完敗だ……」

「しつしつー、どつかに行つてくださいですー。」

「なんて扱いだ俺……」

そう言つて青年は去つて行つた。

「さあて、もう個室で楽しみましょうか。ぐへへへ……」

「……あ、ハツピークリスマース！」

そう言つて二人は個室へと消えていった……

「ガ、ガメガ」

「ピカ、ピ、ピカチュ？」

「ガメガメガア？ ガメガメ」

「ピ、ピカアア！？ ピイカア チュウウウウ！」

「ガ、ガメガガアアアア！」

「モーグモーグ……」

残されていったポケモンたちはいつもの通りだつた。

クリスマス特別編　おしまい。

クリスマス特別編 マサムネとミズホの戦闘記録（後書き）

どうだったでしょうか。久々の戦闘です。

結構前から思いついてたものでやる機会がなかつたのですが……
さて、もしかしたら今回が今年最後の更新かも。

他の作品は更新するかもですが……
ではよいお年＆メリークリスマス！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6271q/>

ポケットモンスター ブレイカ

2011年12月25日12時45分発行